会の特色

1、会の経営は皆自発的になされ諸般の活動悉く会員の自覚を根幹としてなさる。

2、温かき熱と愛とによって結ばれし姉妹団結をなす

女子青年会の経営が、会員の自覚の下に自発的行動で行なわれていること、会員相互の結束の固さを「姉妹団結」と表現し、強調している。

また、出郷会員については「不幸なる境遇にある者とは常に文通によって鞭撻慰安の法をとり監督の一部の責任を果す」との心配りをする。出郷するものは会長の下で「出郷中の心得を訓」され身につける品を形見として与えられる。さらに、「女子青年たる自負を失わず赤誠以て主家に仕へる」ごと、帰郷の折には会に出席するよう促している。

以上、相原村の女子青年会の活動状況を見てきた。事業については、他の会と同様に各種講習会や相互研究会、生活改善の研究、見学旅行なども計画し、神社の清掃、敬老会の催しも怠りなく行なっている。特に注目を引くことは、「大礼記念簡易図書館」を経営していることである。青年会との関連では簡易図書館を共同で各支部倶楽部に巡回設置し経営しているとあったが、そのことであろうか。読書活動の活発さがうかがえる。

興味のあることは、会員が自ら五蛾飼育をし、品評会をして収入を得、その一部を会に寄付することである。雑巾作りなども共同で作業し、それを販売した収入を会に寄付して経済的支援をし、会を盛り立てていく姿勢が感じられる。

昭和初期のこの時期、農村にも経済恐慌の波が押し寄せており、糸価が暴落して、養蚕業には大きな打撃を与えていた。会の実践目標には、一九二八（昭和三）年、「現下の世相に鑑み内面的に覚醒し」「禁酒を実行」させようとある。そして、「見識を高めるため修学旅行を多く」しようと記す。会員たちの楽しみでもあったのであろう。

二九年の行動目標には「結婚改善」に「質素を旨とし冗費を省き儀式は最小限に」と記す。三〇年には農村の経済恐慌を自覚し、それを「切り抜けて行くよう勤めましょう」と励ましあっている。女子青年会の活動のなかに経済的な視点をも組み込んでいる。会の資産額が四三七円五〇銭というのも興味深い。ともあれ、毎年、会の行動目標を立ててしっかり活動している状況がよくわかる。

2　座間村女子青年会

相原村処女会が「女子の真の自覚の機を待って」組織された会であったのに比べ、座間村はどうであったろうか。

座間村女子青年会の活動についても、相原村女子青年会と同様に『武相の若草』76号に掲載されているので、それを見てみよう。

会の経費と会員数、事業概況などは、次の通りである。

青年団経費

本年度予算総額	四三五円
町村補助金	九〇円
その他の収入	一〇円
一人宛経費	一円一七銭

会員数

団員総数	二九一人
補習学校生徒	一七三人
その他	二八人
年齢範囲	一三歳～二五歳

事業概況

1、修養上の施設、補習教育就学出席の徹底、学芸発表、機関誌発行、パンフレット刊行、各種講習会「家事、作法、宗教その他　成人講座、輪読会、見学、実行要目の制定その貫徹、神社の参拝、清掃

2、体育上の施設、体育会、早起会、登山

3、社会的施設、敬老会、展示板の利用、勤倹奨励運動

4、社交娯楽的施設、針供養、一品会、茶話会、雛祭り、生花会

5、其の他　共同作業、二蛾飼育、休日の裁縫、収入の一部を会に寄付

本会の特色、時間励行、会員の質素、自治的訓練

事業

教育的施設　補習教育徹底、機関誌『あを雲』刊行、婦人講習会、敬老事業、修養に関する講演会、読書会、輪読会、青年カード利用

産業的施設　生活改善に関する講演会、合理的炊事法、洗濯法講習会、作法講習、絞染、屑繭整理、編み物、刺繍講習会、三蛾育、家事衛生指導講習、メートル法講習会

社会的施設　体育会、体育に関する講演会、大山、高尾山登山、早起き会

宗教的施設　平間寺参拝、宗教講和、その他

座間村女子青年会の活動は、相原村女子青年会と同様に修養上の講演会や講習会、読書会、敬老会、見学会などの行事をこなしている。『武相の若草』（76号）には、座間村女子青年会の発足の過程を記しているのでそのまま掲載する。

大正七年座間栗原両小学校付設実業補習学校女子部生徒を中心とし座間村処女会を組織せり然れ共当時は一般に之を理解せず会員の自覚も浅く後数年間は微々として振はず施設其他何等見るべきものなかりき然るに大正十一年現会長高松ミキ副会長となるや会長を補佐して熱心に会の発展に力め同十三年会長となるに及び益々施設の拡充に専念せり一方時勢の進運は会に対する一般の理解と会員の自覚を促進し一致協力其の進展に奮闘し会員の自治的訓練、農村女子としての教養に遺憾なきを期するの方途を講究しつつあるを以て其の成績頗る見るべきものあり（76号）。

座間村にはもともと自主自立の精神ができていて、処女会の活動も主体的に行われていたと思われたが、「会員の自覚も浅く」「微々として振わず」という。会員たちは、会の結成意義を十分には理解できていなかったのか。それが、高松ミキによって教え込まれ、発展を見たものと思われる。

一九二二（大正一一）年、座間小学校出身の高松ミキが代用教員として母校に赴任した。赴任早々座間村処女会を任され、指導にあたったのである。高松ミキについては中内むつが『時代を拓いた女たち――かながわの131人』のなかで「女子青年会に愛と情熱を注ぐ」として書いている。ここでも章を改めて後述する。

事業としては、養蚕を中心とした実習や講演会、炊事、洗濯、礼儀作法、和裁、洋裁の講習会から読書会、施設見学、大山登山など多角的な活動を企画し実践している。早起き会は毎月一日と一五日の早朝、幹部全員が神社に集まって礼拝、宮城遥拝、団歌合唱、万歳三唱のあと道路清掃などを行なっている。

二七年、御大典記念事業として、会の機関誌『あを雲』を発行した。『あを雲』の刊行は女子青年だけでの出版で特記に値する。これによって、会員たちが農村の女子としての誇りをもち、土に親しむ喜びや情熱、青春の夢を語り合ったのではないだろうか。

二九年発行の『あを雲』三号には、県連合女子青年会の活動報告、県強化総動員計画要綱の紹介、文芸欄、談話室などと記事が盛りたくさんで充実している。「談話室」には会員からの『あを雲』に寄せる思いが溢れていた。その中から二、三ひろってみる。

座間村女子青年会機関誌
「あを雲」第三号

（『座間小学校創立百周年記念誌』より）

・待ちに待った第二号の『青ぐも』やうやく我手に入りました。皆さまどんなにお待ちかねだったらう。早く皆さまにお目にかけたい此のりっぱな『青ぐも』私はすぐに皆さまのおうちにくばってあるきました。

・第二号の親しみある『あを雲』に幾回目を通したことでしよう。（中略）『あを雲』の隆盛なる事は私達会員が責任にある事は申すにも及びません。

・すくすくと伸び行く『あを雲』を抱く時、涙ぐましい喜悦を覚えずには居られません。（中略）私達会員の『あを雲』文芸欄にこそ誠の価値がある事と信じます。

会員たちの『あを雲』を待ち望む気持ちが伝わってくる。機関誌は、会員の拠り所であり、それによって農村の女として、土に親しむ誇りや情熱に溢れた青春の夢を語ったり歌ったりして励まし合っている姿が読みとれる。

また、『武相の若草』の会況欄にも座間村女子青年会の報告がたびたび掲載された。

一九二六年三月二〇日、座間村男女青年団総会では、宮原剛県社会教育主事補の講演の後男女団員の意見発表があった。女子の発表者は中戸川操ほか五人。四月の女子青年幹事会では、本年度事業計画、二蛾飼育について協議している（22号）。二蛾飼育は養蚕農家には欠かせない作業で、処女会でもその品評会をして、会の予算に当てていた。

また、宮前村女子青年会の短歌雑誌『野薔薇』の会員と交流をしている。八月の夏期講習会には五〇人余が参加、音楽指導などを受けている（50号）。三四年二月の男女青年会総会では、会員一八〇人出席、女子は揃いの着物を着服、「時局と禁酒について」

の講演を聴き、男女合同茶話会をした（116号）。

三〇年一一月、座間村女子青年の会員数は二九一人となる。この年、同会は相原村女子青年会とともに優良青年団として文部大臣表彰を受けた。

以上、相原村、座間村女子青年会が表彰され、その活動状況が『武相の若草』に紹介された中からそれぞれの会の活動を見てきた。会員数は、相原村一三〇人に対し座間村は二九一人と二倍以上の差がある。が、一人宛経費は一円三九銭と一円一七銭でほぼ同額に近い。事業内容を見ると両会とも補習教育の徹底、機関誌の発行、講演会や各種講習会、読書会などほぼ同様の活動をしている。体育、登山、早起き会、神社の参拝も同様。さらに養蚕業である二蛾、三蛾、五蛾飼育にも取り組んでいる。「村内の蚕種製造家から蚕種の寄附を仰ぎ三蛾宛会員へ配布し飼育させてその純益金」（「高松会長の抱負」）の一部を会に寄附する。会員たちの飼育で得た資金は会の収入として活用されたのである。

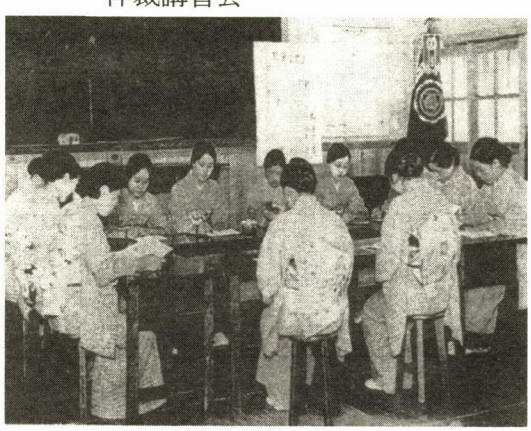
両会とも活動内容は似ているが、座間村の会は有力な指導者、高松ミキが会を常にリードしていた。一方、相原村の指導者の顔は見えてこない。が、会員たちの自主的、主体的な取り組みが大きかったのではないかと思われる。二八年の相原村女子青年会の会長は井上光子であった。

会の特色には「会の経営は皆自発的になされ諸般の活動悉く会員の自覚を根幹としてなさる」「温かき熱と愛とによって結ばれし姉妹団結をなす」とある。会の経営は、相原村女子青年会と同様に、座間村でも「会員の自覚」が根幹として重視されている。女子青年会の活動が、行政からだけの指導ではなく青年たち自身の自主性、積極性からも構成されていたと考えられる。

座間村女子青年会の活動

読書会

洋裁講習会



（『座間小学校創立百周年記念誌』より）

3　高松ミキ

熱です。愛の力です。そうではございませんか。何か一つの仕事を始めるとき、若しも熱がなかったら、愛の力が足りなかったら、決して成就しないのではないでしょうか。大正十一年の四月に、母校の座間小学校に赴任し、そこに微々たる女子青年会を見まして、これではならない、これを盛んにするのもしないのも、自分の決心、力一だと覚悟して、それから今年の四月まで、満十年間、私の最高の熱と愛の力を籠めて、育ててきたのです。

（『主婦之友』一九三二年一一月号）

座間村女子青年会を、「最高の熱と愛の力」で育て上げてきた高松ミキの言葉である。持てる力を全開にして事業を企画し、実践し、育て上げてきた自信に溢れている。

一九三〇（昭和五）年一一月二日、高座郡座間村女子青年会は全国の優良団体の一つとして表彰された。この表彰の二年後、『主婦之友』の記者からインタビューされたのであった。ミキの言葉には「一言一句聴く人を心の底から揺動かさずにはおかぬ力を持っています」と、女性記者は記している。

高松ミキは一八九九（明治三二）年高座郡座間村に生まれた。小学校当時から勉強好きで成績優秀だった。しかし、家の事情があって高等科の途中で退学せざるを得なかった。学校を去るときの作文には「我が最も愛すべき此の学校へ来る日数も僅かになった。（中略）親しい友達とも離れて、寂しく家に暮らすのである。（中略）私はもう此の学校を退くのであるが、あくまでも此の学校のためになって、立派な学校にしたいと思っている。（中略）学校のためにつくそうと思う」（『座間小学校創立百周年記念誌』）と。

家の働き手として学校を退学したミキだが、多忙な中でも寸暇を惜しんで勉学に励み、教師の資格を得たのではないかと思われる。二〇歳のとき、視学に認められ抜擢されて都筑郡の尋常高等都田小学校の代用教員となる。

一九二二年、郷里の尋常高等座間小学校に転勤する。待望の母校の教師になったのである。と同時に座間村処女会（二四年、座間村女子青年会に改称）の指導を任される。そしてまもなく、春季の大会が開かれた。そこに集まった娘たちは「会の目的も趣旨も知らず」、ただ着飾って雑談をするだけで、議事進行もままならない状態だった。それを見てすっかり失望する。そして、これからの日本の農村を背負って立つ若い女たちを自ら「熱と愛の力を込めて育てていこうと決意」（『主婦之友』）したのである。

そして座間村処女会の会長となり会の活動を活発化する。まず、「村の五部落一五字から2人ずつ役員を選び、毎晩のように出かけては直接話し、夜の集まりに娘を出すことに反対する親たちを説得した」（『時代を拓いた女たち』）。

「娘はろくなことを覚えてこないだろう。忙しくて家の娘は出せないんだ」という親を訪ね、「立派な婦人に育て上げるために、会に出席させて欲しい」「家の仕事を疎かにするようなことはさせません」と説いて廻った。また、娘たちには「一人の立派な婦人とならなくてはならない。」「お互いに励まし合い、助け合って、立派な人間として修行を積みましょう」と語りかける。

ミキの熱心な勧誘や薫陶、組織的な指導を受け、会員たちはミキを敬愛するようになり、役員たちも積極的に活動するようになる。会の内容としては、講演会や講習会（家事、衛生、作法や一般の修養など）を開催し、工場や新聞社などの見学視察、談話会や研究の発表会、読書会なども活発に行なった。早起き会は、毎

月一日と一五日の午前五時神社に集合し礼拝、宮城遥拝、団歌合唱、万歳三唱のあと道路清掃を行なっている。

さらに、機関誌『あを雲』を刊行した。それは、会員の心の支えとなり、会員相互の連帯感が一層深まった。

会の運営費は、青年団や村の集会のときお弁当作りをしたり、仕事着の注文などを受けて縫い上げたりして収益を得る。特に、養蚕業が盛んなことから、改良種の良いものを無料で分けてもらい各自で研究しながら育てて繭をとる。それらの収益の内いくらかを会に寄附する。それらを会の基金として積み立て、活動資金として活用している。

こうした活発な活動が評価され、一九二七（昭和二）年、小学校時代の恩師鈴木利貞とともに青少年教育功労者として県の表彰を受けた。さらに、三〇年一一月には、会員二九一人を有する座間村女子青年会は優良青年団として文部大臣の表彰を受けたのである。

文部大臣表彰を受けたときの座間村女子青年会の報告書には、指導者の「高松会長の抱負」が四分の三を占めている。高松は次のように書いている。

世はあげて私達に真の女性としての自覚を叫ぶことの切なる時、本会の目的遂行に努力しより深く修養に身も心も砕かねばならぬと思いました。（中略）全会員に対し団結して心の統一を計らねばならない、そして会の目的使命か会員の一人一人を貫いた生命であり誰もが一様に会長であり、役員であり、会員でなければならないとは私の心からほとばしり出た言葉でございました。

団結して心の統一を計ることは何よりの先決問題と信じ可成会合の機会を多く重ねました。（中略）本会の向上発展に就いて又は常々研究し合った事柄等、又は当会員が日常愛読して居ります書籍雑誌の不可解な点は相携えて研究し合つたのでございます。

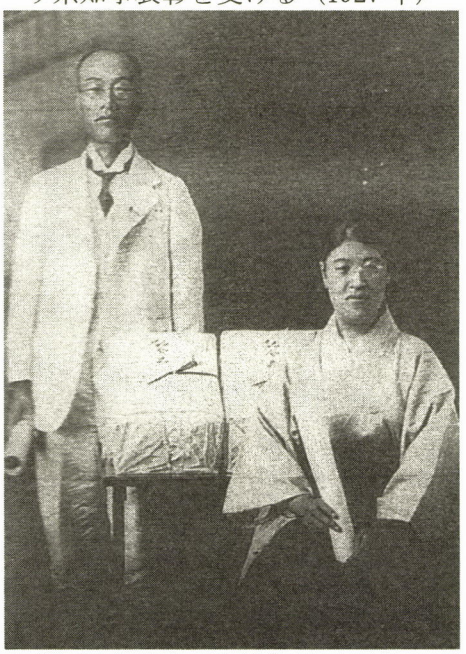
尚この外、最善の努力を払つたのは本会の柱石となり、重鎮となるべき役員指導でありました。役員会は常に幹部指導を目的としたもので常に私は熱がありたい、愛がありたい、熱と愛は私共の生命でなければならぬとは真心からなる言葉でござ居ました。

真に当会を自分のものとした時には熱も愛も湧き大勢を動かす大きな力も自然に生まれる事であろう。役員たる者は宜しく時代の進展に目覚めて重大なこの責任を果たすよう溢れる力に依って親切な愛導者になりたいと心から願ったものでございます。（中略）

最近女子青年会の活動は全国的に真剣になって参りました。男子青年団の刺激によるものと思いますが、時代に目覚め女子が本当に心眼を見開き自分を社会に見出してきた実証だと非常に喜ばしく存じます。今の時代におきましては生活の充実を図り、女子としての人格を完全にするということは、結局何のためにするかと考えますと良妻賢母たらしめるためでございます。良妻賢母は私共の最後の目的であり理想であると申上げてこの稿を終ります（76号）。

指導者高松ミキは、「団結して心の統一を計ることは何よりの先決問題と信じ」、なるべく会合の機会を多く重ねたという。また、役員会は幹部指導を目的としたもので、常に熱と愛をもって指導にあたっていたという。

恩師鈴木利貞と青少年教育の功により県知事表彰を受ける（1927年）



座間村女子青年会の指導者たち
前列中央が高松ミキ

（『座間小学校創立百周年記念誌』より）

「熱と愛は私共の生命」という。そして役員は「時代の進展に目覚めて重大な責任を果たすよう」溢れる力に依って親切な愛指導になりたいと願う。そして、熱心に指導をすすめた。「時代に目覚め女子が本当に心眼を見開き自分を社会に見出」し、女子としての人格を完全にするということは、結局、良妻賢母に育て得る所以であったという。また、団結して心の結束を計ることは、とりもなおさず、国民精神作興の総動員運動へ続くものであり、銃後の護りを固めるための礎にもなっていた。

時代の要請があったとはいえ、それでもミキは若者たちに「一人の女として」成長し、自立することを願ってはいた。

文部大臣表彰を受けた三〇年からミキは高座郡連合女子青年会の会長となり、翌年、県連合女子青年会評議員に加えて新たに理事に選ばれた。しかし、三二年、教員の大移動で座間小学校を離れなければならなくなった。代用教員だったので、採用してくれる学校がないと職を退かねばならない。

教職も女子青年会の役職も辞して、やむなくミキは座間を離れ、足柄上郡松田の牧野製糸工場に教育部主任として勤務した。

翌年、上京するが健康を害し二年間療養する。この間、好きだった書道に専念し、めきめき腕を上げ、敬秀の書号を得る。やがて健康を取り戻すと、三五年、東京西巣鴨に書道塾愛日書院を開き書道教師となった。持ち前の指導力で近隣の子どもたちを熱心に指導する。一回の稽古では紙は三枚までとし、無駄な余白を許さない。筆は使用に耐えなくなるまで使わせた。子どもたちに、ものを粗末にしない経済観念を植え付けると同時に、ものの命を尊び慈しむことの大切さを教えた。書道だけでなく、時には市井のこと、歴史の話をするなど人生の師として子どもたちから慕われ、親たちから感謝された。

四一年一月、国の方針で隣組制度が布かれると、子ども隣組若菜会をつくる。周囲からは若菜会の今後の活動が期待されていたが同月三一日、腹痛と発熱で倒れてしまった。一時は小康を取り戻したが、二月一四日、帰らぬ人となった。

時代の要請の中で、ミキは精一杯女子青年たちと向き合い、彼女たちが女として自立し、成長することを願っていたが、志半ばで青年会から手を引かざるを得なかった。すでに三七（昭和一二）年、日中戦争が開始され、三九年国民精神総動員運動が始まっていた。戦時体制の中でミキが何を考えていたのかは知る由もないが、真に女の自立を考えていたとすれば、それはもう少し先のことであった。

それでも、座間村女子青年会に残した高松ミキの功績は大きく、その記録は今でも『座間市史』に記されている。

4　田戸マサヤ（高座郡連合女子青年会副会長）

一九三〇年の文部大臣表彰の、青年団功労者五人の中に、同じ高座郡連合女子青年会副会長の田戸マサヤがいた。『武相の若草』は田戸マサヤについて「輝やく人々」のなかで次のように紹介している。

明治四十一年綾瀬尋常高等小学校就職以来同村には小学校卒業後の女子に対し修養機関の皆無なるを悲しみ綾瀬村女子青年会の創設を思ひ八方奔走の結果大正十三年同会の設立を見るに及び事務所を綾瀬小学校に置き一切の事務を処理し自ら進んで指導の任に当り熱心と犠牲的精神とを以て会に処すること七年以て今日に至る団員よく親和し自治的にして協同一致の精神に富み今や同村唯一の女子修養機関として益々其の成績良好なるは一に現会長の指導宜しきによるものと認む。

尚大正十三年、高座郡連合女子青年会の発会に当り副会長に推され翌年団員一致会長に推薦す以後六年間今日に至る迄事務所を綾瀬小学校に置く諸般の事業及事務は悉く同氏の手によりて行はれ昭和五年同会副会長となる女子青年団体発達向上のため、全力を傾注し奮闘努力せる結果今日にありては各町村団体及郡連合女子青年会共に県下に於ける模範的団体として一般の認むる所となる之れ皆同氏の指導宜しきと不断の努力とに外ならざるなり

同氏は性質温良着実にして不言実行の長所を有し思慮深く謙譲の美徳を以て事に当り家にありては父亡後一層母に孝養を尽し弟妹を導き性来病弱なる身を以て常に本務と共に社会教育事業に尽瘁し其功績見るべきもの多く現代婦人の模範とするに足る。

綾瀬村女子青年会昭和五年度事業実施計画事項の主なるもの左の如し。

1、修養的施設、実業補習学校出席督励、講習会、講演会、見学旅行、意見発表会
2、産業的施設、屑繭整理講習会、編物、手芸、料理、洗濯等の講習会
3、娯楽的施設、音楽会、懇談会、旅行、舞踊劇（76号）

田戸マサヤは、一九〇八（明治四一）年、綾瀬尋常高等小学校の教員として赴任し、一九二四（大正一三）年、綾瀬村女子青年会を創設する。高松ミキと同様に教員として熱心に会の指導にあった。その努力が認められ、二八年には、神奈川県連合女子青年会の高座郡代表役員、理事及び評議員として活躍する。

一九三〇年、青年団功労者として文部大臣の表彰をうけたのであった。この年高座郡連合女子青年会副会長となる。以後も、高座郡の代表として、県連合女子青年会の役員として県とかかわり、その実力を発揮した。

おわりに

高座郡の処女会・女子青年会は、相原村、座間村女子青年会の事業実施計画にあるように、女子に必要な知識や教養を得る修養機関として組織された。講演会や講習会、意見発表などが活発に行なわれ、編物、手芸、料理などの講習会も行なわれている。その事業計画の多さに目を見張った。旅行やスポーツは会員たちの楽しみの一つでもあったろう。

特に、高座郡で目を惹く活動は、地元産業の養蚕に力を入れていたことである。二蛾、三蛾、五蛾飼育や繭の品質の研究、管理をし、展示会や品評会を行ない、男女青年会で優秀賞を競ったりしている。また屑繭の整理講習会をも行なう。高座郡が養蚕業の盛んであったことがわかる。それはまた、地場産業を支える活動でもあろう。青年たちの養蚕業にそそぐ情熱は、そのまま地場産業の振興にもつながり、また、女子青年会の活動費用の一部にも活用されていた。

そして、「時代に目覚め女子が本当に心眼を見開き自分を社会に見出し」ていこうとの高松ミキのような指導者がいたことも特記されよう。それが結局ミキのいう「良妻賢母」につながる道であったとしても、女子青年たちは生きいきと活動していたし、団結して会の行事に取り組むことが重視されてもいた。

さらに、多くの男女青年会に独自の機関誌が刊行されていたことも驚きであった。心の想いを文章に託し、表現することの喜びを味わい、お互いの意見交換の場としても有効な手段である。それぞれの心の糧として、育まれていたことと思う。高座郡に『武相の若草』の購読者数が突出して多いことも頷ける。

意見発表も盛んに行なわれていた。自分を見つめ、社会を見据え、生きる力の活力になっていたことと思われる。一九二五年頃の発表では「婦人の覚醒」「人生の春」など将来に対する明るさが感じられ、二八年頃にも「女子の使命」「輝く生命に向かって」と意志の強さが感じられた。三七年頃になると「心身の鍛錬」「女性の務」など、国策に沿った発言が多くなる。

三一年満州事変が起こり、三七年日中戦争開始。同年九月、婦人銃後の誓約がなされ、「皇威の宣揚」「皇軍の健勝祈願」などが行なわれ、国民精神総動員活動が盛んになった。

団結して活動するということは、個人の意思に関わらず、皆が同じ方向に進まざるを得ない行動に取り込まれる危険性をはらんでいる。国の指導者たちは当初からそれを見込んでの青年団の組織作りではあった。真剣に組織作りに取り組んでいるうちに、いつの間にか、国家の意向通りに活動する団体として、政治の中に取り込まれていき、戦争に協力していく。その過程が読み取れ、改めて国の動向を見極めることの大切さを考えさせられた。

参考文献

長田かな子『ひたむきの年輪―ぬくもりの相模原近代女性史―』相模経済新聞社　一九九八年
長田かな子『母たちの時代―聞き書　さがみ野の女―』昭和図書出版　一九八〇年
宮川達子「敬秀　高松ミキ女史略歴」『手向草（高松ミキ先生追悼

録)』発行年不詳
中内むつ「高松ミキ」『時代を拓いた女たち―かながわの131人』
神奈川新聞社　江刺昭子・史の会　二〇〇五年
座間市管理部行政管理課市史編さん係『座間の語り伝え　村制編・Ⅱ』　一九八四年
文部省社会教育研究会編集『社会と教化　第一巻　第二号』
一九二一年
文部省社会教育研究会編集『社会と教化　第二巻　第五号』
一九二二年
文部省社会教育研究会編集『社会教育　第一三巻　一一号』
一九二七年
神奈川県県民部県史編集室編・発行『神奈川県史　通史編5
近・現代（2）』一九八二年
神奈川県立教育センター編集『神奈川県教育史　通史編　上巻』
一九七八年
座間市教育委員会編集『座間教育史　3近現代資料編1』
一九九六年
座間小学校創立百周年記念誌編集委員会『座間小学校創立百周年記念誌』年不詳
相模原市教育委員会編集『相模原市教育史』一九八四年
寒川町編・発行『寒川町史　7通史編近・現代』二〇〇〇年
寒川町編・発行『寒川町教育史　資料編』二〇〇七年
海老名市教育委員会編集『海老名市教育史』二〇〇一年
綾瀬市編・発行『綾瀬市史　7通史編近・現代』　二〇〇三年
藤沢市教育委員会『藤沢市教育史　資料編　第三巻』二〇〇一年
大和市編集・発行『大和市史』3通史編　近現代　二〇〇二年
茅ヶ崎市編・発行『茅ヶ崎市史』通史編　一九八一年

寄稿・投稿に見る期待される女子青年像

江刺　昭子

はじめに

『武相の若草』には、巻頭言、論壇、エッセイ欄などに多くの人が執筆している。顔ぶれは多岐にわたり、中央の政治家、教育者、ジャーナリストなど著名人のほか、内務・文部両省役人や軍人も寄稿し、神奈川県の政治家や社会教育関係者、男女青年団幹部らも盛んに執筆している。本誌のために執筆したのではなく、男女青年団の総会や講習会の講演筆記や要約記事もある。通読すると、どちらかというと男子を意識した記事のほうが多いが、男女を問わないもの、女子青年を対象にした記事も少なくない。

これらを読むと、関東大震災後から日中戦争開始直後までの時期に、どのような青年・女子青年になってもらいたいか、という書き手の要望と期待が読みとれる。その中で特に女子青年に向けて書かれたものについて執筆陣と内容について検討してみたい。また、国や県、識者らの期待にこたえて、読者の青年団員、特に幹部クラスの団員の意見も「若草論壇」などに掲載されており、女子より男子青年の意見のほうが多いが、一部に触れて、青年たちがどう受け止めたかも探ってみる。

執筆者の顔ぶれ

女子青年向けと思われる文章の執筆者、肩書、タイトルを一覧表にした。肩書が記されていない場合は他史料から補った。他史料からも不明の人を除いて、分野別に分類すると次のようになる。傍線は女性である。

政治家、軍人、中央官僚

後藤新平・尾崎行雄・山梨半造・坂千秋・武部欽一・山上満之進・有馬頼寧・片山哲・守谷栄夫・東郷実・野口喜一・猪熊貞治・小橋文部大臣・田沢義輔・関屋竜吉・内海一雄・東郷実・香坂昌康

教育者

田尻常雄・新渡戸稲造・嘉悦孝子・高島米峰・大江スミ子・安井哲子・大島正徳・前田房子・竹内茂代・下田次郎・宮原剛・倉橋惣三・藤井千枝・三輪田元道

評論家、作家、学者、ジャーナリスト

三宅雪嶺・山田わか・三宅やす子・木下東作・ブラウン・上杉慎吉・・高良（和田）富子・ハロルド　フォード・下位春吉・三島章道・二宮わか・江渡狄嶺・安岡正篤・ラムステット・北玲吉・荒井時敬・里見弴・林癸未夫・吉田絃二郎・徳富蘇峰・

深作安文・柿木利一・平等通昭・石野瑛・塚原政次・松尾弁匡・穂積重遠・吉川英治・杉森孝次郎・倉田百三・友松円諦・武者小路実篤・神川彦松・吉屋信子

神奈川県の政治家

清野長太郎・井坂幸・大谷嘉兵衛・渡辺勝三郎・平沼亮三・池田宏・山県治郎・遠藤柳作・杉山助成・石田馨・半井清・青木巽

神奈川県の社会教育関係者

根岸嘉明・藤井徳三郎・花鳴生・服部纉・萱場軍蔵・国分習也・金井利秋・原藤蔵・福本柳一・荒井友三郎・池田民子・半井知事夫人・佐藤秀三郎・中原啓造

男女青年団員

小柳牧衛・井上直蔵・戸塚九一郎・白井鋼之助・溝口慶子・外山福男・土屋利保

創刊号のメッセージ

創刊号の執筆陣は豪華で、一般向けの総合雑誌のような顔ぶれである。関係者の意気込みがうかがえるが、女子だけでなく、男子も含めた県の青年団員を対象にしたメッセージである。

県知事清野長太郎は、「我が県下の青年処女諸君！」と呼びかけ、天災地変の禍害、つまり関東大震災からの復興事業には青年処女諸君の「溌剌たる元気と敢為の勇猛心」が必要だと期待を寄せている。

三宅雪嶺は、日本帝国が世界に頭角を表し他国から「容易ならぬ刺激を受ける際、帝都付近の土地に於て最も多く努力する覚悟」を求める。

元内相の後藤新平は、「自治の精神」が国家の土台石であり、社会の柱で、この柱がしっかりして初めて健全な文明が建立されるとする。

神奈川県出身の政治家尾崎行雄は、創刊号だけでなく四回執筆している。その主意は、まず自己を知ることから始めよ、井の中の蛙であってはならないと言う。視野を世界に広げよということである。そして、「憲政の神様」と称される人らしく、立憲主義の本道とは何であるかを、滔々と述べている。

軍人の山梨半造は、青年が「尚武の精神を失い浮華文弱に流れている」。その病を治すには「贅沢を慎むのが第一の良剤」とする。

鶴見総持寺住職の新井石禅は、一九二四年の国民精神作興詔書を引いて、権利を主張するより義務を遂行する覚悟を強調し、献身犠牲の精神を説く。両者は国家を優先する立場が明瞭だ。

山田わかは、米国住まいの経験からか、日米問題は米国が日本人労働者を排斥するところから始まっているとして、「寄生虫的乃至惰弱な風習を排して、健全な人生観の上に立ち、強固な意志を保ち有益な業務に励むならば、如何に傲慢無礼な米国でも、いつかは我が日本国に頭を下げてこなければならない時が来る」と対米戦争を予測するような文章を寄稿している。

創刊号のご祝儀原稿らしく、勇ましく、いかめしい書きぶりのものが多く、国の現状を憂え、若い人を教化の対象としてとらえている。その中では尾崎行雄の井の中の蛙になるなという教えは貴重である。

日本を見る他国の目にただならぬものがあるという認識は全ての筆者に共通しており、初期の本誌には、読者に国際意識を持たせようという意図がみられる。花鳴生は、4号の「回顧一年—大正十三年を送る」で、反動と思想団体が活躍した年だと位置づけ、赤露の大立者レーニンが死んだ。「彼の死は露国にとってはいうま

40～42	守屋栄夫	内務省社会局社会部長	婦人に対する希望
43	前田房子	教育者	日本の婦人と西洋の婦人
	三宅やす子	作家	小説の作者と読者
45～46	藤井徳三郎	県社会教育主事	海外に於ける女子青年の運動１、２
45～46	中根環堂	鶴見女学校校長	欧米の婦人気質、続
47	竹内茂代	生活改善同盟会理事	女子青年の使命
48	池田宏	県知事	女子青年に望む
	徳冨蘇峰	ジャーナリスト	昭和時代日本帝国女性に関する考察
	溝口慶子	青年団員	思想国難と女子の覚悟
50	池田民子	県連合女子青年会会長	人たるの資格
52	藤井徳三郎	県社会教育主事	農村女子及女子青年会
57	和田富子(高良とみ)	教育者・心理学者	婦人と社会生活
58	金井生	県社会教育主事	女子青年会に就て（巻頭言）
60	福本柳一	県社会教育課長	女子青年の修養と使命
	下田次郎	文学博士	昭和の女子青年
66	西野みよし	東京女高師教授	衣服と食物の節約
67	溝口慶子	県連合女子青年会副会長	日本女子の将来に就いて
72	国分習也	県寺社兵事課	夏季に於ける婦人の服装
74	松浦一		白道（県連合女子青年会の修養講座）
75	中沢美代	東京女高師教授	婦人と家庭経済
76	宮原剛	御所見女学校長	昭和の村
	溝口慶子	県連合女子青年会副会長	実行の女子となれ
82	関屋竜吉	文部省普通学務局長	日本女性の特質
83	内海一雄	農林省技師	農村副業に就いて
85	高良富子	教育者・心理学者	農村に於ける婦人問題
88	田沢義鋪	大日本連合青年団団長	女子青年の修養に就て
	堀井講師		我等の郷土箱根の概観（女子修養講座）
90	県連合女子青年団		在支武相の勇士皆様へ
108	小林珠子		女子の使命に就て
125	藤井千枝		農村の女子青年諸子に檄す
128	しげる生		結婚式に就いての私考
141	半井清	県知事	男女連合青年団総会に於ける告辞
	半井知事夫人	知事の妻	県連合女子青年団総会に於ける告辞
156	半井清	神奈川県知事	男女青年団時局懇談協議会での訓辞
159	中原啓造	県連合男女青年団団長	国民精神総動員に際し県下男女青年団
161	吉屋信子	作家	北支上海を視察して

『武相の若草』掲載の女子を対象にした主な巻頭言・論文・随筆・講演筆記・講座

号	執筆者名	肩書	タイトル
1	清野長太郎	県知事	県下青年処女諸君に
	三宅雪嶺	評論家	武相の地と人
	後藤新平	政治家	青年に示す
	尾崎行雄	政治家	武相の男女青年諸君に告ぐ
	山梨半造	陸軍大将	青年男女諸君に告ぐ
	新井石禅	総持寺住職	神奈川県青年処女に望む
	井坂幸	横浜商業会議所会頭	武相の青年に寄す
	田尻常雄	横浜高等商業学校長	武相の若草発刊に就て
	山田わか	評論家	我が郷土の青年男女諸士
2	花鳴	県社会教育主事	巻頭言　秋
	渡辺勝三郎	横浜市長	武相の若草の発刊に際して
	根岸嘉明	県社会教育主事	若き世紀におくる（一）
4	三宅やす子	作家	自然の懐にめざめよ
	山田わか	評論家	農村生活と都会生活
	相田隆太郎	文芸評論家	思想家評伝　エレン・ケイ
	猪熊貞治	逓信省簡易保険局書記官	勤倹奨励と世論
	花鳴生	県社会教育主事	勤倹と貯蓄（巻頭言）
6	新渡戸稲造	教育者	国際心を養え
	葉山あき子		夢と現実
7	新渡戸稲造	教育者	無駄なき生活（現代婦人のために）
8	素人冠		巻頭言　生命の泉に汲め
	藤井徳三郎	県社会教育主事	女子青年会の使命
	時田田鶴子	横浜婦人矯風会会頭	処女会の近況に感じて
10	嘉悦孝子	教育者	次代を作る中心としての婦人
12	二宮わか	社会事業家	都会に憧るゝ農村処女の方々に
18	無双庵主人		若草動話・婦人の不平
	蜂谷りん子		家庭の意義
20	望月梅渓	橘樹郡の青年団指導者	処女のために
22	東京日日新聞転載		妻としての女性の自覚
24	高島米峰	宗教家・教育者	男だけの―女だけの―世界ではない
25	大江スミ子	教育者	主婦の任務とその修養
29	逸名子		婦人の日常生活
35	池田民子	県連合女子青年会長	女子団体の使命
37	山田わか	評論家	若き人達へ
38	安井哲子	日本女子大学校長	青年の団結力
	池田民子	県連合女子青年会長	心の健康
	久西よし江	都筑郡女子青年団員	女子にも教育

でもなく大きな傷手に相違ないが、世界にとっても惜しむべきものであった」という認識を示している。続けて、英国労働党が政権を掌握したこと、米国では穏健な共和党が選挙に勝利したことなど、世界情勢の解説に三ページを費やしている。

同号には、「思想家評伝1」として相田隆太郎がエレン・ケイについて書いている。ケイは青鞜時代の平塚らいてうが大きな影響を受け、翻訳もしているスウェーデンの思想家。相田は簡単な伝記に加えてケイの恋愛至上主義や母性主義を解説している。続けてH・G・ウェルズ、ガンジーについて連載している。

6号（一九二五年二月）には、新渡戸稲造の「国際心を養え」という談話がある。日本の国際的立場は「孤立無援」で列国に指弾されている今、いたずらに権利を主張し、利権に汲々とするのではなく、国際心、つまりインターナショナルマインドの養成が急務だとする。それは反愛国精神ではない。国際心とは、「自国に対して有する愛国の観念を、移して以て対手国人の心情に及ぼし、対手国人の愛国の精神をも尊重するの精神である」としている。男女青年に正しい国際認識をもたせようという編集サイドの方針がうかがえる。

ここまでは、女子青年だけに向けたものではないが、では、『武相の若草』はどのような女子青年像をよしとしたのだろうか。テーマ別に検討してみる。

女子青年会のあり方

『武相の若草』の創刊に力を尽くした県の社会教育主事藤井徳三郎が、一九二五年二月の女子青年会幹部研究会で講演した記録から見てみよう。藤井が思い描く女子青年会とは、どんなものだったのか。

○藤井徳三郎「女子青年会の使命」（8号・二五年四月）

女子青年会には一つの型がある。指導者が計画し、校長らの発起で会員を募り、一年に一回、総会や例会を開いて、家政や料理の講習会、文庫の設置、体育の実行要目の相談などをしている。経費も少なく、僅少の会費と補助でやってきた。しかし、修養が学校延長指導者中心になっていて、修養するというより修養させられる会になっている。そうではなくて二つの根本が重要だと藤井は言う。

一つは、「社会団体」でなければならない。計画から一切の事業すべてを会員自身の手と頭で運んでこそ、女子青年のための会である。そのためには、会員から役員を出し、引っ込み思案を捨て社会生活の訓練を目的に事業の経営をすべきだ。女子青年会は修養機関だが、社交機関として冠婚葬祭など全体の社会生活のことにまで立ち入ること。さらに「生活団体」としての歌会、読書研究発表会、運動会など日常生活を趣味化していくこと。また、職業的教養に立ち入って、物質生活の方面に関心を持ち、さらに職業的教養を成す事業で収益を得れば永続的な会になるとする。

ここには、従来の処女会の目的に必ずかかげられた「婦徳の涵養」といった字句は出てこない。女子青年会が修養機関であることは押えながらも、女子が自分たちの手で会を運営し、趣味を豊かにして、事業収益をはかりそれで会を運営すること。つまり、女子が主体的に青年会活動に関わることを望んでいる。

○素人冠の巻頭言「生命の泉に汲め」（8号）

日本の女性はこれまで「石にひしがれた雑草」のように「性」と「伝統」の盤石の下闇に因循な生活を続けていた。しかし今、「盤石の下からかそかな緑の芽を出して来た。『女性のめざめ』の根、『女権拡張』『婦権伸長』の茎、そして『婦人参政』『母性保護』

の葉、それらはとりどりの色と形とをもって『問題』の中に錯綜している」と女性参政権運動や母性保護運動の動きを認めながら、しかし、「外にのみ向おうとする運動は暗に動く多くのはらからをどうしようとしているのか」と問いかけ、「女性のためではあるが、現実なる多数のはらからの為ではあり得ない現状である」と運動を牽制し、「まず本然なる生命の泉に汲め、耳を自然の夢に傾けよ」としているが、言いたいことは掴みにくい。署名は「素人冠」とあるが、東京朝日新聞の名物記者で、エッセイストでもあった杉村素人冠なのか？

同号には、「女子青年幹部研究会」に出席した人の「所感」も掲載されている。その一つ、横浜婦人矯風会会頭の文章を紹介する。

○時田田鶴子「処女会の近況に感じて」（8号）

農村で真面目に活動する「処女方」は見上げたものだとほめた上で女性運動の現状を述べる。婦人参政権運動の結果、女性の手にこの「権能」が与えられた暁には、「国家に無限の害毒を流しつゝある公娼制度は全廃せられ、禁酒法案も無事に通過するでしょう」と。前年一二月には、日本基督教婦人矯風会が主導して婦人参政権期成同盟会が発足し、参政権を求めて対議会活動を開始している。矯風会が参政権獲得運動に力を注ぐ大きな目的は公娼廃止だから、時田の発言はそれを踏まえていることになる。

一九二六年訓令を反映して

しかし、先に述べた藤井路線は、二六年一一月に内務・文部両大臣連署による訓令「女子青年団体の指導誘掖に関する件」、つまり政府が初めて未婚女子の全面的掌握に乗り出した訓令が意味する内容とはズレがある。女子青年団体が修養機関であるというとらえ方は同じだが、訓令で強調されているのは、「其の人格を高め健全なる国民たるの資質を養い」と国民国家の一員としての自覚を強調し、「公共的精神を養い社会の福祉に寄与すること」と国策協力を言い、「忠孝の本義」「婦徳の涵養」という伝統的女性観を改めて確認している。

そして二七年七月には神奈川県の女子青年団体が統合されて県連合女子青年会が発足する。その発会式で会長の池田民子が女子青年のあり方を述べる。これを受けて二八年に再び藤井が書いた女子青年会論は、8号に比べかなりトーンダウンしている。さらに藤井に代わって二九年に県社会教育課長になった福本柳一の挨拶を読むと、女子青年会への期待の変化が読みとれるので、三人の講演筆記を紹介する。

○池田民子「女子団体の使命」（35号・二七年七月）

農村の女子教育機関は程度が低い。その欠陥を補う中等教育の補助機関が女子青年会である。「女子青年会の目的は、現在も将来にも会員各自が、修養に努め知識の向上に励み、婦人独特の美質と天賦とを豊富に発揮し、完全円満なる人格を作っていくという広い意味に於いての教育機関であり、なお趣味の向上をはかり、協同団結の精神を養う機関であります」。

農村では趣味の程度も低い。しかし、趣味の対象は人工的美より自然を対象とした美を愛好することこそ必要。日本の婦人は団結力が薄いが、他の人と快い提携を結ぶことが大切で、それには女子青年会のような団体が適している。女子は受動的だが、男女お互いに提携し、家庭と社会を造ることが必要。女性をして自覚あらしめたい。このようなことは団体の力に俟たなければならないと述べている。

○藤井徳三郎「農村女子及女子青年会」（52号・二八年一二月）

女子青年会は指導者が作るのではなく、「若い女子が集まって

自然にできるのがいい」。会長は会員から選び、目的として大切なのは「社交と修養」だとしているのはあまり変わらないが、「社会的団体」という言葉は出てこない。「社会」という言葉が、政府が取締りに躍起になっている「社会主義」を連想させるからだろうか。では、藤井の言う「社交」とは何か。

新年の拝賀式などを男女一緒に行うことで、村の平和が保てる。ある地方では、小作争議が起こりそうになったが、子供や青年には何の関係もないといって、親しく交際したので、起こらずにすんだ。知識は大切だが、女子青年会の眼目は婦人の徳操を高めることで、学校に行けば行くほど母性愛が薄くなる。学校に行かない人のほうが母性愛を深く持っている。この頃都会で職業を持った人は、中性になり貞操の観念が乏しい。これは国家の問題なので、充分に考えていただきたい。

○福本柳一「女子青年の修養と使命」（60号・二九年八月）

県の女子青年会は、一四八団体・三万の会員と実態を述べ、不良少年少女が発生するのは、子供が健全に育つために必要な「愛と平和」が家庭に欠けているからだとする。その家庭の平和を維持するのは「女子の力」である。人としての修養は、学校を卒業して終わるのではなく、一生の過程にあるのだから、女子青年会を発展させてほしいという趣旨。

女の生き方指南

主婦の役割や家庭生活の意義についても、さまざまな人が教訓めいたものを書いている。主婦予備軍の女子青年たちに対する生き方指南ともいうべき文章が多い。

○根岸嘉明「若き世紀におくる（1）」（2号・二四年一〇月）

根岸は県社会教育主事で、女子青年に対する自分の想いを書いている。「A子氏へ」という書き出しで、百姓に学問はいらないと言われる上に、「女性は女なるがゆえに学問などいらぬ」観念が輪に輪をかけて強要されてきた。あなたたち若い女性はこうした二重の桎梏に泣かねばならなかった。このような封建的な奴隷精神が今の世にも深く食い入っている。しかし、近代精神は個人を発見した。現代人はさらにその中に「人間」を発見しなければならない。あなたは芸術に憧憬を持っているから、それがあなたを高い道へ導くであろう。あなたの周囲が無理解でもあなたはあなたの道を歩み続けられるのがいい。そして真に「人間発見」「人間創造」への奉仕にあなたの全生活を捧げられるように祈って筆を擱きます」と励ましている。理想主義的な内容だが、（2）が見当たらないのは、編集部内で異論があったのか。

○三宅やす子「自然の懐にめざめよ」（4号・二四年一二月）

農村の生活は無駄が多い。頭を働かせ生み出した時間を修養の方面に向けるよう勧めている。田舎では婦人の読書に対して理解が乏しいというが、「読書の趣味に生きようという心を持たれる婦人はまず女本来の仕事に充分頭を働かせてそれをしとげた上その余裕を自己の趣味に費やす心掛け」が必要と。

○蜂谷りん子「家庭の意義」（18号・二六年二月）

タイトルは大仰だが、家庭というのは「人々の慰安所であり休息所」で「第二の国民を育てるという立派な尊き場所」だから、立派なスイートホームを作ってほしいという、ありきたりの内容。

○『東京日日新聞』からの転載「妻としての女性の自覚」（22号・二六年六月）

一家心中が騒がれる世相を挙げながら、夫が生活に行きづまった場合、妻が無能力では一家心中などになる。妻を家庭の単なる高等乳母として見ず、夫の一切生活の有力な相談相手として認め

ねばならぬ時代になった。それを認め得るように、女性を教育する必要があるとして、妻の家庭における立場の改善を求めている。

一家心中が頻発する原因にまで筆が及んでおらず、妻の自覚だけを求めている。

○大江スミ子「主婦の任務とその修養」（25号・二六年九月）

家政女学校校長大江の談話。主婦の務めは大切で、その資格は三つある。一つは品性の高い心の清い人でなければならない。それが家中の人に移る。二に学問が深く知識がなくてはいけない。学校に行かなくても講話や新聞雑誌でできる。三は家庭生活に必要な料理、看護、洗濯等の技術に熟練していることだが、それを軽んずる風潮があるのは嘆かわしい。女は情の人、智の人であるとともに手の人でなければならない。

結婚、母性愛

一九二七年七月から青年訓練所が開かれたので、男子については、青年訓練所問題がクローズアップされており、「青年訓練所細則」が掲載され、藤井徳三郎が「青年訓練所の開設に当りて」を書いている（23号）。しかし、入所率がはかばかしくないところから、こんな投書が掲載される。

○無記名「青年訓練を受けない青年とは結婚しない」（50号・二八年一〇月）

目立つ記事ではないが、宣言のような文章である。広島県安佐郡の処女会で、青年訓練所員の査閲当日処女会の集会を開き、陸軍中佐の講話を聴いて感激し、全員一致で青年訓練に出席しない青年とは絶対に結婚しない、出会しても挨拶をしないことを宣誓した。すると訓練所の出席率が一〇〇％になったという。これを受けて、県青年訓練所主任国分大佐の「それは大賛成だ。私もある女子の講習会でそんな意味のことを申しあげたことがある。青年訓練所は青年の心身を鍛錬する大道場で、これに出席して訓練を受けない様な薄志弱行の青年は将来質実剛健な国民の慈母たるべき心身共に健全な女子が、一生苦楽を共にする資格がないと肘鉄砲を呉れるのは当然である」という話をしたと紹介している。

同号の「若草論壇」でも、読者の高橋芙路子が「真の祝賀」を寄稿。郡北部の競技会で優勝した青年団の祝賀の宴で、「不純なる酒と芸者とを以て選手を慰労し優勝を祝賀するものと心得ているのは誤った青年」と非難している。女子青年のこういった投書は男子にとってプレッシャーになったはずだ。

この頃、都筑郡柿生村に拒婚同盟ができている。女子補習学校の生徒約一〇〇人を中心に二五歳以下で飲酒喫煙したり、遊郭通いをする男性とは結婚しないと宣言。これに刺激されて、男子約一〇〇人が禁酒禁煙団を結成したという（『夜明けの航跡』一〇二頁）。遊郭通いや飲酒喫煙は望ましいことではないが、同盟まで作るのは行き過ぎだろう。

そして、農村青年の理想的な結婚として二例が紹介されている。

○高橋俊胤「土に芽ぐむ結婚」（111号・三三年一一月）

高橋は、都岡村の青年団員で、中郡金田村の青年と栃木県芳賀郡の女性との結婚を紹介している。二人とも関東馬耕競技大会に出場して知り合い、家屋敷だけで金はないという男性の真面目さ、男らしさに惹かれて、花嫁は「鍬と野良着」だけを嫁入り道具に結婚した。「この非常時に、この農村行詰りにこうした、真の美しき結婚を私達は、祝福し、益々農村更生の為に精進を祈っている」。

五・一五事件以来叫ばれ始めた「非常時」の掛け声が、三三年にはより大きくなり、大日本連合婦人会が非常時女性訓練運動を呼びかけている。それが投書にも反映した例であろう。

三原山で女学生二人が自殺する事件があり、同性愛と思われる心中が続いた。それに警告を発するのは小林珠子の巻頭言である。

「土に芽ぐむ結婚」の筆者高橋俊胤も同性心中に触れている。

○小林珠子「女子の使命に就て」（108号・三三年八月）

婦人は大きな力を持っている。シャカを生んだのもキリストを生んだのも婦人である。最近心痛に堪えないのは三原山の自殺者。このような社会の欠陥は婦人の責任。婦人にとって大切なのは子供の養育。蟹のお母さんは子供に横にあるいてはいけないと言いながら自分も横に歩いている。無智な母親はこれに似た教育をするからだめ。

○高橋俊胤「強く正しき愛と生きて行く道」（114号・三四年二月）

三三年一二月の心中事件の一人である都筑郡の久保田礼子は高橋の知人だそうだ。彼によると、久保田は文化学院大学部を卒業後、貧民街で奉仕したり、タイピストにもなったが、からだが弱かった。心中相手は従妹で、二人とも早くに母に死に別れ「母性愛」を知らなかったから、母を慕って自から生命を死へ捧げたのだろう。「人生は愛でなければならぬ。愛本主義でなければならぬ。愛のない家、愛のない村は暗く滅びる。礼子の死も母性愛がなかったからである」としているが、果たしてそうなのだろうか。

「愛」を母性愛と結びつける訓話は、三一年に行われた県女子青年幹部講習会における大日本連合青年団の田沢義鋪の講演ですでに強調されている。

○田沢義鋪「女子青年の修養に就て」（88号・三一年一二月）

乃木将軍の言葉、「大和魂とは断行することである」を引いて真剣さを生活の中に持つ大切さを述べたあと、「女子は地上に於ける至上の愛である『母性愛』の持主であります。これを家庭にのみ生かさずに、広く社会の全面に潤す」ことを望んでいる。

都会への憧れを諭す

一九二〇年代後半、震災からの復興が進むとともに東京の銀座や横浜にはモダン文化が押しよせてきた。事務員やタイピストなど新しい職業で働く女たちが増えて洋装が普及し、文化住宅が立ち並び、アメリカ映画の影響を受けたモボ・モガが街を闊歩した。そういった都会の風俗を伝える女性誌も競って部数を伸ばしている。

加えて小田急線、東急線など東京から神奈川県の農村地帯に伸びた私鉄が都会の文化を運んでくる。若い人が新しいもの、華やかな生活に憧れるのは、いつの時代も変わらない。神奈川のような近郊農村はその影響をもろに受ける。だから、農村から東京や横浜に若い人が出ていくのを何とかして食い止めようとする意図が一貫して読み取れる。そのために動員されたのが、女性執筆者たちである。トップバッターは山田わか。

○山田わか「農村生活と都会生活」（4号・二四年一二月）

三浦郡の農家育ちの体験から、自分も土にまみれて一生を送るより楽に生活したいと考えたが、都会の生活も楽ではない。労働者は人間として扱われない。それより一家が使用する水を汲み、薪を取り、米を作る農家のほうが人間らしい楽しみがあると書き、「地方の有為な青年男女は都会に憧れを持つ代りに地方文化の建設に努力していただきたい」と注文をつけている。

○嘉悦孝子「次代を作る中心としての婦人」（10号・二五年六月）

女子商業学校校長で、かつて中央処女会の理事を務め、社会教育の指導者として旗を振り神奈川県とも馴染みのある人である。農村から都会地や工場地へ人が集まって困ったものだ。若い婦人方がいない土地は若い男子も居なくなるから、若い婦人に努力し

てほしい。

○二宮わか「都会に憧るゝ農村処女の方々に」（12号・二五年八月）

クリスチャンで、明治時代後期以降、横浜の女性運動をリードし、恵まれない人たちの救済に骨身を惜しまなかった二宮わかが次のように書いている。

農民離村問題の根本は若い方がたの心理的な事柄だ。若い女が都会に憧れて村を離れると男子青年も村に止まらないので、女には重大な責任がある。田舎育ちの人が都会に出れば有望な職業につけ、華やかな生活ができると夢想してくるが、都会地では生血を吸って生きていこうとする恐ろしい蜘蛛が待っている。都会は一歩踏み込めば足の抜けない泥の海なのです、と警告を発しているのは、転落した女の救済に明け暮れた人の実感でもあろう。

○青木芳芝「「自覚せよ農村の女性」（同号）

青木は中郡の青年団員で「論壇」への投稿。女性は虚栄心が強く、百姓の嫁になるのを嫌うので「我農村は嫁飢饉」だと嘆く。

○無記名「農村婦人に就いて語る」（16号・二五年一二月）

「左様でございますね」という書き出しから、女性識者のインタビューと思われる。これまでの社会的規範が尊重されなくなったせいで、都会でも農村でも貞操観が低くなっている。不純な自然主義文学の影響もある。農村婦人の労働は過激だといわれるが、それは身体的な疲労であって、都会人の精神的な懊悩よりはまし。農村に都会風が輸入されているが、「シットリとおちついた田舎の風物に浅薄な、如何にも文化式な都会風の洋式をとり入れたので双方ブチこわしになってしまいます」と、口を極めて都会をけなし、農村の良さを強調している。

○川島郷花「農村の女性に」（54号・二九年二月）

青年団員の「若草論壇」への投稿。農村に生を受けた女性もさまざまで、小学校を出てすぐ工場で働く人、上級学校に進む人、ショップガールなどがいて、夏冬の休みなどに帰省した際に交際して「お百姓女性」が刺激を受ける。そのときにこそ「真の農村女性が打って以て一団となり自己の都会憧憬病を駆逐し、進んでは男子青年の田園退却病患者を治癒する原動力」になってほしい。

○山田政隆「真のモガ・モボたれ」（60号・二九年八月）

読者の投稿で、都会かぶれを戒めている。一にも二にも西洋かぶれの今日、ダンスホールに通って、これらは生ける地獄の淫魔の奴隷子である。如何にモダンタイプをなそうとも精神に修養がなかったならば、藁人形同然、三文の値打ちもない。「身にちぎれ木綿の衣服をまとい都会人の嘲笑を背に聞き流して、自然を相手に黙々と働く農民こそ実に見上げたモダンボーイ、モダンガールである。誰か吾国民の生命の糧はと問えば私は速答する—農民の神聖なる汗の結晶なりと。その神聖なる農民の精神こそ真のモダンタイプである」。

○藤井千枝「農村の女子青年諸子に檄す」（125号・三五年一月）

「女子青年たちよ、諸子の中、都会にのみ憧れて居る者はないか。若しあつたとしたらそれは気の毒な人である。大空の下で何も忘れて大地に鍬を打込んで居られる時、或は泥田に手足の汚れるのも忘れて働いて居られる姿こそ真に尊いものである。神聖なる姿である。人が真剣に仕事に従事して居る時位美しく見えるものはない。真に絵であり、時でもある」。続けて、「都会は決して楽土ではない」、都会の生活は「何しろ金、金、何でも欲しい物は金と代えなければ得られない」と諭す。そして最後に、女子もまた「農事の研究に関心を持て」、そして実力を示せば「女子の地位も高められる」と念をおす。「婦人が社会に進出するというのは、

都会へ出て行くことではないのである。自分の村は自分達で作る、という気概を持し、村の良風美俗を作らんが為めである」。

識者らが口を酸っぱくして農村生活を美化し、それに呼応する青年団員の主張も多く載せられているのは、それだけ男女ともに農村を捨てて都会に出る者が多かったということだろう。一九三五年頃には東北の凶作が報じられ、農村に留まりたくても留まれない事情がある。それでもというか、それだからこそいっそう離村を阻止しようと呼びかけている。

高良富子の提案

農村の厳しい労働実態や母性保護の整わない環境で、乳幼児の死亡率が極めて高い実情を知ってか知らないでか、農村生活を美化する言葉を並べても虚しい。なぜ娘たちが離村するのか、その対策を提言しているのが高良富子の講演。

○高良富子「農村に於ける婦人問題」（85号・三一年九月）

日本の農村では婦人が六割を占め、農村婦人問題は大切である。若い婦人が農村の生活を喜ばず、都会に走るのを止めるには、開拓的な生活がいかに愉快かを知らしめること、そのためには農村愛を持たせること。「知らしめること、其処に女子の教育の問題があると思います。知識の詰め込みでなしに、仕事を奨励する、労働を賛美する汗を礼賛する真の教育によって女子に新しい人生観、正しい価値観をあたえなければならない」。

では、真の教育とは、どんな教育なのか。「それには農村指導機関を学校以外に設けて断えず婦人を指導することが大切であります。農村婦人の経済生活の指導、生活改善のための教育を徹底的に行うために農村社会教育機関が必要であります。昔の農村の美風を伝える」だけでなく「常に新しい光と風を因習の窓をあけて農村に流入させることが大切」として、「婦人参政権の問題、公民権の問題、その他婦人に関する限りの法律自由の問題等、何れも時間の問題でありましょう。婦人が自分の考えを、村治の上に、すこしでも実現することが出来るならばそれだけでも村は今までよりもズッと明るいものとなるに違いありません」と、農村女性が村治に関わることを提案している。

また、優生学的に見た農村婦人問題も、母性の問題に連関して大きな問題だとする。「今の農村の施設に於て、女性の健康のためにどれだけの関心を置いているか、どれだけの施設をなしているか、それは殆んど絶無であります。もっと社会改良的な大きな眼で現実を見渡すならば、婦人保健、母性保護のための施設が農村に先ず起こらなければ嘘であると思うのであります」。

重労働をこなしながら、家事、妊娠、分娩、育児をしなければならない農村女性の立場に寄り添った唯一の意見といっていい。

高良はこれより前の号でも「婦人権」を提案している。

○和田（高良）富子「婦人と社会生活」（57号・二九年五月）

家庭はその国の文化の源で、家庭の中心の婦人以上になり得ない。自分の家だけの生活を考えるのではなく、家庭の外まで己の愛を伸ばしてほしい。封建的利己主義はよくないが、「婦人権」を望んでいるのは、ただ権利を望んでいるのではなく、公徳を及ぼすために、我々にも義務をつくさせてくださいという願いである。

我欲を離れて人の為に尽くし、社会を、世界を救うための「婦人権」というのは、参政権を指しているのだろうか。

参政権など女性運動への警戒

高良が文中で婦人権や女性参政権に触れているように、この頃、男子の普通選挙が実現したのに勢いを得て女性参政権を求める運

動が活発になっている。一方で友愛会から始まった労働運動が女子労働者も巻き込んで各地で労働争議を起こしている。農村では小作争議が頻発している。社会主義運動から非合法共産党運動へと無産者解放運動も激しくなった。都会への憧れを戒める記事には、しばしば女性運動を警戒し、かといって無視することもできず、けなす言辞が溢れている。

一九二八年三月、警察は非合法共産党員とシンパの人びと数千人を捕えて獄に投じた。三・一五事件である。翌年四月にも大弾圧を行い、以後、無産者解放運動に関係する人びとを根絶やしにすべく、過酷極まる弾圧が続く。これに同調した意見も掲載されている。二宮わかの文章は前掲の続き。

○二宮わか「「都会に憧るゝ農村処女のために」（12号）

近頃叫ばれる婦人の自覚とか女権の拡張とかは何を意味しておりましょう。いたずらに人まねをして騒ぐことではございますまい。代議士になったりしなくとも立派に一郷を支配し時勢を左右する力は婦人に与えられて居るのですと説く。

この頃結成された婦人参政権獲得期成同盟会は日本基督教婦人矯風会が主導してできたのに、横浜の矯風会の働き手であった二宮は不賛成だったようだ。

○高島米峰「男だけの―女だけの―世界ではない」（24号・二六年八月）

女が自覚して婦人問題が生まれ、男女ともに均等であらねばならぬということになったが、対等平等ということは同一ではない。女の特色は母性としてであり、女が全力を傾倒すべきだ。婦人参政権や職業に対する機会均等は女性が母性を完成するために即ち子の為に母として要求するもので、女なるがゆえに男子と同一のものを要求してはいけない。高島は、いつのまに母性主義者になったのか。保守的な男性評論家を代表する評論である。

○池田民子「心の健康」（38号・二七年一〇月）

第一次世界大戦後、「国体の異った外国の思想」が入り込んできて「思想がだん〳〵悪化してきた」。一方で都会生活の華やかさに惹かれて農村青年男女が都会に集まる「弊風」は「憂うべき状態にある」として、この離村問題は「女子が元である」。「社会生活の安定は、男女の協力にあるのでありまして、男子をしてよくその任務を完うさせるのは女子の内助の功によるのであります」と女子の行動を牽制。

そして、都会と農村の生活を比較して、都会はめまぐるしく変化するので、それに刺激されて欲望も移っていき、しかし体がそれに伴っていかないので、あせって落伍者の仲間入りをする。「斯のような人が社会主義者になったり共産主義者になって、社会の人々を損ねて行くのであります」と、社会主義や共産主義思想に影響されるのを必死で抑えようとしている。

○久西葭江「女子にも教育」（38号・二七年一〇月）

都筑郡の読者の投稿。英国では婦人に参政権が与えられたが、これを獲得するには、多くの婦人が乱暴を働き、あるいは獄屋にありながら餓死同盟を実行したという。憲政先進国の英国ですらそうなのだから、我国でこれを成就するには女性の自覚が必要で、それは教育の力による。「私達農村処女はある人の『田も作れ詩も作れ』と同様片手に鍬、片手に書籍を」と言いたい。

参政権を要求する前に女性の自覚が必要、そのための教育を、というのは尤もな意見で、女子青年自身の主張としては珍しい部類に入る。

○溝口慶子「思想国難と女子の覚悟」（48号・二八年八月）

溝口は、鎌倉郡連合女子青年会会長である。共産党事件の報道

を受けて、「万世一系のわが日本にこのような人非人がおろうとは。このような大逆の輩は何れも当局に於いて相当に処刑せられることでございましょうが、昔なら必ず磔刑か梟首の極刑に処せられるべき」と、まるで治安当局のような恐ろしい意見を述べている。三・一五事件から続く非合法共産党やシンパの検挙を指しているのはいうまでもない。そして、これを根絶するには国民全般の自覚制裁と家庭や学校での教育訓練と社会教育の完全な充実が必要だと強調している。

○原藤蔵「思想善導と体育」（57号・二九年五月）

原は、体育担当の県社会教育主事。女子の体育に関する記事はほとんどないため、本稿では取り上げないが、青年訓練所が開設された頃から、男子青年を対象にした体操や競技会などについて盛んに執筆している。そして、社会主義、自由主義、利己主義のような「悪思想」は全て「危険思想」であるとしてそのような悪思想に染まらぬために体育を奨励している。「思想善導」というキーワードがこの頃から頻出するようになる。

○中沢美代「婦人と家庭経済」（75号・三〇年一一月）

「公民権や選挙権より家庭における女子の問題が重要」だとして、女子の経済的自覚を促している。アメリカで家政学を学び府立第三高女の教師をしたのち、この頃は中沢家政塾や力行会を設けて生活改善運動などの社会教育に力を入れている。一九二四年の婦選獲得期成同盟会発足の折には会計として活躍した人だが、時流に合わせて考えを変えたようだ。

○関屋竜吉「日本女性の特質」（82号・三一年六月）

関屋は、文部省社会教育局長で県連合女子青年会総会での講演筆記。日本の道徳は「家」を土台としてできている。皇室は宗家、国民は分家という関係。従って国の基礎をなしているのは、義務とか権利とかいう理屈ではなく国民一家という自然の情愛である。その家を守るのは女である。内にあって夫を助けるところに特色がある。この家族制度が行き詰ったと言われるのは、婦人が服従を通りこして理非の判断を欠いているからだ。ここに女子青年の修養が必要になる。公民権や参政権を与えるにはその準備ができていない。日本婦人は社会的訓練に欠けている。その訓練機関として女子青年会がある。家を護る良妻賢母として、国に尽くす聡明な婦人として励んでほしいと、訓示を与えている。

参政権運動などの女の地位の向上を求める動きを何とかして抑えこもうという国の意図がはっきり見える訓示である。皇室を讃え、家父長制度を遵守し、良妻賢母として家を護り国家に尽くすよう求めているのは、教化総動員運動の一環でもある。

勤倹貯蓄を勧め、ぜいたくを戒める

農村で暮らす娘たちに向けて、創刊号から終刊まで一貫して語られ、強調されているのが、「勤倹と貯蓄」の奨励である。すでに日露戦争終了後の地方改良運動の実行要目の中に「勤倹貯蓄」が含まれており、資源の乏しい日本は、来る総力戦を想定して全国民に浸透させたい徳目であった。

『武相の若草』の創刊と軌を一にして、一九二五年四月に第一回勤倹週間、五、六月にも行われており、県内の女学生に調査カードを配り、どんな勤倹をしたかを調べている（『横浜貿易新報』一九二五年四月一八日）。小遣い銭の貯蓄、間食の廃止、学用品の節約、徒歩主義の実行などがあがっている。第三回の折には、県内五カ所で女性相手に趣旨徹底をはかる講演会も催している。

○巻頭言・花鳴生「勤倹と貯蓄」（4号・二四年一二月）

勤倹は我等の社会の責務で、得た余剰は老後を養うの資とし、

備荒の料となすべきだ。貯蓄は自己の生活を保証する唯一の手段である。恒産なき我等は之に依ってのみ老後と不時の災厄とから救われる、とその意義を説いている。

○若草講座・逸名子「婦人の日常生活」29号・二七年一月）

婦人は日常生活を合理的にすべきだとして、アメリカ、フランス、ドイツなどの例をあげる。アメリカ人は夏冬ともに三着しか衣服を持たない。ドイツの家庭では徹底的に節約しながら工場の煙突は林立している。社会の半面を担っているのは婦人である。日常生活を個人視せず、国家を営むにあたって国民としての分担の責任を感じて、努力すべきだとする。

○守屋栄夫「婦人に対する希望」（42号・二八年二月）

内務省社会局社会部長の守屋も外国の例を引く。日本では「勤倹貯蓄というが、まだまだ幼稚なものである」。農村では電灯が珍しいから昼間からつけっぱなしにするが無駄だ。ドイツやイギリスではつけっぱなしにうるさく、水もむやみに使わない。封筒なども一度使ったものを裏返して使っていると、外地体験を披露している。

○前田房子「日本の婦人と西洋の婦人」（43号・二八年三月）

虚礼虚飾を慎みたい。日本人は服装が華美、西洋婦人は質素だと、スイスのジュネーブでの生活体験を書く。こんなものを着ていっては悪口を言われるかもしれないとか思っていては進歩しない。

○竹内茂代「女子青年の使命」（47号・二八年七月）

「愛国貯金」というキャッチフレーズが盛んに言われるのは、満州事変以降だが、医師で生活改善同盟会会長の竹内茂代は、日本人の平均寿命は三一歳で、もっとあげるためには、母体に注意して健全な子どもを産むことが第一だ。その子どもが人類のため、国のために役立つように育てなければならない。「愛国の至誠を全うするためには婦人として健康でありたいと思います。これは、自分の幸福だけでなく、家庭の幸福延いては国の幸福になるのであります」と医師らしい話をしながら、唐突に日本は借金が多い、その借金を返すために女子青年団体が中心になって愛国貯金をしてほしいと呼びかけている。

○池田宏「女子青年に望む」（48号・二八年八月）

第二回県連合女子青年会総会に於ける池田知事の訓示。国富の増進が大事、そのためには益々勤倹奨励に向かって歩調を一にすることが必要である。この方面において大なる部分を受け持つのは婦人で、組織においてその業績を目的にして効果をあげてほしい。真に女子修養団体としての価値を十分に発揮してほしい、と述べている。

○西野みよし「衣服と食物の節約」（66号・三〇年二月）

具体的な節約法を指南するのは女性識者たち。東京女高師教授で文部省督学官も務める西野は、思想問題の次に大切なのは経済問題だとして、統計によると、生活費のうち衣服費が一割八分をしめ、食物費は四割二分をしめている。衣食に六割をかける消費を少なくする努力をせよ。木綿の輸入額は最高なのに、着物の数の多いことを恥じるべきだ。食物の多くも輸入品で、日本は約六〇億万円の借金がある。精神的にドイツのまねをしたい。この借財は女性が衣服食物に無駄をしてできたもの。その責任は大きい。常に一家の経済は国家の経済と共に考えていきたい。

○国分習也「夏季における婦人の服装」（72号・三〇年八月）

社寺兵事課主事の国分が嘉悦孝子の話だとして紹介している。事務をとったり、たくさんの洗濯をするとき以外はなるべく日本の着物を着てほしい。優美典雅な日本服を捨てて、モダンガール

がふしだらな服装をするのは合点がいかない。服装は簡易にし、着物は少なくすること。贅沢と華美を避けよ。礼儀のしっかりした紋付を一着もてばよいと。

こういった指摘を受けて、同号には青年創作副業品展覧会や生活合理化展覧会の案内が会況欄にあり、横浜市と橘樹郡高津村で「家庭経済講習会」が開かれるという予告がある。満州事変勃発直前、すでに大陸侵攻は進んでおり、戦費が増大し、国策として益々勤倹貯蓄が求められているのだ。本誌が終刊する一九三八年の前年には日中戦争が始まっており、各青年団で具体的に貯蓄の目標を定めて実行するように求められる。より強制的になっていくのである。

天皇制を下支えし、銃後の務めを果たせ

軍人出身で当初は県嘱託陸軍歩兵大佐として「県下青年訓練の概況」（50号・二八年一〇月）などを執筆していた国分習也が、あとのほうになるに従い発言力を増していく。社寺兵事課に移り、「恐るべき空の脅威に対して」（54号・二九年二月）で日本の国土が空襲された場合の注意を喚起している。まだ満州事変前だが、軍部では来る大きな戦争を想定していたのだろう。

70号（三〇年六月）には「太平洋の波浪果して穏やかなりや」で、日本をとりまく世界情勢について述べ、満州事変直前の80号（三一年四月）から三回にわたって「満蒙事情」を連載している。満州における「支那の排日状況」が切迫している旨を述べ、日本軍の軍事行動を正当化している。

68号（三〇年四月）までは総ページが五〇ページ以上あったのが、69号以降は特集号をのぞき二六ページ～二八ページに半減する。そうなると、外部有識者の寄稿は少なくなり、県の社会教育関係者や編集部が書いたと思われる無記名の記事、青年団の総会や幹事会、競技会の記録などが主になり、そのほかは読者の投稿、会況欄くらいになっていく。女子青年のあるべき姿を説いた記事もあまり見当たらなくなる。

その中で「令旨奉戴十周年記念号」特集の76号（三〇年一二月）は五二ページ建て。青年団幹部らが、奉戴の「感激」を述べるとともに、「国歩艱難」の今、「御令旨の御心に答える覚悟」を誓っている。女子青年を代表して溝口慶子と原モトが寄稿。巻末には「県下青年団概況」、「文部大臣の表彰を受けたる優良青年団及青年団功労者」、「県青年団規定によって表彰されたる優良青年団、指導功労者、団員」が列記されている。

文部大臣の表彰を受けた女子青年会と個人は、高座郡相原村女子青年会、同郡座間村女子青年会、田戸マサヤ。田戸は、高座郡連合女子青年会副会長である。

○溝口慶子「実行の女子となれ」（76号・三〇年一二月）

「伏して惟みるに畏くも」で始まり、「おそれ多くも御親閲の光栄にさえ浴し奉りました女子青年の喜びは何者にもたとえるものなく」と天皇に忠誠を誓い、仏教やキリスト教の文言を並べて、人が正しく、善くあるとはどういうことかと縷々述べる。

同時に教育勅語の渙発四十周年にあたるとして、その精神を讃え、「一人の力や如何に強く且つ大い事で御座いましょう意義深き時にあたり各自須く内に省み外に察し親睦を計り修養を進め協同一致行き詰まって居ます現在に貢献致べく新なる覚悟をいたし渥き思し召に副い奉るべきであろうと存じます」と結ぶ。

このように天皇への忠誠を堂々と述べる文章がこの頃から目立ってくる。

90号も特集号で「在支皇軍慰問号」、八四ページ建て。県内各

地の男女青年団員が慰問文を寄せており、ほとんど同工異曲なので一編だけ紹介する。

○山根ふみ「皆様の御勇姿を想う」（90号・三二年二月）

山根は向丘村女子青年会員。

「皇国のため、九千万同胞の為、吹雪の日も、寒風膚をさす夜も、心身共に寸暇もなく、御奮闘下さる皆様方に、何と御礼申上たらよいでしょうか唯々感謝の念で一杯です。親も兄弟も妻子も、すべてを忘れ君国の御為唯一途軍務に勉励下さる御勇姿！母の膝下で、暮すことの出来る身には、勿体なさの極みです。

横暴、卑劣な手段、行為に恥ずる色なき支那！正義の国日本を侮る支那！聞く毎に読む毎に、慨せずには居られません。此の支那を悔悟させ、東洋の平和を保つには、戦いあるのみです。戦って下さい、正義の剣がどんなものか、思い知らせて下さい。皇国の重大任務が、完全に果され、満州に根ざす我権益が、永久に維持出来る様になります迄は、何卒何卒御骨折り下さいませ。国民の一員として切に御願い致します。それにしても、気遣われますのは、諸勇士の御身の上、尊い戦死も待たず、寒気や病に万一斃れるような事がありましたなら、如何ばかり残念でしょう。御武運の長久を蔭ながらお祈りいたします」。

見も知らぬ女からこのような慰問文を送られて、兵士は感激して勇気凛々となったのだろうか。

日中戦争前夜になると、青年団総会における知事の告辞も神話を持ち出して伝統を強調し、悲壮味を帯びてくる。

○半井清「男女連合青年団総会に於ける告辞」（141号・三六年五月）

「現下の重大なる時局は婦人の力に須つもの極めて多大である」

「即ち婦徳を修めて我が国伝統の美風を顕揚し、家庭経済を掌理して国力の拡充を計るは一に婦人の自覚に依るものであります」

「本県の誇である走水神社は日本女性の亀鑑であらせられる、乙橘媛をお祀りしたものであります。諸姉は此の媛の御心を心として、益々志操を磨き全て主婦として家を治め、母性として次代国民を養成すべき責務に鑑み、女子青年としての勉めに精進さるゝ様切望する次第であります」。

総力戦である近代戦争における銃後の力は大きく、資源の乏しい日本はことのほか「婦徳」や「婦人の自覚」などの精神力に恃み、「母性」を持ちだして女の力を期待したのである。日中戦争が始まるとさらに「留守部隊」としての役割が強調される。

○「敵来りなば！　婦女子は留守隊として家庭防火群を組織せよ」（156号・三七年八月）

戦時に当たって市民を恐怖錯乱させるのは火であるから、空襲に備えて、近隣相より「防火ブロック」を結成し、県民消防の実をあげよと、組織、機能などを示している。そのあとに「神奈川県市町村防護団組織要領表」がある。同号には「国民体位の向上を目指し、夏季ラジオ体操の会を盛んにす」として、ラジオ体操も奨励している。

157号（三七年九月）から四号にわたり国分習也が「日支事変と吾等の覚悟」を連載。戦争開始を「突然盧溝橋の支那兵から数十発の射撃を受けたのに端を発した」として南京政府の抗日戦に対する日本軍の「壮烈なる爆撃」の様子を述べて「支那軍」を侮ってはいけないが「怖るゝには足らず」としている。

同号には「通牒一束」というページも設けられている。「北支事変慰問義金募集」、青年団の役員らが多数応召したことに伴う「青年団幹部応召対策と事変情報伝達」、「航空報国　軍用機献納」という記事では、少年団、女子青年団、婦人会でも「航空報国」を

モットーに義金を募集して「銃後の熱誠」を尽くすことになったとある。

「毒瓦斯に対する認識とその用意は完全ですか」という記事もあり、毒瓦斯の襲来があったときの対処法が表にしてある。「編集後記」には、県下数カ所で裁縫教員による「防毒マスクと灯火遮蔽用具との作り方の講習会を開いて防空思想の普及に努めてきた」とある。本土がどんな形であれ「敵」に襲撃される認識は一般には薄いはずだが、『武相の若草』の警鐘ははるかに速い。

158号には、海老名村女子青年会の「女性銃後の務め」という報告記事があり、千人針腹巻を在満支の皇軍部隊及び艦隊乗組員に贈呈したとある。

159号には、県連合男女青年団長中原啓造が、長期戦への覚悟を述べ、『国民精神総動員』青年団実施計画」も掲載されている。

○中原啓造「国民精神総動員に際し県下男女青年団諸子に望む」（159号・三七年一一月）

「畏くも天皇陛下に於かせられては今次の事変を深く御軫念遊ばされ去る第七十二議会開院式に当りまして優渥なる勅語を賜い」、「国民精神が真に振張して所謂挙国一体となり、皇道日本の精華である所の尽忠報国の至誠に燃えていたならば、たとえ事態が如何に展開し、戦争が如何に長期に亘るとも、必ずや堅忍持久あらゆる国難を突破して所期の目的を貫徹し得べきことを疑い容れません。国民精神総動員の趣旨もこれを措いてなかろうと存じます」。

このような檄文を読むと、時局がいよいよ逼迫していることがわかる。皇軍慰問記事は、161号以後、毎号となる。

トップは主婦の友社から北支に派遣された吉屋信子が三七年一一月三日の県婦人会総会で講演したときの記録で、わかりやすい語り口で話している。

○吉屋信子「北支上海を視察して」（161号・三八年一月）

往きの船中で支那語の勉強をしたこと、無蓋貨車で兵隊と一緒に天津に着き、愛国婦人会の病院での活動に感心したこと、北京に行く列車で蚊に悩まされたこと、支那の女巡査や女乞食の様子、通洲で日本人が殺された跡を訪ねて悔しかったことなど。

少女小説家として熱狂的なファンを持ち、家庭小説の人気作家でもある吉屋がみずから中国戦線に足を運んでの話は、若い女たちにすんなりと受けとめられたようだ。

むすびに変えて

『武相の若草』の執筆者は、国が女子青年をまとめ上げるために次つぎと繰り出す政策を受けて男女青年団総会や幹部研修会を指導する県の社会教育関係者、国の政策の代弁者そのもののような識者群、国が意図するところにおかまいなく独自の主張をする識者、そして、男女青年団員と、立場も年齢も異なる人々である。

従って訓示や主張や意見は見てきたように一色ではなく、多様な意見が交錯する広場の役割をはたしている。ただ、それは初期の数年であって、一九二六年訓令、青年訓練所開設、教化総動員運動、満州事変、更生運動、非常時、日中戦争と時代の変化とともに多様性が失われ、カーキ色一色に染め上げられていく。それが、無産者解放運動や労働運動、小作争議などの抑止装置になったのは確かだ。

また、本来の社会教育は市民みずからの学びが重視されなければならないが、一貫して「修養」が強調されている。それを踏まえた上で、期待される女性像のキーワードとしてあげられるのは、農村のすばらしさ、都会に出るな、家庭の意義、主婦の役割、勤

倹節約、自発性、協同団結、母性愛、国民としての責務、国力の拡充、愛国の至誠、航空報国などである。これらの表象は、一九二〇年代後半から三〇年代の農村女子にどのような意味を持ったのだろうか。

丸岡秀子の名著に一九三七年刊行の『農村婦人問題』がある。長く産業組合中央会に勤務して、三〇年代の地方農村をくまなく歩き、農村の主婦と母性に焦点をあてた。その一節。

「女だからという余裕は、そこに於ては許されない。男子と一緒に何でもさせられる。農耕という仕事は、いうまでもなく実に激しい労働である。そのうえ範囲が極めて広く、春の田打ちから始まって麦蒔き、田植え、草取り、稲刈り、米つくり、養蚕等々、全部婦人が関係している。殊に農業労働は季節的労働であって、その期間は少しの余裕も与えられず、猫の手もかりたい位に忙しい。その季節になれば、どんな文句もいっていられない。凡そ労働に堪え得るものはみんな動員される」。

「特に養蚕をする村では婦人の労働は支配的であり、並大抵ではない。帯も解かないで何度となく夜起きて桑の若芽を与え、温度の調節を計り、虫眼鏡で小さい蚕の発育状態に心をいためつつ注意を怠らない。それに養蚕の時期は丁度、田植えや、田の草取りと同時になり易い関係から、非常に過重な労働となる」。

「そうして、男は家に戻ればまず一服とくつろぐことができるが、一日十時間から十五、六時間の労働をして尚も、婦人の特別な仕事となっている炊事から家事一切、縫物、育児、洗濯等、多くの家事労働が婦人だけは解放してくれない」。

それでいて、その労働の地位は、あくまでも家長に従属する家族労働の一部分でしかない、家族制度の暗い運命を背負っているとしている。広範な調査結果も報告されており、このような状態であれば、『武相の若草』誌上で、多くの識者が繰り返し、自然とともにある農村がどんなにすばらしいか筆を尽くしても、農村女性の胸に響く言葉にはならなかったのではないかと思われる。電車に乗れば、すぐに都会に出られる神奈川県近郊農村の娘たちの離村が止まらなかったのは当然だろう。都会に出たからといって恵まれた生活ができるわけではないが、今と違う生活に憧れるのはしかたがない。

家庭の意義や主婦としての役割の大切さを力説するのは、それだけ家族制度の根幹がぐらついている証拠でもある。女子青年団と同じく文部省の傘下団体である大日本連合婦人会は「思想国難経済困難」に家庭女性を動員するのがねらいで一九三一年に結成されており、歩調を合わせているのがわかる。

経済にゆとりのある農家は少なく、ましてや自分で自由になるお金をほとんど持たない女たちに、質素は美徳だとして勤倹節約を説くのは、さらに我慢の生活を強いることになる。見たこともない外国の女の始末ぶりを聞かされても、どれほど納得したか。

それにしても、生活改善や勤倹貯蓄と称して、衣服や食生活など私生活の細部にまで、行政が深くかかわってきた道筋もよく見える。このような介入に慣らされることで、準戦時体制から戦時体制へと移行していく中で、女たちは自ら生活を切り詰め、周りの人のぜいたくに非難の目を向けるようになっていく。そうして倹約した金が鉄砲や戦闘機や戦艦の建造費になっていることには気が付きにくいのである。

私生活といえば、結婚や子産みも優れて個人の問題だが、優生的見地から健全な者どうしの結婚を奨励する文章もあるし、こんな男性とは結婚しないという動きもあった。子産みを奨励する文章は見つけられなかったが、一九三六年には全国的に出生率が急

減する。産児制限思想の普及、婚姻年齢の高齢化、農村から都市への人口移動などが原因とされており、国は早期結婚と多産を奨励するようになる。人口政策として国家が女の身体や性生活に介入してくるわけだが、その直前の時代の動きとして注目しておく必要があろう。

通読して、貞操観が希薄になっているのを嘆く記事はあったが、恋愛や性の問題にほとんど触れていないのが気になる。二〇年代には性の解放がそれなりに進み、女性誌には恋愛や結婚に関する記事が溢れている。雑誌ジャーナリズムが発達していない明治期ならともかく、多様な少女向け雑誌など女性誌が競って読者を獲得している時代で、いやでも情報は目や耳に入ってきたであろう。そういった問題に全く目隠しをしたまま、勤倹貯蓄を説き、国家への忠誠や奉仕を力説していることになる。

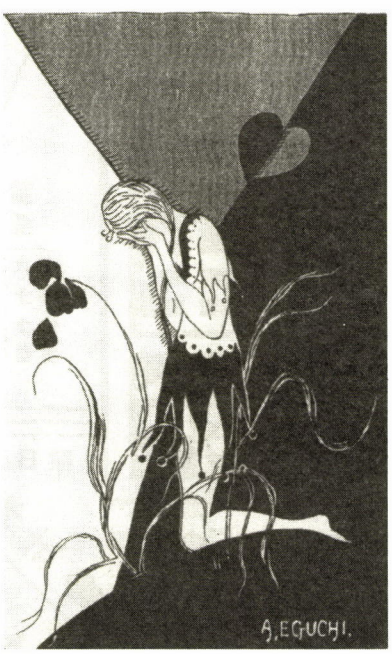
そうして満州事変から日中戦争へと進むにつれ、男子青年が召集されて村から消えていき、家制度は内部から崩壊していくことになる。家業としての農業労働はますます女たちの肩に重くのしかかってくるのだが、つらい、しんどい、苦しいといった声は、多くの人の目に触れる機関誌には出にくい。溝口慶子のような勇ましい意見が目立ってしまうが、これが大多数の女子青年の思いを代表するとはいえないだろう。

ただ、見てきたように、半官半民の団体の機関誌であり、編集者もほとんど県庁の社会局の役人だったが、彼らが農村男女の意識の底上げを願い、書くことを奨励し続けた努力は評価すべきだろう。千野陽一が『近代日本婦人教育史』で指摘しているように、揺らぎ始めた家族制度のもとで、国家主義的な立場から国策に協力させるために女の社会的集団活動を促しただけとは言い切れない。高良富子のように女性参政権獲得をも視野に入れた女の社会活動を評価する文章もあった。書を読み、教育を受ける権利を主張する女子青年の意見もあった。

そのせめぎあいを遮断し、画一的に国策としての戦争遂行に協力し、地域で天皇制を下支えする女性像が期待されたのは満州事変以降である。その方向は、日中戦争開始とともに国家総動員法によってがんじがらめに縛られ、否応のないものになっていったことが読みとれる。

一方で、機関誌発刊を企てた人びとが期待した青年たちの自主性、自発性はそれなりの効果をあげたのではないか。積極的に集団活動に参加し、指導力を発揮した女子青年も少なくない。しかし、その自発性や指導力が農村の暮らしや労働の矛盾を改善する動きにつながらず、国家が期待する女性像へと照準をあわせた。

どんな国策であれ、上からの押し付けだけでは国が意図した方向に人びとは動かない。政策や制度とともに、それを受け止めた下からの自発性が結びついたときに初めて大きな力を発揮する。「自主性」「自発性」は、両刃の剣であったともいえよう。



文芸欄に見る農村女子の暮らしと思い

三須宏子

はじめに

ここでは『武相の若草』創刊以降、県内農村地帯の女子青年たちの暮らしぶりと日常の思いを探ってみたい。現在をさかのぼること九〇年から七五年、当時を生きた若者の心情に触れ、実情に迫りたいと思う。

創刊は一九二四年九月。関東大震災からちょうど一年、復興の途上であり互助の必要もあって婦人会などの社会活動も活発化、女子青年会の結成も相次いでいた。創刊号から、読者である青年団員による作品の投稿欄がもうけられ、重要視もされていた。時期によって「若草論壇」「若草抄」などと称するコーナーがあって意見表明の場も設定されていた。創刊号には鎌倉郡川上村の渡辺文子による「現実をみつめて」が掲載された。

要約すると、

震災一周年。食糧と経済の危機による思想の動揺、外交に難を抱える国家の危機にあたって、覚醒した女性の参政権運動も悪くないが私たちは自己の足元から覚醒したい、とある。

2号には、震災で父母を一度に失った悲しみを詠った詩がある。さらに二年後にあたる二五年九月、13号の俳句に

震災後思わず此所に清水かな（石黒ヤエ・中郡）

があり驚いた。震災によって清水が湧きはじめたと詠んでいる。現在の厚木市七沢の北にある「かぶと湯温泉」が震災後に湧き出したことは広く知られた話だったから。

女子青年たちの農村生活の様子は投稿された小説、小品、短歌、俳句、詩などから探る。『武相の若草』は当時高名な選者を擁して若者の文芸参加を奨励、生活に根差した作品が歓迎されていた。「若草論壇」などの意見は、啓蒙雑誌の編集責任者が認めるレベルを持つ優等生の意見であろうが、多くの購読者が何らかの刺激や影響を受けたに違いない。文芸欄に創作が掲載された人にさらに書くことを勧めたのか、身辺雑記や論壇風な意見表明など連続ヒットがしばしば見受けられる。それらは時に作品や作者の背景ともなるので一部取り上げた。ほとんどの女子青年が青年団に所属する期間は限られているので、購読期間も限られ、投稿メンバーは次々と変化し新人が現われる。

最も重要な農作業は養蚕に関わる仕事であるらしく、その他に麦、水田、陸稲、甘藷、養豚、養鶏、葉煙草などの生産に一家で関わり、いずれでも女子青年は重要な働き手であり家事の担い手でもある。

県下の養蚕に関して、『史の会研究誌』四号掲載の大岡八重子「繭と生糸に働く女性たち―高座郡にみる養蚕・製糸業―」によれば、一八五九（安政六）年の開港で横浜は蚕糸輸出の中心となり、一八七五（明治八）年ころには生糸の高騰もあって県北部から南部まで養蚕農家が増加したという。

高座郡（現在の相模原市、藤沢市、茅ヶ崎市、海老名市、綾瀬市を含む）には共同生糸揚返所から合資会社に発展した綾瀬の漸進社、藤沢の盛進社、茅ヶ崎の純水館などの製糸工場があり、高品質を保つ努力がなされ女工は重要な働き手だった。

投稿作品から仕事を特定はできない場合もあるが家の外での労働を担っていると解釈できる表現も多く見られる。家族労働による「座繰り製糸」も盛んで、できた生糸は揚枠所で取りまとめてから市に出した。

先ずは桑の生産が養蚕農家の重要な仕事となる。蚕、桑の語を含む作品が多いのもうなずける。糸価に一喜一憂する場面も詠まれ、一九二九（昭和四）年アメリカ株暴落に端を発した恐慌の影響を免れることはできなかった様子もうかがえる。

社会状況の大きなうねりは、その渦中の者には見えにくい。変わりゆく時代の下で、個々の若者は都会に憧れながらも足元を見つめようと努力し、指導者ともども生産性の向上を模索した。生活の合理化と改善につとめながら家業を守り、戦争に傾いていく社会の変化を受け止めて戸惑いもみせながら真摯に生きた、その姿を見ていきたい。

（一）俳句、短歌に見る女子青年の仕事と日常生活

各号の初期の投稿総数は判らない。30号前後には俳句の場合で五〇〇首とあり選者が悲鳴をあげながらも喜ばしいと述べている。俳号・雅号を使う者もある中、名前からの判断だけで女子青年の作品を選んだので、確かな数ではないが四〇～六〇首が掲載される中の五～一〇首が女子青年から選ばれ掲載された。作品の出来不出来、選者の都合（休載もある）、紙面の制約もあろう、掲載作の数は毎号まちまちであった。

初期14号までの俳句の選者は渡辺未灰（一八八九～一九六八）、10号で「平凡陳腐なものをどっさり見るのは誠につらい」と述べ青年たちを鼓舞している。

16号から最終号までずっと小野燕子（一八八八～一九四三）。22号に「先任が病のため、私に回ってきた」と就任の言葉を寄せ、職業を持つ身で引き受けるのは苦しいが引き受けた。自分が新聞記者になれたのも一四歳からの句作のおかげ。この一〇年、樺太から関東一円の青年団で講演するたびに俳句を勧めてきた。気取るな、風流がるな、俳句がるな。俳句は生活にある、周囲にある、自然の核心をつかめと励ましている。

短歌の選者は2号から前田夕暮（一八八三～一九五一）。大住郡南矢名の豪農に生まれた郷土の人。26号で「跣足（はだし）で畑の土をふむような心持で」歌をよんでほしい。地方色の豊かな土の言葉が大切で尊い。楽しく働き楽しく詠えと注文している。俳句、短歌とも二～五の「秀逸」が選ばれ他の掲載作は佳作と位置づけられたようだ。

ここでは作品の評価とは異なる視点で、当時の生活を中心に見ていくが「秀逸」とされた句も紹介したい。作者の所在地は原文のままとし、なじみの無い用語と明らかな誤植と誤字は〔　〕で補った。

（1） 養蚕を中心に

雨除けの軒ふかぶかと蚕飼う（座間菊枝・麻溝村）

蚕こも〔薦〕妹と洗う二日かな（小林喜代子・依知村）

小林喜代子は養蚕農家を支える人らしく、この他にも

桑切りの音も高まり家の中（35号・二七年七月）

桑こきやごりごりごりと音たてて

山かげに冬刈りの桑摘みにけり

摘み籠にいつ入りしか青蛙

忙しや寝間着のままに給桑す

日もすがら桑摘みいそぎ疲れたり夕山にきくひぐらしの声

などがある。作業の状況の他に労働の疲れを詠んでいるが満足感と誇らしさも漂う。日常の細部に心が届いている。

冷風に桑食いの音高まれり、（小林すえ子・依知村）

養蚕の上がりし日やな髪洗い（同）

忙しい作業と女子青年らしい生活の流れがうかがえる。春蚕、夏蚕、秋蚕と年中忙しく各農家による時期の選択もあったようだ。鮎の遡上も多かったのか、

鮎の腹光るや蚕具洗う川（鳩川K子・高座郡）

解禁や鮎の竿つづく相模川（井上藤子・麻溝村）

など長閑な風情が漂う二句は108号（三三年八月）の掲載。鮎解禁は現在も続く相模川の風景だが、蚕具を川で洗う風景はもう無い。

麦刈るや蚕疲れこらえつつ（二見幸子・大和村）

湯の中で居眠りするやお蚕疲れ

雨晴れて掃き立ての蚕の桑つめり

三作とも二見の作。後の二句は47号（二八年七月）の掲載、次々と仕事は続く。この他に

トマトもいで桑摘む人に分かちけり

という農村風景描写も入選している。

桑摘みの荷車つづく日暮れどき（光露社友・千代子）、

蚕あけ心安さの読書かな（同）

は文芸に親しむ人らしい作、若草好みといえようか。

したたかに食うて艶でし蚕かな（榎本美代・田名村）

繭売りて天井高し夏の昼（長田チヨ子・有馬村）

は「秀逸」の第一席に選ばれた。積み上がっていた繭を出荷して広く感じる家の中、思惑を外れずに売れたのか、家族の安堵が感じ取れる。長田チヨ子には次の一首もある。

ひぐらしのなき止まずして深もりぬ桑籠負いて帰る山路は

今朝もまた笛より先に起き出て生糸取りする我はうれしき

（田所やま子・高座郡）

ながら雨のようやくはれて日の光まぼしと桑をつみにけるかな（加藤はる子・津久井郡）

久々に糸引きやすみ心嬉し晴着の針をはこびたりけり

（小野沢しげ子・愛甲郡）

小野沢しげ子の一首は「秀逸」に選ばれた。晴着でも野良着でも針を持つ時間は仕事ではなく、むしろ安らぎであったらしい場面が度々みられる。

蚕をあげし心安さに昼寝する窓辺に匂う泰山木の花

（井上照子・高座郡）

春蚕にくれ余したる桑園の桑の青葉の茂り涼しき

（みどり・座間村）

かんかんと日の照る真昼ゆさゆさと桑積みて行く牛車かな

（野頭千代子・府下渋谷町）

の同時期に

トラックに桑積み満ちて走り行く山の彼方も蚕飼せわしき
（佐藤喜美代・串川村）
があり、牛車とトラックは共存していた。佐藤喜美代には次の
夜業終えて帰る夜更けの田舎道街灯の光ゆらぐ寂しさ
もあり、製糸関係工場の働き手だろうか。
一日を働き終えて帰りくれば戸口をもるる灯のなつかしき
（清水きく枝・都筑郡）
一年のつとめを果たして帰る日も父いまさねば我はさみしき（小池喜代・南毛利）
務め忙しく身にはきためし白足袋をかためて干せり日曜の朝（寿子・藤沢）
などの作者は外での働き手ではないかと推測される。
桑摘みの帰りに母ともぎて来し瓜を食みつつ新聞読むも
（西川だい・津久井郡）
養蚕の終えて安けき炎天に薦乾かす我の心けだるき
（斉藤一枝・新磯村）
夕暮の雨にまじりて納屋内の蔟〔まぶし〕折る音蚕室に聞ゆ
（同）〔蔟は繭をつくらせるスダレ〕（100号・三二年一二月）
この頃は蔟折機があった。二首とも作業の過程がわかる。
給桑を終えてしばしを背戸に出て豆もぎ居れば心すがしも
（山田磯子・都筑郡）
紫の桐の花散り野の家は蚕飼忙しくなるばかりなり
（野乃幸子・相模）
農作業を美しい季節の移ろいの中に捉えて印象深い。
桑籠を背にして山路を急ぐ時虫鳴く声に包まれにけり
（山崎はる・高座郡）
蚕飼いする我家ひそけし暮れ方は逝きにし父の偲ばるるかな
（鈴木久美子・高座郡）
太葱の汁の香のする口拭きて桑摘むと裏の道ぬけゆく
（園田薫子・御所見）
園田薫子は何とも忙しい生活をしながら、その体験を一首にものしている、その意気に感服。動作から匂いまでが伝わってくる。
47号には園田の詩「地に親しむ」が掲載されている。
五月晴れの大空めがけて／伸びる樹々が（略）ばら色の皮下を流るる血潮の高鳴り／青空の彼方に走る想／ああ、ともすれば狂わんとする若き心を／押し沈めて地に親しむ
園田は才気ある女子青年で、外の世界に心を巡らせる、けれども現実の制約の中で自分を生かす知恵もある人なのだろう。
只管に繰り繭しつつふとしては我がなりわいを淋しみにけり（矢野世喜子・鎌倉郡瀬谷）
乙女子が受けし業なり繰糸に励む我が身をうれしと思う（同）
同じ作者のこの二句は迷いの心境か、我が身を励ましているようにも受け取れる。
繰繭に日ごろ忙しく荒れし手は恥ずかしと思いかくしたりけり
と若い女性らしい悩みも詠んでいる。
桑もぎつふと淋しさの胸ふさぎぬ去年は祖母と共にもぎしを
（遠藤コヨ・鎌倉郡瀬谷）この作者には
学校へ行くのがおそくなるからとて老母にこの水仕事どうしてさせられよう
男なら我がつくものを年老いし父がつく餅淋しく見て居る
という句も採録されていることから家族思いの、まだ生徒でもある女子であるらしい。同時期、同地区の在住者の
夜更けてラッパの響ききこえきつ電燈の下に針運び居る吾は

（吉川とめ・瀬谷）

があり、海軍関係の施設があった瀬谷の、この時代を映しているだろう。（69号・三〇年五月）

二つ三つ梁に残りし白繭の蝶々生まれてうごめき居るも

（家本多加美・高座郡）

このハプニングを捉えたユニークな視点。しかしこれが女子の作かどうか分からない。筆名か本名か。真咲美、伊佐美などが男子青年の名前らしいので多加美も男子かもしれない。

せま苦しい蚕棚の下に寝つきたる幼き妹をかなしく思う

（宮崎美代子・小出村）

かき上げて籠に並べしこの繭の余り値安きが淋しくなるも

（井上ユキ・日連村）

井上の一首は、84号（三一年八月）の掲載。世界的不況が押し寄せてきた。第三章で取り上げる個人の軌跡にも養蚕農家の一喜一憂が数々詠いこまれている。

（2）作業全般と日々の暮らし

次に、養蚕を離れて他の仕事と女子青年たちの喜怒哀楽を含む生身の姿を見ていこう。仕事の中心は農作業。家事、憧れ、行く末の不安、時に社会問題が顔を出す。

田植終えて心安けしこの朝は祭の衣朗らかに縫う

（武井カメ子・平塚市）

秋日和針はこぶ日は嬉しけり（守屋たか子・都筑）

真清水に髪梳りおり野良乙女（岩田誠子・橘樹郡）

再嫁意なく散る白萩に日送りつ（栗山セン・愛甲）

夕立の上がりし後のほがらかさ簡単服で庭とび歩く

の作者は「無名氏」だがこの感覚は女子でなければ持ち得ない。

このあたり昔は虫のよく啼きぬ丘に並べる文化住宅

（井上藤子・麻溝村）

は三三年の作、都市化のはしりか。非常時、国民精神作興が全国的に叫ばれる三四年一月（133号）には

笑いつつ言葉かけ行く人なれど何処の方ともわからぬ人なり（小泉日出子・麻溝村）

という長閑さの一方で

校長先生の訓辞を聞けばおみな吾も国家非常時に胸ふるいたつ（高部キミ・平塚市）

非常時の式場せまき紀元節（金子菊枝・豊田村）

が掲載される。次の一首は時代を色濃く映すとのコメントが付いて「秀逸」に。

さそり座のほとりしきりに探照の光よぎりてむし暑き宵

（大島美弥子・有馬村）

よくぞ捉えたこの組み合わせ。八〇年余を経た今も心に響く。

桑こぎ〔扱ぎ〕て胡瓜つくらんと言う人のこえ泌泌聞く朝餉かな

も大島美弥子の作。社会問題、経済の流れに敏感な人だ。

三年前別れた友に今日会えば言葉変わりて大人びており

（八木春子・新磯村）

友は卒業後、村を離れて働き、帰郷した同級生だろうか。都会風の言葉遣いに戸惑い、遅れをとった気分も少し、か。

なずな粥貧しけれども我が家内祝う朝餉の賑わいにけり

我が村の歩道は広く村人の力によりてひらかれにけり

も八木春子の作品。ここには村に住む誇りがある。

歩むたびほのか音してさゆらげる銀のかんざし嬉しかりけり（池田きく子・愛甲郡）

は「秀逸」に選ばれた。何処へ行くのだろう。どんな「ハレ」の日があったのか。次も池田で

淡紅色のはでなと言われ紫にか〔変〕ゆれば衿の少し淋しき

茶の色のうつ〔映〕ろう頃になりぬとて姉はしみじみ鏡にむかいぬ（池田きく・愛甲郡）

「きく」と「きく子」と同一人物か。おしゃれな人らしい。

たらちねの母いまさねば茶のしまを地味と言わなく町にゆきけり（高峯きく子・愛甲郡）

など着物の色彩には、その時代の感覚、母娘の葛藤も覗く。もう茶色が似あう年齢になってしまったのかと鏡を見る姉。茶は地味と決めつけ娘には少しでも華やかであってほしい母との感覚の違い。色には時代的固定観念もあったかと思われる。

春あさめ畑の土打ち馬鈴薯の種うめおればうぐいすの鳴く（小清水貞子・土沢）

張物をする手休めてうつつなしほのかに布のかわくにおいす（渋谷クニ子・渋谷村）

この二首には「優れている」とのコメント。選者・前田は「諸君の歌から諸君の生活を知ることはまことに愉快である」と。

けたたましく鶏なきたちし藁巣よりぬくみたもてる卵とりたり

楪生の山の斜面に陽をあみてうつらうつらと握飯（むすび）食み居り

にぎり飯食いつつおもうこれの世につつがもあらず生けるいのちを（井上照子・渋谷村）

以上の三首は女性には珍しく「線の太い歌を詠む人」という論評付きの「秀逸」。次の

なまぬるき南風吹きて煤びたる大黒柱汗ばみにけり

も「秀逸」で、都会人には想像できぬ境地を捉えしかも重厚との賛辞が添えられた。黒光りする大黒柱のある今で言う古民家、大家が目に浮かぶ。柱が汗ばむと観察した鋭さ、表現も面白い。

山々の色ずく木の葉目にたちて麦まき近き頃となりけり

も井上照子の作。

この夜更け目覚てあれば豚小屋に豚のうごめく気配するはも（岡田薫子・高座郡）

この頃は子豚の育ちよくなれりうす紅く乳房たれさがっている（隆子・御所見村）

おおいびきたてて寝ている豚が人間の様に親しい（矢部セキ子・綾瀬村）

養豚は現在も盛んで、神奈川のブランド「高座豚」のルーツでもあろうか。歴史は横浜の居留地近隣農業にさかのぼり、関東大震災後にブームもあった。相模の地が稲作よりは畑作向きで麦、陸稲、甘藷栽培が盛んだった。これら関連産業の残物など豚の飼料が豊富だったからという。「高座豚」は収量が少なく高度成長期に絶滅したともいうが八五年ころから改良を加えた新たな神奈川ブランドが開発され、各組合が地産地消をアピールしている。

今日播きし陸稲の種も芽ぐむべし今宵したしく雨をきくかな（清水菊枝・二俣川）

雨ばれの日の光ふる山畑に甘藷うえおれば雲雀鳴く聞こゆ（栗原きみ子・都筑郡）

下肥を施す畑に真白なる馬鈴薯の花咲き盛りけり（富士塚昌子・愛甲郡）

初荷なる芋の俵をつくりけり（長谷川美枝・御所見）

庭土間の煙草の匂いの甘だるさ親しみながら葉あみしている（小水志摩子・土沢村）

は62号（二九年一〇月）の掲載。大正期から盛んになった秦野の煙草葉は日本三大銘葉と言われていた。栽培、刈取り、乾燥、葉のし、選別と作業は多岐。「葉あみ」は乾燥させるために、編んだ縄のコブに葉を刺して吊るす作業だろうか。女たちはこの夜なべ仕事に協力し合った記録が残っている。女子青年も加わったことだろう。

よみかきを知らぬ我が父に朝夕新聞をわれ読みきかすかも（細谷タケ子・大野村）

朝寝して新聞読む間なかりしを負債の如く今日も感ずる（斉藤元子・新磯村）

右記二首は三二年頃の作品。新聞を購入している家の父親がほんとうに識字能力が無かったのかどうか分からない。新聞は楽しみであった様子はしばしば詠われる。同じころ、ラジオを詠んだ句があった。三二年七月、95号の掲載。

春の日は昼の静けさ唯一人野球放送がおしゃべりして居る（東　登代子）

新刊の広告があり買いたさに銭を数えつ足りて嬉しき（鈴木久美子・御所見）

あっぱれ！外したくない一首。次の句は移民か出稼ぎか。

ブラジルの兄の送りし珈琲を一家まどいて飲める宵かな（西山美弥子・高座郡）

思うことなげに空を渡りゆく我悲しみに拘らぬ陽よ（白井すみ子・高座郡）

は「秀逸」。感性豊かなこの作者名はここ以外に見当たらない。この悲しみは何を指すのか。心晴れぬままに、日々過ぎていくもどかしさが感じ取れる。一時それを雄大な自然の中に解き放った。

あきらめの身の安けさはしみじみとこおろぎのねを一人聞きたり（井上せき子・厚木町）

針もてど憂いひそかに忍び寄る膝に置きたる紅き布より（渡辺暁美・横浜市）

何事もさだめなればとつつましく働く妹を見ればかなしも（井上園子・高座郡）

人気なき道のみ選み歩くなる吾がこのごろのかたくなの心（天野雪子・大野村）

などは心に屈折を抱えての表現と受け取れる。反対に

根かぎり働いて感謝された今日の日記の何とすばらしき（安西イツ子・中和田）

は明けっぴろげな満足感。

仕事終えて野良から帰る百姓の若き夫婦のむつまじかりける（滝本たつ子・大和村）

は55号（二九年三月）の掲載。作者にも今日の満足感がある。

住みなれて此の山里の侘しさに親しみ覚ゆる身となり居るも（細谷倫子・大野村）

細かりしからだも日毎肥り来て村の娘らしくなれるわれかも（細谷初代・大野村）

この二人は姉妹だろうか。ともに転入者らしい表現、村に馴染んだ様子がうかがえる。

麦踏めば小つむじいくつも起りけり（小泉日出子・麻溝村）

は「秀逸」、足下の冷たさが伝わってくる。

麦踏みやともに踏まれる霜柱（姉崎ウメ・相模）も寒い。

麦踏や深く凹みしもぐら穴（筑波愛子・小鮎村）

春の泥着物の裾に乾きけり（同）

モグラの穴に足を取られてつまずいた自分、目の付け所が面白い。二首とも「秀逸」に。日々の仕事を表現して選者に認められ掲載される喜びは大きな励ましであったことだろう。

梅咲くや人のはたらく麦畑（鈴木君江・大磯町）

一人ふむ麦の畑の広さかな（金子菊江・豊田村）

二首とも「秀逸」。麦踏は季語でもあり、歌も多い。

麦踏の麦弁当のうまさかな（鈴木千恵・大磯町）

ようように土かけ終えし麦の畠鳥のやつがもうおりている（田村春子）

田村春子の一首には実感がある。「こらーっ！」と叫んで追い散らしただろう。両手を広げた田村の姿が目に浮かぶ。

相模野の西外れには、今は大山と呼ばれ親しまれる阿夫利山がそびえ、四季折々人々を見守る。

ああやっと刈り上げうれし私に阿夫利嶺の上雲が赤く焼けている（安田貴久子）

久しぶり麦を踏まんと畑に出ぬ阿夫利の山に雪光り見ゆ（二美由紀子・高座郡）

寒々と阿夫利にかかる夕日かな（二見幸子・高座郡）

麦畑に追肥する人日に増して土にしたしき春となりけり

麦蒔きも終えてやすけき雨の日も家居したしく衣縫いにけり

も二見幸子の作。二見と二美は同一人物かもしれない。筆名を試みたのか、二美は他に出てこない。

大へちまほのと下がれる闇夜かな

も二見の句、「秀逸」に選ばれている。軒先の風情が伝わる。。

麦の穂をゆすりて渡るそよ風にゆられてましろき除虫菊の花（小野沢しげ・愛甲郡）は「秀逸」。

麦こきて疲れいちじるし帯とけば小麦の粒のこぼれけるかも（麻生喜代子・中和田）

も「秀逸」。身をかまっていられない労働が伝わってくる。

麦刈りの素足にきつし土ほてり（細谷初代・大野村）、寒い時期に播き、踏み、暑い最中に刈りいれる。

餌を持ちて鶏舎に入ればこの朝け羽あかき鶏の一羽足らぬかも（江島登利・津久井郡）

静かなる冬の山かも父と吾もの言わずひたに薪木取りおり（関水キミ・高座郡）

子供等の為只一心に母上ははた織りてあり春の真昼を（山田イソ・都筑郡）

雨の日の田植え盛りに蓑笠の男おみなの見わけ難しも（磯和富美枝・御所見）

なるほど！おっしゃる通り！

子を抱きて向日葵畑に立ち居れば乳の匂いもなつかしきかな（大野錦子・津久井郡）

は「秀逸」、若い母親らしさが見えると評価された。

働かば母の怒りのとくるかと哀れさびしく涙ぬぐえり（小島那香子・御所見）

この母とのもめごとは何だろう。この作者は

ごみ仕事終りし午後をつつじ咲く赤き井戸辺に髪洗いたり

いささかも風無き庭に日もすがら麦機ふみけり暑き一日を

つつましき心となりてわが踏めるこの畑土のことになつかし

などの短歌の他に、詩の掲載もある。

「山仕事の帰路」（同）

暮れ果てた道を疲れ耐え難い心をこらえて帰る／青ざめた私の魂は貧しい一日の生活を黙想しつつ／薄ら寒い情欲を感じる

この他、土に生きるものは自然物に感謝をもって接するなら豊かな不平の無い日々が送れる、と論壇に書いている。作品の投稿に安らぎを求めているのだろう。それが母の不満の種なのか。

芋植のようやくおえて兄上と麦団子食むこの楽しさよ

（小林喜代子・依知村）

この他に、小林には養蚕関連の率直な生活詠があり、いくつか取り上げてきたが、詩欄に幾篇かの掲載作がある。

「青麦の畑にて」

兄が麦に熊鍬かける／どうしてこんなに嬉しいのか／自然に胸の奥からひっぴらいて／一切を任せているからか／どろっ臭い私

「畑道で」（33号・二七年五月）

凸凹の道をガタンコガタンコ／車にのさった肥俵七俵／穴掘り鍬一本／肥桶一つ／兄がひいて私が後おす／太陽や青空は見もしないで／でこぼく〔こ〕の道をガタンコガタンコとあり、兄妹で養蚕、麦、芋を手掛ける農家を支える力強い、おおらかな働き手であるらしい。農村の実情が今に伝わる。

ひと冬を越して案山子や骨ばかし

という風景が眼に浮かぶ描写もあり親しみが持てる。

下肥を施す畑に真白なる馬鈴薯の花咲き盛りけり

（富士塚昌子・愛甲郡）

秋晴れの朝だ炭を焼く煙が青く空にあがっている

（磯波静子・三保村）

昼陽あつき傾斜畠の茶摘みなり一升徳利に水つめて来つ

（大谷登志子・高座郡大和）

大谷の一首は思いきりよく闊達、と「秀逸」に。大徳利も軽々と運び、がぶ飲みもする頼もしく明るい働き者の女子青年。

小夜ふけを足袋つぎ居ます母上に気がねしつつも書読みて居る（島崎ナヲエ・及川村）

かなかなは早咲き〔鳴き〕初めつかくてまた秋蚕掃く日も近づきにけり

上蔟を終へし気安さわが父はいささかの酒によいたまふなり

〔上蔟＝じょうぞく＝育った蚕を蔟に入れる〕

亡き祖母にねだりて買いしこの羽織いろかわりしを見つつわびしえ

稲刈りて身はいちじるしくつかれたり夜業する母にわびて早寝す

母上の肩辺に白き稲ほこり夕べの庭にはたきまいらす

六首ともに「秀逸」で島崎の作品。選者・前田は「稲ほこり」は作者の新造語だろうとしながら、籾ほこりという言葉もあってよいだろう、と寛容な評価。自分の言葉で詠んだ作者のセンスに脱帽しているようだ。母親も優しい。134号に掲載された投稿「青春を生かす」で島崎は身辺を語っている。要約すると、

時計の音に気付くと一〇時、給桑の時間だ。蚊に刺されるのも気付かず読書していると母が女のくせに本読んで何になる、と言うが、読んではいけないとは言わない。父は着物を欲しがらないことをほめる。貧農の娘と生れながら文芸に親しみ青春の心を生かせることを両親に感謝している、と書いている。羽織の一首も生活を写す。堅実な孫娘に祖母はおねだりを許したのか、色が変

わるまで大切に着ながら（156号）感慨も深いのだろう。

不作なる稲の穂とりてしみじみとみている父の顔のさびしき（岸ヨシ子・千木良）

雨降れる朝を糸ひきわが居れば学校に通える友ぞおもわる

二作とも岸ヨシ子。学業を続けることが困難となる場合や上級学校を断念した例は多かったことだろう。

新しき絹の着物も着たくない父亡きあとの母を思えば

（斉藤ユキ・中津村）

ゆとりなき百姓なればこの春を女中に出づる姉をかなしむ

（名倉真咲美・六会村）

は117号（三四年五月）の掲載。作者は女子青年ではないのだが社会情勢、農村事情の一端を示して印象深い。この少し後、戦時色の濃くなる三七年一一月、159号には

奉公に出づる妹を見送りぬ小さき影の淋しかりけり

（川瀬良子）

もあり、一農家の事情の裏にひしひしと迫りくる国家経済の変化があるのだろう。時代の証言と受け止めたい。

繭の値の安きを兄と語りつつ桑園に堆肥施しにけり

（米山美都子・小出）

は三五年五月（129号）の掲載、次の130号には東京からの応募で

花くもり暮れ行く街やネオンの灯

玉砂利を踏みつつ入りぬ公園の木々の緑よ春は深みし

が掲載された。「大自然の法則に従いて」と題した意見が156号と次号に続けて掲載されている。要約すると、

これからの若い女性は家庭という小さな社会だけでは満足しないでしょう。根強い男尊女卑の伝統に縛られ両親や世間は自由な芽を育むことをしなかった。けれども女性は卑下せず天分を伸ばし、陰に陽に働く男子の力となり互尊互敬の精神を涵養し次世代の母胎となるべき、と書いている。現状を把握し批判もしながら将来を悲観してはいない。この時、米山美都子は小出村女子青年団副団長、「横山本一氏に答えて」と添えられている。

笑いを誘う情景や思いがけない角度からの観察も捨てがたい。

鶏のたいくつらしき日向かな（鈴木宏子・都筑）

蚊の声にひよこ暴れし夕べかな（小林すえ子・依知村）

ヘボなすもならなくなりて冬立ちぬ（小林喜代子）

風鈴に糸張る蜘蛛を憎みけり（園田薫子・御所見）

摘草や知らず手に持つ青蛙（熊浜きよ子・中郡）

鋤き鍬に当たりて飛びぬ冬蛙（富士塚晶子・依知村）

草に寝て土筆の長さながめけり（石井カメ子・大野村）

石井カメ子は寝ころんでもタダでは起きない、一句作るこの精神。忙しい日常にありながら一瞬の非日常を引き寄せている。

摘草に親しくなりし都びと（安西イツ・中和田）

田草取り中の一人は話ずき（金子南江・豊田村）

我が父に似たる姿の案山子哉（細谷初代・大野村）

凶作や案山子ばかりが物々し（三田武子・宮前村）

雨蛙腹一杯に雨を呼び（小池喜代・逗子町）

芋のはのつゆをこぼさぬ朝の風（同）

小池喜代の蛙観察はユニーク。微風を詠んだ句も美しい。

繭かきにあきし目にあり蝶二つ（山口幹子・大和村）

山口幹子の繭と蝶々の絶妙な組み合わせ。単調な労働の疲れも際立つ表現だ。次の二句は「秀逸」に。

白蘭にまぎれておりし蝶々かな（鈴木千恵・大磯）
蝶の越す石の鳥居の高さかな（青木伊勢子・渋谷村）

心よき湯にすきとおる我が若きゆたけきももの肉づきはよし（福田知子・津久井郡）

は、ふと与謝野晶子の「やわはだに・・」が頭をよぎった、大胆な自己肯定、肉体礼賛の句、類を見ない。我が身を愛おしみつつ詠んだと感じられる歌に、

青草のしとねにいこう夏の夜の我が後れ毛のほほによろしも（平野美津子・小岩町）

美しき乙女の肌の色に似て夏を明るく蓮咲きにけり（同）

がある。恋心を秘めていたのかもしれない。

「恋」の字が使われる作品は少ない。恋の歌としては、4号（二四年一二月）の曾根田が最初だろうか。

虫鳴ける夜な夜な君を想うかな（曾根田松子・高座郡）

終日を君と草笛吹きたりし恋知らぬひのなつかしきかな（山梨春子・中郡）

新宿のホームに別れし君がみ目胸に抱きつつ麦踏みにけり（みどり・座間村）

君の声聞こゆる畑にうつむきて心落ちいず草取っている（金子幸子・御所見村）

など、つつましい。次も金子の作。青年団関係の句会だろうか。

運座会人去りて掃く夏座敷

三七年七月の盧溝橋事件後の九月号（157号）に、多くの作品、特に福田正夫選の詩が毎号のように掲載されている常連男子青年の俳句があり目を引いた。

事変ニュース聞く人よれり涼台（川田作治・小鮎村）

この次の158号に

出征する君に捧げん真心は守護袋にふうじ送りぬ（小俣紀代美）

も掲載され、戦時色が歌欄にも現われる。恋の歌は慰問袋や千人針に託される。戦いに思いを致し、女子青年自身が気を引き締める歌が取り上げられ始める。

国境の君に送らん便り書く秋の夜更けの淋しかりけり（小夜ミヤ子・厚木町）

出征の君送り来しステーションに夕の月ほのかにさしぬ（上原久子・厚木町）

戦える兵の事ども思いつつ今日も動く〔働く〕吾にあるかも（同）

出征の勇士が雄々しき言の葉にただ感激の涙湧きくも（新倉八重・綾瀬村）

出征旗みのりの田の中すぎゆけり（同）

戦場に喜ぶ兄を想いつつ慰問袋のふた閉じにけり（川瀬ミユキ・小出村）

家毎に千人針をこい行けば心いそいそと縫いてくれるも（高橋悠紀枝・都岡村）。

高橋は三四年春、女学校を卒業して帰郷したとあり他にも穏やかな詩、句の掲載がある。

千人針頼むと寄りし少女なり吾が重き荷を持ちこたえつつ（田中澄子）

主往（い）きてうまやに肥る荷馬かな（小池喜代・逗子町）

と「秀逸」に選ばれた

稲をこぐ音をひくめてニュース聞く（同）

はともに小池の作。働き手の出征で荷を運ぶ馬の出番が減ったのだろうか。最終号の直前166号で小池喜代の事情が見えてきた。

今日もまた銃持ちしまま我がひざに小さき勇士はねむりたりけり

があり夫が出征している、と推測した。ニュースは逃せない。

ニュース聞く母のすがたや霜の朝（高橋春江・都岡村）

も、出征者のいる家族の一員として、母の姿を通して父や兄の無事を祈って詠んだ女子青年のものだろう。

汝が父の出征と知らではしゃぎいる幼子を見つつ涙流れぬ（青木富貴子・小出村）

は159号（三七年一一月）の掲載。幼い弟妹だろうか。次も青木で、

野帰りの母が折り来し草花をそのまま活けて美しと思う

は「秀逸」。農家の庭先の情景が美しい。歌欄の農村風景は農作業と戦時色のまだら模様になってきた。

この159号には創刊からの編集責任者・金井利秋が「ふりかえりみれば」を寄せ、十余年携わった若草との別れを述べている。青年団の中から機関誌発行を求める機運が盛り上がったこと、あまりに文芸的との批判もあったことなど。若草を誇りに思いながら、読者減、経営難からの廃刊が近いことが察せられる文章だ。

横須賀市婦人会が廃物を金に換えて出征軍人を支えているので協力を、と呼びかける囲み記事が出るのもこの159号。

（二）小説、小品、詩等に見る女子青年の心象風景

1、小説、小品、感想

先ず、小説と小品、感想を中心に見ていく。選者は津久井郡出身の加藤武雄（一八八八～一九五六）で、女子青年の掲載作は多くはない。あらすじを記して日常生活や社会状況を探ってみる。時に、同一作者の他分野の作品があれば合わせて紹介、使われた言葉を活かしながら要旨を記してみる。

2号　小説　「指」（渡辺文子）

山ほどの麦を背負った少女が都会に出た同級生とバッタリ出会う。連れの男たちが写真を撮る同級生の指は白い。そこの麦を背負った汚い人が邪魔、と男たちに言われて愕然とする少女。黒蟹のような祖母の手が目に浮かぶ。白い指の女や男は自分の住む国の人では無い。

選者は小説とは言い難く、感想のようだが素直に書けているから採用した、と書いている。

4号　随筆　「鏡」（浜田敏子）

鏡の中の醜い顔、白粉は美を作らない。諦めようね、鏡の中の人よ。赤い頬と真っ黒い顔は百姓娘の誇り。

6号に浜田敏子の小品「緋桃咲く頃」の選者評があり優れた点を持っていると書かれたが掲載はされなかった。

40号　論壇　「求むべきもの」（同）　世に軽佻浮薄がはびこる時、華美を排する力を持ち堅実第一でいきたい。

48号　随筆　「蛙の呼吸」（同）

青木の葉にぺチャッとついている雨蛙、微かに呼吸し、人を馬鹿にしたようにきょろつかせた目。浮薄で自分を忘れがちだから、大空に向ってうそぶく蛙に負けるのだ。笑っているような呼吸も羨ましい。

これらの投稿者所在地は都筑郡。この他浜田敏子には短歌の掲載もいくつかあるので紹介したい。

山峡を青物売りに行くならし牛ひきてゆく娘ありけり

は「秀逸」。当時の状況を今に伝え、情景が浮かんで美しい。

この朝け露のすがしく嬉しけれ大根畑の土の湿りは

雁渡る小田の水面は秋さむしいよよに澄める富士の高嶺は

むし暑き昼下がりなり畑にて馬鈴薯の花を恍惚と見る

夕やみの匂いは畑に漂いて馬鈴薯の花すがしく咲けり

最後の一首は横浜市の在住となっている。同じ人物と推測するが確証はない。50号（二八年一〇月）に掲載された

帯解いて畳に落ちし扇かな

の所在地は根岸町となっていた。55号の談話室に、六年の久しい間どんなに慰められたでしょう、懐かしい思い出の園を出なければなりません、女てう名の短い青春ゆえに、と投書。若草文壇からの「結婚退場」だろうか。所在地は武蔵野。

5号　特別原稿　「我等は今の世に何を求むる乎」（並木加代・都筑郡）

現在満たされない要求が沢山あるが先ず、自分を築きあげよう。そのために一村に一二か所図書館を設置、一日の疲れを読書によって回復、人として修養し男子に劣らぬ能力を身につけたい。

6号　感想　「或夕方」（井上登茂子・足柄上郡）

家路につく夕方、鎌を持った姉さんかぶりの引き締まった顔に出会う。会釈を交わすと「お花にいってらしたの」と笑みを浮かべて過ぎて行った。彼女の瞳は私の心の底まで見通したにちがいない。趣味のため農繁期の日曜をお花の稽古で過ごした自分を嘲笑した。

18号　小品「労働の夕べ」（同）

今日も一日人並みに労働できた。それにしてもこの手は。白かった手が思い出されるが、これでようやく一個の人間として生きられる。

12号　感想「五月の或る日に」（濃沼鶴子・橘樹郡）

桃と梅の区別がつかない都会の男女、人形のような厚化粧の女と洋傘を持った背の高い和服の美しい男。一個の桃が口に入るまでの農夫の汗は思ってもみないだろう。そして平和な農村の娘の心を乱す、知らぬ間に罪をなす人達。

14号　小品「農家の処女」（矢作はな・都筑郡）

夕食後講習会に行く兄が「お前も」と誘ってくれる。けれど「貧乏人の娘が」と母が言うのを恐れて、行かないと答えた。処女会からは誰が来たのと聞く元気もない。

15号　小品「パラソル」（渡辺暁美・横浜）

友人と天神様へ行く約束をしたが新しいパラソルが無い。昨年の震災で全ての財産と弟まで失った。

「田の草取り」（内田美保子・都筑郡）

ぴりぴりするほど背を焼く太陽。苦しい、ほんとに百姓はいやだ。

19号　小品「桃割れ」（清水喜久枝・都筑郡）〈第一席〉

友人に御揃いの簪を贈られ、大好きな桃割に結った日、母にも似合うねえと言われ鏡の自分に見とれた――古い日記の一編。

23号　小品「姉の結婚」（青木静江・中郡）

姉にもやがて母のような時代が来る、母にも姉のような時代があったのだ。時代と運命がひしひしと感じられた。

26号　小品「六月の小景」（清水菊枝・都筑郡）

山裾の桑畑はいつのまにか刈り取られた。麦刈り田植もしなくちゃなるまい。新聞を読んでいるのは済まない気がする。

19号の、「喜久枝」と同一人物だろうか。28号の論壇に「菊枝」で「内鮮相愛」が掲載されている。要約すると、

県に「内鮮共和会」が設置されたが同化と融和は制度や施設よりも隣人としての暖かい相愛でなくてはならない。冷遇や不親切を無くし神奈川県が住みよい故郷となる日を信じよう、と結び、法律や制度ではなく人として仲良くしようと穏やかに呼びかける。モダンな感じを与える詩の掲載もあった。

18号「秋晴れ」（清水菊枝・都筑郡）

風はさわやかに汗ばんだ／子供たちの額にやさしいキッスをして過ぎていく／なんという愉快な秋だ

35号「靄の海」（同）

深く深く限りない靄の底の海にあえぐ／一匹のお魚ですの私は—／私から去ったあなたの魂を／なおも再び探し求めて

27号　小品「私の心に思う事」（磯崎清江・足柄村）

我が国の人々が日一日と贅沢になっていく。女性として、真に修養しなければならない方面に力をつくそう。

31号　小説「忌避」（米光紀久子）は掲載を逃した。「小説の選後に」で選者の加藤武雄が「小説らしい小説をやっと見出すことが出来た。若い夫婦の夫が入営について、その苦悩をかいたものであるが、その心の動きが如何にも自然であり、且つ深刻である。ことに女主人公の描写はすぐれていた。然し雑誌の性質上発表することは出来ないかもしれない」と書いている通り、編集者の眼鏡にはかなわず掲載されなかった。次号32号に「忌避」の作者が「談話室」に投書している。

「ほめるにもけなすにも、すぐに「女だから」っておっしゃる方がある様ですが若草の読者の方だけでも、そんな言葉はおっしゃらないで下さいませね。私たち女性は、伝統的につけられているハンディキャップをどうかして除きたいともがいて居ります。今は混沌の中にうごめいて居る私達も、その中には何とか自分の道を見出すでしょうから。」と書いて最後に、三月号〔31号のこと〕創作の作者名「米光」は誤り、と指摘。「はじめて少し長いものを書きましたのに、あんな変てこな名前に誤植されて気持ちが悪いものですから申し上げました」として、署名は（あしがら　末光きく子）となっている。

自身を含めて身辺にモデルがあったのか、小説を構成する能力に加え、意見を表明する勇気も持つ、知性ある人のようだ。選者は掲載不可を予想してあらすじまで載せたのだろう。この選者はたびたび掲載外の作品を論評する。「談話室」が投書者・末光きく子の苦言を掲載したのも勇気あることか。前後して短歌もある。

うす明かり障子を透ける庭の面に夕べひそかに雨降り出でぬ（末光きく子・足柄）「秀逸」

貰い湯の帰りの頬に冷え冷えと月夜の風の沁みる秋かも

みぞれ雲はむかいの山にかかりいて夕をとみにさむさ増したり

時代を写して風情のある、「貰い湯」の一首も秀逸にしたい。

33号　小説「キャラメル」（井上フミ子）も素直な心、表現もひねくれていない、と評されたが掲載は無い。

34号　感想「からし薬」（平川つや子・中津村）

針仕事をしながら、母が水を切って乾かしたからし菜を漬けるのを見ていると、洗った菜は頭をもたげて生きようとしているようだ。母は気付かない、大きな重石がのせられた—。

心優しい細やかな観察者だ。標題の「からし薬」は「からし菜」の間違いだろう。

39号　小説「母病みて」（相模愛子）

飲んだくれ放蕩の父と白痴の弟のいる実家から「ハハキトク」の電報で駆けつける。母は心の病。知らせを受けた理髪師の夫は仕事道具を整えてかの地で仕事をしようと決心。引っ越してまで親の面倒を看てくれる亭主がどこの世界にいるものかと村人に噂され、晴れがましさが心に湧いてくる。

39号　随筆「薬売る娘」（平川喜美子・中津）

製糸工場の笛が一〇時を知らせる。汗を拭きながら糸車を廻していると変な訛りが聞える。紺絣を短く着て脚絆にこうがけを付け、若いからか洋傘をさしている。薬売りだ。姉は断ったが気の毒な気持ちで見送った。

40号　小品「友情」（まゆみ・箱根）

みち江さんと一緒なら私の母も許してくれるからと、みち江の父を訪ねて説得。手紙ではだめと思って直接誘いに来たという。町の人達は袷かもしれないけど私達はセルにしましょう。私に引け目を感じさせず事もなげに着るものまで決めてくれる有難い友。

作者名の（まゆみ・箱根）は小沢まゆみだろう。短歌に

久々の便りと思うにさみしけれ朝鮮に行くと書きてあるなり

新聞の歌壇の歌を切りぬきて我は作りぬ小さき歌集を

がある。努力家であるらしい。

46号　小説「手紙」（高柳なみ子・横浜）

工場の徒弟慰安お花見会を明日に控えて女工達は着物の話。一五歳の少年工敏雄は細々暮らす父と姉には無心できず、奉公に出ている兄に手紙を出すが返事が無い。行かない決心がついたところへ兄から二円送られてきた。お前達は年一回の慰安があって羨ましいよ、楽しんでおいでと言われたが絶対に行けない、兄に申し訳ない。

入選作六編とある中で六番目のようなのだが、この一編のみが掲載された。

48号　随筆「つつじ」（同）

庭木いじりは隠居仕事と言っていた父が植木棚を作っている。年をとったのだな、でもまだ隠居できない父。私が男なら早く隠居できるだろうに。蒸し暑い空気の中に釘打つ音。

51号　詩「海の凱歌」（同）が載る。

漁船が港へ向かう／船底一枚を命の岐路にして／赤銅色の腕／一家を支える惜しげもない労働／貴い命を怒涛の抱擁にまかせて

50号の論壇には「女性の立場から」（同）がある。

男子の従たるべき女が同権を叫び経済関係を無視した解放運動が出来ようか？という意見について少し考えてほしい。私は解放を叫んだり参政権を望んではいないが女子の余りに切り詰められた立場を認めてほしい。時間を与えよ、男子の従と言わず助手として導け。若草の投稿も女子は長続きしない、ペンより家事という意見に圧迫されている、と不合理な日常を嘆いている。参政権はまだ身近ではないのか。ぎっしり詰まった労働の苦しさを「圧迫」と表現、「男子の従」もきっぱりと拒否。前後するが、

38号論壇「女子にも教育」（久西葭江・都筑郡）にも率直な女子青年の不満が述べられている。

青年少年には普通選挙のために成人教育がなされているが女子には無い。女に学問はいらないという古語を捨て政治的知識を培養すべきだ、と。これらは若草の読者ならではの発言だろう。

50号　小品「黄昏」（佐伯則子）

三か月前まで親しくしていたあの人が、妹を通じてもう会えな

いと言ってきた。何度もnと彼の間の伝書鳩役をしてきたのにこの扱いは侮辱だ。私はnが跪いて嘆願するはずの秘密を握っている。嫉妬心もある。心臓を突き刺すような言葉を葉書に並べた、満足と好奇の心で。

57号には男女とも掲載無し。選者は載せなかった三篇の選者評で、句読点、会話、文法上の約束などの無視など粗雑すぎる作品でレベルを下げるとこの雑誌の品位を下げる、と理由を述べる。

60号　小品「パラソル」（金井アイ）

新しいパラソルのハリ切った絹の布を透かして桃色の光がやわやわと流れる

61号　小説「冷めた情熱」（緒方未知子）

主義者の伴侶としての生活がいかに近代的で勇ましいか、新しい思想の保持者を任じていた美弥子は誇らしかった。農民運動家の夫の外出に私服が付く。生活の糧とする原稿を書く時間もとれない。美弥子は支払ができない。運動も思うように動かない。夫を尊敬しているが情熱が冷める。

選者は冷えて行く過程の書き方が粗雑、心理を扱えとアドバイス。「入選作はない」としながら掲載された。

62号　小品「永劫に」（緒方道子）は掲載されなかったが掲載外の佳作として、古い家庭に入れられない処女が友にも裏切られて永劫の旅に出る。通俗的主題を心理描写でおぎなっていると選者の評価が載った。未知子と道子は同じ人だろうか。同じとすればアドバイス通り「心理」を扱っての成功か。64号に緒方三千子もある。65号の短歌

彼の性格を知れば決して憎めぬと言う人あり胸に沁みる言葉だ（緒方道子・相模）

は「秀逸」に選ばれた。選者・前田夕暮は「自由律発想法が適確」と評価。前田には自由律短歌の時代がある。

67号　小説「放火」（緒方道子）

伝統の誇りを持った老舗も文化の波に流されていく、そこに生まれた悲劇を扱ったもの、構図も手法も型ができてきたと紹介されたが掲載は無い。

63号　小品「会服」（山本千代子・座間村）

女子青年会はいつも、友人と着物の相談をしなければならなかったが会服ができて、ほんとうに軽便になった。会服姿の友人が迎えに来た、私も鏡に会服姿を映してみる。衣装の展覧会のようだった会合から進歩して生まれた会服、私にとても良く似合う。

山本は65号に「生活改善の第一歩」を寄稿、情熱に富んだ論説の掲載は喜ばしいが文体がムズカシ過ぎる為、無学短才な私は論旨の把握に苦しむと述べている。さらに空想論は売名的、「若草論壇は売名家の集合だ」と聞いたこともある。会服制も進んだが守らない者もいると聞く。大声で改善を叫ぶより実際問題から一歩一歩実を上げたい、と書いた。制服・会服は戦時色、全体主義と一蹴されがちだが、女子青年には違った事情もあったのだろう。

この号で選者は小説、小品に入選作無し、として「選後感」に、投稿者の題材がみな地主と小作の対立関係を書こうとしていると指摘。若い農民文芸の必然かもしれないが「深刻な体験なら簡素な表現で、もっと迫力」があるはず、と書く。女子青年の掲載作にこの対立を主題とした作品は無い。

66号　小品「秋に想う」は「会服」と同じ山本千代子の作品。資格を得るために深夜まで勉強する長兄。帰省の度に八時間勤務もつらいよという次兄は、幸福は物質では賄えないという。寄宿舎で店務めに必要な学科を学ぶ弟は、病を得て三週間療養して戻った。男子たるためにそれぞれ苦悩を忍んで働かねばならない。

気楽に編物やお針をしている自分が寂しい。

この後72号から76号にかけて連続で俳句、短歌と詩一編が掲載されている。

刈り伏せし大麦たたく雷雨かな
桑切りて青空広くひらけけり
初秋や陽除の影に糸を引く
麦殻の陽除けをかけて妹とまだ露のある桑もいでいる

麦殻の一首は「秀逸」に選ばれた。選者は口語の自由さをほめている。

稲こきの歯車の音冴え冴えと響きおるなり秋晴の日を
貧しさにあえぐ哀れな村人の生活を知らぬか不在地主は
糸繭の下落が祭りを左右する淋しい祭だ村の祭は

祭りの一首は「秀逸」。糸価と祭りを絡ませたり「不在地主」を詠んだのは山本千代子の社会性だろう。次に紹介する詩を含めて、山本はするどく社会に目を向けている人であるらしい。

「競争」
成人の社会を知らぬ／いたいけな児童にも／血のにじむ競争があると言うのか／充血した幼い妹の／勉学にいそしむ瞳は／私の心を暗くする

67号　小品「私」（関山千代子）

火の番の太鼓がなる、一二時だ。締め切った四畳半は唯一の慰安場所、本は教師だ。気の小さい私は許しあう友を持たないので暇さえあれば本を読む。

これは働きに出ている人の作だろう。このあと辺りで、小説、小品、感想などと区別した投稿作品は姿を消している。

158号に「情愛の花」（小俣紀代美・有馬村）が掲載されている

が応募作品から選ばれて、という体裁ではない。分量は短編小説に区分される分量の創作。

医者にと望んだ弟の学資も使い果たして病の父が逝った。二十歳の姉は工場の事務員に、一七歳の弟は無気力に落ち込む。母の死後養女に出した妹のことがしきりに思われる。女学校に通う養家の妹と姉に恥じないよう努力しなければと決心をかためる弟。

菊の花見つつ今宵の淋しかりはたちの歳の暮れ行く思えば
あきないにようやくなれてこの朝も心明るく客むかえけり

も小俣の作。働きに出た「姉」のモデルが自身なのだろうか。先に挙げた「出征する君」に守護袋を送る歌も小俣の作。

2、詩

次に小田原町出身の福田正夫（一八九三～一九五二）選による詩を中心に見ていく。だが、作者の真意を汲み取るのは難しく身に余る。某新聞の読書欄に、「詩の解釈は複数あるのが当然」という公理に則って自由に詩を読み楽しんでいると書いている、詩人ではない文学者の言葉を見つけた。この言葉に力を得て、独断を恐れず、女子青年の毎日を彷彿とさせる農作業、農村生活、心の葛藤と時代が伝わってくるものを拾うことにする。先の章と同様に同じ作者に他分野の作品がある場合には合わせて見ていきたい。表現は変えないが（略）を入れて短縮した。

2号「幻の父—震災に父母を一度に失いて」（豊島たか子・中郡豊田村）
父と母の在りし日の面影／朝となれば／ただ寂しさの影をとどめて／遠く消えゆく幻の面影

9号「暖かい午後」（同）

幼い主人はどこで遊んで・・そこにからっぽの乳母車

11号「二月の草原」（串田すぎ子・都筑郡）

二月の草原は愉快／すっきりと晴れた空に向かって／すくすく伸び立とうとする夢のような力

13号「別れし君よ」（小松香弥子・足柄下郡）

別れし君よ／文たまえ／静かに更けし／湯の里の／君とむつびし庭の面に

15号「白雲」（同）

とりのこされた様な／淋しさに／消えゆく白雲を見つめていると／風は泪をあたえて／白雲の後を追って／自由の国へいってしまいました

「幼な子」（山崎千代子・足柄下郡）

編物をしている私をのぞく／ねちゃ〔姉ちゃん〕と差し招く／幼な子らしい貴い姿／あの子にも遂には／人の世の荒波が襲い掛るだろう

16号「蟋蟀よ」（加藤徳子・中郡）

松虫や鈴虫の高慢な声より／私はお汝の所きらわず／馬小屋の隅でも／釜土の隅でも（略）お隣のお嬢様のお琴より慰めになる

17号「小田のまひる」（同）

なんて平和なシーンでしょう／色あせた麦わら帽をかぶった若い農夫が／真昼の小田に入って行く

19号「野火」（佐藤千秋・愛甲郡）

冬の野に見たいものは／野焼きの火です（略）真紅に燃える野火を見るとき／私の消えかかった青春の日の心と／なつかしい思い出を／湧き起させてくれるから

20号「私の心の嬰児よ」（同）

耕人の母体から／生まれる嬰児は／純で素朴な私の胸で／土の香を吸い／草の褥に座して／四季の大自然に守られて／成長しようとしている

25号「なやみ」（串田すぎ子・新治村）〈第一席〉

弱き子の胸／おお弱きこの胸は／ちち色の薔薇／薔薇の／吐息に似たり

第一席に選ばれ「久しぶりで串田さんの詩を見たがやはりすぐれた境地を持っている」、一息にリズムが完成していると高評価。3号に選外で掲載の無い「聖なる私語」、11号「二月の草原」以来ということか。この号の短歌に串田の短歌も。

真新し麦藁帽子を斜にして牛追うて行く若き人はも

時代をずっと下った111号（三三年一一月）、男子青年の高橋俊胤による「土に芽ぐむ愛の結婚」に、この串田すぎ子と岩沢葉久愁の結婚が書かれていた。曰く、若草創刊のころ、二人は都筑郡の代表的詩人だった。「思想と趣味の一致は今羨ましい程理解しあった生活をしていられる」信仰的、芸術的なすぎ子。岩沢は処女詩集『美しき収穫』を出版、良き親となっている。この大地に朗らかに詠い働いていくだろう、というもの。「百姓には嫁がこない」「百姓に娘はやれない」という風潮に抗して、中郡の青年が「嫁入り道具は鍬と野良着」の栃木の女子青年と「スバラシイ模範的」な結婚をした話とともに紹介している。

26号「山百合」（広田マツ子・鎌倉郡）

ほっそりした山百合に／散らばって来る風／樫の木に／もたれかかった／笑いころげそうな山百合

37号「春のけはい」（歌田つな子）

河原石の温もり／しずかにやよい近きを／ひた恋うる人しなけれ／立つ春の気配に／胸はさざめく

この詩の選者評は、先人の模倣でなければ抒情詩人として中央に出ても恥ずかしくない、というもの。この時応募総数一四三、掲載は一四で、女子は二だった。

39号に同じ歌田の「処女の日」がある。

（略）我がまなざしに師の君／ややあってほほ笑み給いき／胸高の袴すてて／土にかえり幾年／君を知り／君を忘れ（略）我が処女の日は／今日までか来し／うつし身は桑摘み疲れて／すずろなる思いに憩う

41号には「秋の日」（同）

まっすぐな狭い道に桑の病葉〔わくらば〕が散る／コオロギの細音／山菊が星のように咲く

42号に「初冬」（同）

糸繰車を止める／初冬の日射し／指先に巻き取った糸は湯気を含む

養蚕家に育ち、胸高の袴をはく女学校を終えたのだろうか。どれも抒情的で生活に根差している。君を知り、君を忘れ、うつし身は桑摘み疲れてと、穏やかに美しく相模の女子青年の現実を写した。模倣の根拠は何だろう。これに先立つ19号から28号に、「歌田つな・津久井郡串川村」で短歌が掲載されている。

しどけなき吾が終日を嫁ぎゆきし姉のみきつく叱り給えり

この真昼歩む端山の枯れ草にさみどりを見し春ちかみかも

紅椿ほったり落ちて昼しずかネルの単衣を縁先に縫う

さ夜ふけを轍ねをたて過ぎゆくは桑買いて来し車ならしも

次の一首は「秀逸」に。

あがり雨しばしの映えは夕づきてこぼれ小豆の粒粒あかし

27号「病床譜」（波路かよ子・足柄上郡）

みだれ髪うなじにくろく／まつわれる病の床に／ほそりたるあおき指もて／やみふしし日数かぞえつ／すこやかに生きよとねがう／ちちははさびしく笑みぬ

選者は「波路さんという女流の新人を見出した」ことは愉快、と。続けて次号に

「おそなつ」（同）

濡髪の肌に親しき匂いなり／潮騒の遠きひびきに／胸に恋情は充てり／おそなつのゆうべ／思いあまるため息のかげに／からす瓜のほの白き花うかびて

38号「うらぶれ」（同）〈第一席〉

良き衣を身にまとえども／心つねに旅人のごとし／人気無き山に登り／泣きたい思いを口笛に託す／ああ、いのち絶えよ／野の花のごとく

波路かよ子は、女流で優れた新人「うますぎるくらいだ」との高い評価。29号から39号には短歌も採られている。

涙流し我にもの言いし人のこときょうしみじみと思いうかべぬ

夕ぐれのこころ侘しさ子を守りて背戸に出づれば風やや強し

は「秀逸」に。

秋くれば夕かたまけて洗いたるこの黒髪の肌につめたし

死ぬべかりしいのちをいまも保ちいて死よりつらきくるしみに生く

45号「夜更けに思う」（小林うめ子・高座郡）

火のけの少なくなったこたつに（略）何かを考えてみたいのです／この憂鬱をどこへまき散らしましょう／夜更けの汽車の音がひびきます／誰かの憂鬱をのせて／走っていくの

でしょう

前後するが38号には、感想「丘の思い出」（同）がある。野イチゴを採った思い出の丘、サクちゃんはBの製糸工場へ出て両親を安心させた。サアちゃんは足柄の清水村、勇は東京に引越したが千葉に入隊、兄も来年は兵になる。

36号の論壇に「読書せよ農村女性」（同）がある。娯楽の中で最も高尚なのは読書、女が本を読んでいるようではだめだという老人の声があるが欧米視察の新聞記事に、欧米の農家の主婦は外で働く夫に新しい知識をもたらすとある。百姓女だから何も知らなくて文化に遅れても損も得もないと卑下する必要があろうか、と若草も熟読しているに違いない、近代女性の意見を述べている。

51号「土にいこいて」（同）〈第一席〉

青い空だ／白い雲がふんわりと流れて行く／今日も又畑の中で／青い空を一心に見上げる私（略）何かなしに悲しくなる／土の香に親しみと喜びと満足を感じねばならぬ私なのに／ああ愚かなる私の心（略）女だ・・やっぱり私は女だった／虚栄と野心に苦しんでいる／よわいよわい女なのだ。

ここで選者は小林うめ子も詩想が深くなったと評価。

53号「田園賛歌」（小林卯芽子）

晩秋の空に阿夫利山がくっきり浮かぶ／太陽は麦蒔く人に快い光りをそそぐ／今日は日曜／子供たちは朝から野良で竹細工の鉄砲で遊ぶ／皆元気で呼吸している

があるが所在地は同じで作者は小林卯芽子となっている。

阿夫利山寒々として秋の逝く

も卯芽子なのだが同一人物と推測した。以下はまたうめ子で掲載。

55号「灰色の人生」〈第一席〉

六畳の部屋／古びた畳の色よ／十ショクの電灯はぼんやりと／媼一人炬燵にありき（略）来し方不運なりし老婆の／丸き背（略）あわれまた何時の日にか／我にもかかるいぶけき日が来らんとするか／恋もなく／希望もなき人生／老いし人の灰色の存在を淋しむ

この号で小林は常連の男子入選者・小泉宗雄の作品を礼賛、励ます言葉を談話室に投書。積極、果敢な人でもあるらしい。

56号の談話室にも、うめ子で投書している。55号掲載の短編を嬉しく読んだと書き出し、歌や詩をつくることを野心家、売名家とけなす風潮に心が折れる。文芸がなくては淋しくてならないし、文芸は苦悶の現われと知ってほしいと書いている。

春の陽を背にあびつつ髪洗う母の心よなごみてあるらし

この日ごろ日に焼けた顔をしみじみと鏡に映し淋しさの湧く

職退くとのらしし父のくらき影思いつつ今宵眠られずいる

兄と二人麦刈りの日のうれしもよ雲雀の歌を真上に聴きて

など、この間に身辺を詠った短歌もある。

65号「野の晩鐘」（同）

貧しい百姓／平凡な毎日／でもこれでいい／これでいいのだ（略）貧しい百姓むすめは／今日も昏れて行く畑の中で／寂びたかねの音を胸に一杯にした

が載り、次号に選者の「時評」が出る。「小林としては良い方ではないがどの作品にもある真情に動かされる。女性らしいこの諦念から出発する小林の将来に期待する」と励ましている。

この小林は後に農業で歌集も出した加藤哲雄と結婚した加藤梅子。自身も生涯作歌を続け、自宅を例会に開放して両人で後進の指導もした。農村の合理化などの地域活動にも関わった。（『時代を拓いた女たち　かながわの131人』）

46号「子守の唄える」（竹村文子・高座郡）

月が出ました／西の小山の使いは寒い／坊やねんねよお山もねんね／黄色いお月さん寺の屋根

47号　小品「傷心」（同）

私はハーモニカもできない貧しい子、孤独の影を寮の窓の月に照らされて、せめて思う存分涙をながしたい

「五月」（同）

草いきれ／押されるような／蒸されるような／この魅惑に惹かれて／五月をさまよい歩く

も掲載され、さらに短歌

我がなやみ時にみずから漫画化しあざけりてみぬ淋しくもあるか

が「秀逸」に。選者が「秀逸」にしなくても秀逸にしたい一首。「寮の窓」とあるから紡績関係か何かの働き手かもしれない。

47号「蛙」（平川喜美子・中津村）

蛙が啼く朗らかな肉声／放縦な春の夜の情調をそそのかす様に／さみしい私は慰めをお前に求める

選者は「この号は女流推薦とした」として中央の新人並の力を持って来たと評価。浜田敏子、高柳なみ子らも入選している。

次の二題はリズムが良いと高評価。「糸くりながら」は「真実を採った」とされたのでほぼ全文を掲載して当時を振り返る。

49号「六月の午後」（増田セツ・綾瀬村）

新鮮な緑に映えて洗濯物がくっきり白い／風は青葉の中を爽やかなダンス／空は清浄な人の眼のように澄み光りをはらむ

「月出ずる頃」（秋山はま子・中郡）

やがて出る月がこの水に砕け散るのを見たい／胸も晴れるか？／人の子に降り掛る苦しみの雨を／月影に砕ける川水に流してみたい

「糸くりながら」（熊坂春子・中津村）

教育のある人々のみが／なぜ、百姓女、糸くり女と冷笑をなげられるのだろう／学校へ行った人／それが偉いというのだろうか／立派な服装して遊んで／感謝する事を知らない人／それが真の人間なんだろうか（略）糸くり女／百姓娘／純心と素朴とに生きている女／それが何で卑しいのだろう／大自然に教訓され乍／鍬持つ人を助ける女／それが何でまずしい女なんだろう／糸くる女の細い二本の腕にこそ／国の富が秘められて居ろうものを／鎌振り上げる百姓の娘の胸にこそ／未来の国が秘められて居ろうものを

この49号は二八年九月の発行。熊坂春子は何とか自己を肯定しようともがきながら、国家の経済に疑問を投げかけ未来を憂う、聡明な人だ。

54号「空を仰いで」（同）

胸のありったけをうちまけて／心行くまで泣いてみたい／妬ましいほど澄み切った空に星が燦然と輝く

野良帰り故なく折りし月見草

も熊坂の作。美しい表現でありながら心に複雑な思いを抱えていることをうかがわせ、気になった句だった。

53号論壇に「農村忌避について」（高泉佐和子・御所見村）がある。農村は目覚めつつあると言われる。自己の地位を知り不平

の声を上げ始めた。女と生れて虚栄心はあるが心がけ一つ、郷土に質素な意義ある生活を築こう、と堅実な意見表明。以下に短歌

日のくれし厨べにいり父母のかえり待ちつつ茄子の皮むく

夕まけて時雨の雲は晴るるらし障子に映る稲たけの影

山うけの棚田の午は暖かし芹採るらしき子は洗足なり

がある。洗足は跣〔はだし〕か。ここまで在所は御所見村。以下は前橋丸二製糸場からの投稿だった。俳句は二句とも「秀逸」。糸を取る大切な指に草の色が付いてしまった、休日の開放感と仕事への誇りも感じ取れる。

ようやくに糸とる業に慣れにけり久々にして家に便りす

朝から業に追われて我はあり芝居の太鼓が窓した通れり

煙り吐く大煙突の影長し倉庫の壁に夕日あかあか

草摘むに広き榛名の裾野かな

草摘んで糸とる指に色沁みし

この後、59号に詩「故郷の友へ」を投稿したが載らなかった。選者は「新人を多くしたいため」と書いている。高泉の詩はこれまでに掲載がなく、新人なのに残念。この後には入選、掲載の形跡が無い。家事を担って父母を助けた娘は紡績工場の工員となった。文芸は手放していない。

57号「教え子の棺」（比留川よし子）〈第一席〉

（略）浄瑠璃の言葉のごとく／逝きし子の容色よかりし／才ありて従順なりしを／唯一つそむきたる死よ／その朝は案山子の歌を／ほがらかに歌いしときき／いとしさは胸にせまり（略）教え子の棺送りて／我等行く涙流しつ

59号「初夏の真昼」（同）

羽二重を張ったような／澄み切った大空／（略）何十の凧がのた打ち唸り／（略）はち切れそうな宇宙／若人よ出でて見よ／この初夏の真昼の壮観

59号に、小品「初夏の道」（同）もある。東京深川から手紙をくれた友人を、もう故郷に帰ったかと訪ねてみた。仕事に忙殺されて自然の変化さえ目に入らなかった。凧揚げをする子供達。

65号「夕べの詩」（牧野つね子）

麦播きて家内（うから）と帰る野路は寒し／ひたひたと温かき風呂の湯よ／窓に金星を仰ぎつつ／働きて疲れし心癒すうれし

66号「理想」（大竹美弥子）

灰色のような寂しい人生も／バラのようなはなやかな人生も

今／わたしの心には起こらない（略）ただほんとうに平和な／農民としての世界を／私の生は歩みたがっている

69号「生きる力」（荒井登志子）〈第一席〉

（略）その山こそは（略）空へ空へと双手をあげて／伸びつつ伸びつつあるもののかたまり

荒井は新人ながら第一席に採られた。67号でちょとだけ顔をだしている。詩「燦然」で、星の冷たい光りは／宝石の壺をぶちまけたようである、という短いもの。

この頃、選者・福田は四国九州を講演して回ったのか、各地での詩の理解不足を「選者評」で嘆いている。「文学が人間を悪くすると考えているところすらある」神奈川県下はおおかた理解していると信じる。「大地を踏みしめて生まれるままを詠った詩が人生を培うのだ」と書いている。（67号・三〇年三月）

72号「田園の明るさ」（田辺よね子）

（略）実った麦の穂が／狭い野良路に／気楽そうに揺れてます（略）ひょっこり麦の間から／茶っぽけた野良犬が頭を出

して／わたくしを見て／引っ込んでしまいました

この詩で「新人であるが巧妙」と評価されユーモアのある田辺だが以下の二作では悩める女子青年の姿も。

74号「憶出」（同）

指の太い／ひびの多い手を／あなたの前で隠そうと／いっしんにつとめた／あの頃（略）うしろ姿に泣いたわたしは嗤われ者となった（略）

76号「寂しい秋」（同）

（略）土に生活（くら）して永い星霜（としつき）／荒れきった肌に冷たく沁みる淡い淋しさ（略）崩れゆく角砂糖のようなわたしの命／こうしてわたしは知らぬ間に老いてゆくのでしょうか

84号「村を去りて」（鈴木美津子）

（略）ここへ来て／初めて麦をみた（略）自然の力のめぐみに／村はやっぱりいい所だ（略）いつまでも村で皆と共に／ああして／こうして居たかった

都市の郊外にでも働きに出たのだろうか。同い年の仲間を思う、「ああして／こうして」の表現がいかにも若い。

97号「空よ」（天野雪子）

毎日毎日ガラガラガラと／糸車の音のみきいている私は／ほんとうに何も知らないのだ／不景気なんて徒に叫んだって／どうすることも出来ない時代の相（すがた）だもの／ただ自然に生き努力に生きる私（略）だが空よ（略）やっぱりこの若き日を懐かしく思わずには居られません

118号「いばら」（三田武子）

優しいと思ってすがった／あなたのみて〔御手〕（略）されどそこにはいばらがありました／いばらは我が心を傷つけ友を刺し／遠く遠く去って行くのでした

119号「木蓮」（大谷チヨ）

庭の隅にただずむ木蓮／さみしく笑を浮かべて／春をうつつと送る／木蓮、たった一人／田から吹く風身にうけ／花びら散らせる／木蓮よ／来年早く笑おうよ

「幸福」（同）

ふと目をあくと／皆はよく寝入っている／思い思いの夢を／胸にいだきつつ／風は物凄い音を立てて／我が家の上を走っていく／ああ、そうだ昨日は屋根がえ／新しい屋根の上を／風がよく洗ってくれる／今の私、なんと幸福なのでしょう／両親は揃って我が子の為に・・・ありがたく胸にいだくだけでは／もったいない／働こう、働こう／力のあるかぎり

選者は優れた新人を女流の中に見出したことを「愉快」と書き大谷チヨの作品を「驚くべき」とほめている。素直に言いたいまゝを言い素朴の中に精神性があると評価。次の佐々野の「女」は「素朴な叫び」を採ったという。

「女」（佐々野こう・大沢村）

眼鏡をかけた洋服の紳士が通るよ／だけど！私は、ふり向いてはいけない／夫はシイタゲられた貧しい土百姓／ぼろぼろの衣服と／ひげだらけの顔をして／重荷を引いている／けれど、誰も見向きもしてくれない／やっぱり力を入れてやるのは、私きりだ／私がいなかったら彼は挫折してしまうだろう／後押をしてやるよ、何処までも／そうしたら彼は思い切り汗をかいて／まっしぐらに猛進する／女は！いたずらに男の尻にしがみついて／子を産むだけが務めではない

佐々野の現状把握と率直、大胆な表現に圧倒される。『武相の若草』全167号を通じても突出している。この力強さを、現実を生き

る力を、日常生活から学び取ったのだろう。「素朴な叫び」以上の挑む心情が感じ取れる。遠くない所に都会があり、チラチラと少なからぬ影響を受ける厳しさもありそうだ。都会の男を「平和な村の娘の心を心を乱す、知らぬ間に罪をなす人達」と表現したのは濃沼鶴子だった。（12号・二五年八月）

125号「惜別」（三枝ひで・新磯村）〈第一席〉

曇空／駅路は暗く—ふりかえり／ふりかえり見れば／桑畑すきて／蚕飼いの灯見ゆ／今宵　故里を出づる身—もどり／また戻り土橋に立てば／心に沁むる／稲穂の熟れ香

「惜別」のコメントは「特に優れている」。他の作品とともに女流の活躍を喜ぶとされた。都会への憧れや勉学のために故郷を離れる人ではない、悲しみをこらえた文字通りの惜別が伝わってくる。桑畑を透かして蚕を飼う家の灯りが見える風景も慣れ親しんだ稲穂の香りも心に刻む。働き続けた地を離れても、また働き続ける地が待っているのか、覚悟が滲むようにも読み取れる。

135号　短詩（山口幹子）

フィルム解く様な繭綿取り機の音は／ひそかな初秋の夜半を／団欒の伴奏である／久しぶりの高値にハンドルを廻す

父や母の明るい笑顔・・

この掲載は三五年一一月（135号）。繭は高値かと思いきや

安けれど蚕飼わねば食うめしに困ると言える父を淋しむ

（細谷初代・大野村）

が同じ号にある。細谷初代は同じ135号に「養蚕と私達」も寄稿している。春蚕—桑が高い割にできた繭はなさけない安値、力の限り働いた結晶が一貫目下等二円五〇銭、上等三円五〇銭、初秋蚕はほぼ良好、晩秋蚕は雨続きで不良。我等百姓は一家の糧を大部分蚕で生活している。つまらないと言いながらもまだやっていける、と家業と自分を励ましているようだ。この前号に

繭の値の高きをきけば母上は夏蚕休みしをつぶさにこぼしつ（岡本初野・千木良）

があって、世界経済を相手にする繭相場は目まぐるしく動き、農家も翻弄された様子がうかがえる。

141号　「口笛」（真澄）

女の口笛は悪魔を呼ぶ／叱られながらも／堪えきれぬ淋しさに／背戸に立って口笛を吹く／ひゅう—吹雪の闇に消えてゆく／はかない余韻／髪が真白に雪で埋まるまで（略）宇宙の悪魔よ、みんなよって来い／わたしはお前と踊りたい、

選者のコメントは、「いい作だがセンチメンタル。もっと強い女性として非常時に立ってください」というもの。（三六年五月）。

143号　短詩（中村みどり・有馬村）

春雨はやさしい魔術師／うら枯れていた私の花壇へ／一瞬の中に／うすみどりの若芽の模様を描いていった

選者は「感受力」があると評価。142号（三六年六月）には

はこべらに牛の呼吸の近づけり

があり、ここでは俳句の選者・小野蕪子を感嘆させている。「牛と草との句は多いが呼吸まで神経を突込んだのは珍しい」と「秀逸」。

玉汗の青き西瓜を流けり

労働による汗は宝石より光る、とこれも「秀逸」。中村には

かえり来し泥手そのまま花かごに清々し山の百合活けにけり

うつうつと物思い居れば去年別れし師の顔友の眼彷彿と見ゆ

もあり、ユニークな観察眼、のびやかな表現力を持つ。まだ歳は若い。最終号も近い161号には派兵の風景。

雪どけのあぜ道伝う兵ふたり

144号「誓」（小俣清美）

希望に輝く少女の日／清く明るく強い農村女性に生きなむと／誓ってとざした心のとびら／花模様の封筒が招く都の空へ／はらいのけはらいのけしがみついている自分を／嘲笑っている白い歯

154号の「若草抄」に「田舎の幸」（小俣紀代美・有馬村）がある。要約すると、

いそいそと都に憧れ走る幾多の乙女を若葉の陰からそっと見送った私―与えられた命、与えられた職業に感謝して生活しよう。

この紀代美と清美は同一人物か、紀代美は先に挙げた短編小説や短歌にも出てくる。何とか境遇を肯定しようと努める姿。

158号「よるのうた」（飯沢はるみ）

蚊遣火の流れる方へ／すねたわたしは移行する／今宵は冷たいちちの瞳よ／煙管の音よ―お嫁にいってもつまらない―いったいわたし自身の感情は？おとこの仕事とおんなの仕事とを完全に務め上げるのがわたしの道かしら／逆らわず母の愚痴をも聞いて居る／父とわたしとをふたつの中のサ〔リ〕トマス試験紙のような／母の立場をかみしめながら（略）それやこれや／一つ一つの指に折込み乍ら／わたしはヒステリックに穹へ投げる（略）分裂した乙女の心のわたしの思想よ／石のように重く軽く力無いわたしは／わたしの感情を不審しむ

選者は「飯沢さんは特にいい詩を持つ」としたが「川田君の字と似ていて気になった。一人二重投稿なら撤回されたい」とある。「川田君」とは常連の川田作治だろうか。この号にも第一席の「牧歌」

草刈つつ唄う若者の歌を聞けや／なりわいのゆとり有らねど言わず（略）健やけき四肢（略）そをめでて明日とは解らずも／召し出されいくさ人となるや（略）

があり選者はいつもとは違う曲調だがやはり上手い、との賛辞。この人が二重投稿する必要があるだろうか。全体に抑制された表現ながら「召し出されいくさ人となるや」には、徴兵の理不尽を厭う、厭戦の匂いが感じ取れる。この男子青年の偽らざる心情を時代の証言と受け止めたい。選者は応募作全体に対する感想として「時局に際して志気を高くする詩作がなく恋愛詩を多く見ることを武相の青年のために惜しむ」と書いている。選者の士気は上がっているようだ。

同じ三七年一〇月、158号の「女」からも、生きにくさがつたわってくる。

「女」（平野美津子）

力ある限り戦うと思って見た／意気地のある限り続けようとあせった／けれどもそれは可愛い少女の思いであった／現実はそれ以上の迫力で私等を拘束している／弱いようだけど女には女以上の力は無い（略）

161号「戦士に送る」（島崎直江）は「若草抄」への投稿。これは短歌で「秀逸」の評価をたびたび得ていた島崎ナヲエと同一人物と思われる。要約すると、南京は陥落し中華民国政府は北支に。新聞ラジオの戦況は連勝に次ぐ連勝、甲斐なき女子に生まれて恨めしく思う時さえある。南京入城から占領まで五日かかったのは支那兵も相当強いからでしょう。東洋平和の鍵を得てめでたく凱旋する日の早からん事を祈ります、とある。163号には

手の土を草にぬぐいて秋晴れの畑にうから〔親族〕と茶をくみかわす

がナヲエ名で掲載され、これも「秀逸」に選ばれている。

164号「ホームに立ちて」（小俣紀代美）

野中のホームに壮んだ勇士の顔／別れに励ます妻の涙が光って（略）

最終の167号（一九三八年七月）には小俣の

「はつなつのよる戦地の友を思う／同じ月光の下にねむるとおい日の

（略）胸ふるわせて思う／同じ月光の下にねむるとおい日の

摘草の友を／今は／はるけき戦野の友を―、

があり、男子青年の「大陸の暁に血潮を落として今故国に凱旋する英霊」を迎える詩も載る。その一方で、若き詩集を飾るごとく七度も色替りする紫陽花、ねたましい程の栗の花の香りを詠う詩が混在する。

「鴉（からす）」（小池喜代）

夕鴉よ何を嘆く／月もない星もない夜空／おののく生命の灯を見つめる／あわただしく／飛去りし小鳥の行方を思う、夕

小池喜代は、これまでの作品から戦地に夫を送り出していると推測される。更なる不穏な社会を予感しているかのようでもある。

（三）、主なる投稿者の生活と心の軌跡

1号から読み進むうちに、多数の投稿作品や意見が掲載された人物の中で家族や仕事の状況が見えてくる人たちがいることに気付いた。個別に取り上げて生活と心の動きから社会状況までを見ていきたい。要約する場合、原文の単語を活かすことを心がける。

古正しま子（中郡・国府村）

9号（二五年五月）の短歌が初登場か、

ほのぼのと霧のはれゆく杉の木に陽のこもりいて静かなる朝

（古正しま子・中郡）が「秀逸」に採られる。俳句に

霜柱日に日に崖のくづれけり

が古正しま、で載る。

心よき鎌の切れ味さくさくと一人小牛の草かるあした

ひそやかに浴みしあれば小庭辺の葉蘭のもとにこおろぎの鳴く

唐黍のぎぎの音して秋のかぜ〔ぎぎ＝ひしめく音〕

つまずきし石の硬さや霰ふる

雪どけや蕗味噌をやく百姓家

19号の「談話室」に、処女会国府村虫窪支部では修養機関の一つとして回覧文庫を設け、第一番に創刊以来の若草を回覧、各会員二日ずつとし、我が会の文芸熱も日々向上、と投書している。

26号「談話室」に、二六年晩春から「遠き異境で友もなく皆さまの御作に接するのが楽しみ」と投書。28号の「談話室」には麻布区一本松北田方からの投書で、都会の圧迫に忘れかけた故郷、弁当籠を背負って父母の畑に運んだことを思い出した。他郷にあっても投稿は止められない、と書いている。

29号の論壇に「武相の処女会員諸姉に」が載る。所在地は右記と同様、東京になっている。「武相の地に住む諸姉に俳句（短、詩、小）を詠むことをおすすめしたい」と始まり、お花の稽古は女性らしい趣味だが嫁入り道具の飾りでしかない。武相幾千の処女の中九九はこの地に止まり生花のタイムは無いでしょう。詠む趣味なら子を背負ってもできる、ノートを懐に鎌を握って心地よい土の感触そのままに詠い行く郷土詩人とならんことを。

31号論壇「結婚準備時代にある女性として」はまた中郡からの投稿。生花、料理、裁縫以外に文芸、音楽にも興味を持ちたい。

衛生、育児、法律も知っておきたい。貞操、戸籍の法規くらいは知っておくべきだろう。

39号論壇「努力と慰安」がある。養蚕家が一月間ろくに寝ないで働くのも眠るたびに太り、黄金と替る楽しみがあるから。若草投稿者が努力するのも一編でも誌上に載れば大きな慰安を得られるから。県下青年処女たちはこの若草によってどれだけ慰安を得ているか、慰安の源泉たる若草を発展させましょう。

川べりの蕗のほほけて春深し
麦飯にとろろ親しき山家かな
懐にカードしのばす夜学かな

は自身のことだろうか。しま、しま子の使い分けがはっきりある訳でもない。誤植の可能性も。

ぬくみ持つ雨後の日射しこの甘藷床の芽生はしるし葉は輝きて
藁の屑あまた流れて陽に光る出水果てたる相模川はら
蚊帳たたむ吊り手の金輪相ふれて音の親しき初夏の朝
若妻の手はやや荒れて春寒き車井汲めるをあわれとおもう

は「秀逸」（33号）。40号の

わが庭の芙蓉の蕾ほのぼのと色づく見れば秋は近しも

も「秀逸」に選ばれ、選者は「歌は人格表現である。温雅愛すべし」と賛辞を贈った。41号には三首の「秀逸」が載る。

馬草刈りて戻る下僕の股引に草の実あまたぬれつきにける
やに強きあく葉は土間にねせてあり今宵一夜を涼しさに居る
寝せてある煙草（あく）葉の中にちろちろとこおろぎ鳴きぬ
午後の日盛り

も「女性らしいつつましさ優しさがありながら、対象をしっかり掴んでいる」と最上級の評価を得た。

隣り家で蜜柑の皮を焚く煙庭畑こえてここに匂いぬ

が44号にあるが掲載はこの頃までのようだ。

下僕がいて煙草栽培もする、裕福な農家の娘だろうか。父母を助け、子牛の餌は自分で刈る。論壇の意見も実用的。回覧文庫を推奨している地域での指導的人物のようだ。東京麻布の期間は何をしていたのか、学業か行儀見習などとも考えられる。短歌、俳句とも作風は知的でゆったり、観察は細やかで、のびやかだ。

伊藤雅夜子（横浜市・城郷村）

24号　詩「あの人」

春の日の夕暮れ／あの人は四つ葉のくろーばーを探していた

二行の短詩だが、選者は女流に二～三いい人を発見したがまだ素質だけ、消えないで大成してもらいたく思うとコメント。

28号の「談話室」の投書に、異郷で学ぶ子に何時になったら故郷に秋をしみじみ感じる時がくるのか、とあり、所在地は神田になっている。30号の「談話室」にやはり神田で、『凡』を発行します、神奈川の皆様のご援助をお願いします、とある。

33号、小品「雪の思い出」

温室の屋根に積もった雪に長いトンネルを作った弟が、この中に王子様とお姫様がいるという。七年前の幼かった日、故郷の家の温室はまだあるだろうか。

34号、詩「大根」

ザクザクと気持ちよく大根をきる／畠からほってきたばかりのこの大根／晩鐘を聞きながら夕餐の大根をきる

35号、感想「晩春」

菜種畑のふっくらした実、黄の花もところどころに残っている。薄命な母を裏切って去った父はT市で暮らし、私に会いたいと言

ったそうだ。妻子を捨てた薄情な父！むやみに青草をむしり草笛を吹いた。

36号、感想「出棺を待つ間」

自殺した友人の葬儀、若い娘なら失恋に決まっていると噂する声が聞こえる。人生の不可解を嘆き不自由な自己の生活を呪っていた彼女を、私は知っている。

この所在地は武蔵野となっている。以後は武蔵野らしい。

37号、小説「別離」

たった一人の妹かと尋ねて来た新進作家の青年。同姓同名はいくらでもある、しかし本当に兄だったらと心に叫ぶ。

39号、随筆「車内雑感」

有隣堂で買った原稿用紙と婦人世界を膝に電車に乗っていると、前に支那服の女と少女、日本の着物の男がいる。目黒へ着いたら、と少女が話す。なぜか男の目に涙を見た。私は白楽で降りた。

40号、詩「労働者の家」

今日も朝から雨が降っている／幽かな吐息をする夫／黙って考えている妻（略）父母の顔を見比べる愛児／憂鬱な雨の日

41号、随筆「晩秋断片」

不用意に机の中に置いた日記を姉に読まれた。人の世の苦しみ、乙女の悲哀、不可解な自分の心理などを書き並べた若き日の記録。そのあとは真白なページのまま。書く気になる日が来るだろうか。

42号、小品「或る少女の日記」

川和の菊を見に行くこともできない貧しい自分。目白の女子大を受けると言っていた幼友達はどうなっただろう。野道を歩いていると五歳くらいの女の子がぴょこんとお辞儀をした。先生とでもおもったのか。月がいいので外を歩いたら熱が出た。もうすぐ兄と従兄が除隊になる。

45号、小品「途上にて」

友人を訪ねたが留守だった。その帰路、東京府の国分から原町田、八王子線で小机とくる途中、一里近く歩いて嫁いだ娘の四十九日のために来たというお婆さんが話しかけてきた。十歳と四歳の孫が可哀そうと涙をながす。世間知らずの私は知らない人から親しく話かけられたことはなかった。もう二度と会うことはないだろうこの老母の幸福をそっと祈った。

この「途上にて」は小品の第一番に掲載された。49号に選者による「小説短評」があり、伊藤の小説「幸を祈りて」の評価が出た。曰く「兄のために恋人を譲って酒に走る弟の苦悩が恐ろしい情熱で書いてある。女性には珍しい達筆だ」とあるが掲載は無い。

52号、小説「青春よさらば」

失恋した紗智子。相手の男は複数の女と交際、モダンタイプで元金持ちの妾だったという年上の美女と結婚してしまった。何でも要求に応えてくれた男に（男って随分甘いものだな）と思ったこともあった、複数の男に囲まれて女王のようにふるまうのも面白いだろうと思ったこともあった。いま、三人の候補者がいる。有力者の息子で会社勤め、遠縁の次男、同じ村の真面目な若い農夫。父母の驚きを尻目に、一生土に親しんでいく農夫の純な心が頼もしく思われた。

この作品には選者・加藤武雄の評「繊細な心の動きの中に、何ものにも動かされまいとする強気、よい意味での現代女性のひらめきを見る」が載る。この後の「談話室」に伊藤の投書がある。

私達のグループから文芸雑誌光露が生まれた。ある事情のため、二年余り育ててくれた若草の文壇を去ることになった。初期の所在地は城郷村だったが、武蔵野の一隅から皆さまの御幸福を祈ります、とあった。署名は伊藤雅子。雅夜子は筆名だったのか。

神園房江（高座郡）

神園房江の登場は三一年一月号だろう。

77号「兄上に答う」

（略）身近の光明に思うさま身を浸らして／いつまでもいつまでも遊んで居たい／今の私の心持です

80号「雪」

雪が降る／雪が降る（略）木は時ならぬ花を身につけて飾る（略）独りぬくもれる部屋に座して／銀世界を見凝むる私の幸福さ！あたたかさ

82号「ひがみごころ」

（略）何で不足を言うところがあるんだろう／けれど、けれど／私の兄さんは腹が違うんだ／まあ・・私の胸の中のしぶといひがみ（略）

84号「馬に呼びかける」

（略）私の嗅覚へ／汗を溶かし込んだ厭な臭いのかぜがポカッとぶつかる（略）働く者の肌には汗が湧く／働かざる者の肌には汗は滲まない／馬よ！共々に汗を流して歩もうじゃないの

この84号に「文芸陣」神園雪夫編集、愈々発刊、とあり投稿規定などが載っている。所在地は「高座郡麻溝村二三六六　神園雪夫」とあった。その年末一二月号に「おわかれのことば」があり、筆者は神園雪夫。論文、小説、歌、詩と関わってきたが、私は哀れにも何も大成せず本誌を退く、「置き土産として房江を残していきたい、妹だ。黒いものを青く見る眼を持っている。詩人として途方もない異端者だが、諸君の腕に託して」安心して前に進みたい、とあった。

85号「水盤は空であれ」

（略）紫陽花が／おどろく程ふくらんで／もう独特の青さです（略）私は鋏を持って／庭におりたのですが／これ等の美しい色彩を／大地から断ち切ることが出来なかった

88号「黒枠の訃報」

職業を楽しんでいた道代さんが／結核第三期の病躯を抱えて／淋しく帰郷してから／まだ一月もたたぬうちのこの訃報です（略）思わぬではなかったけれど／思わぬではなかったけれど

89号「おそれる」

（略）筆を持つ人は／筆の動きにおそれる／詩でも、うたでも／みんな、自分のおもうこと以外に／筆が外れて行って仕舞うのは／何うした事なんだろう？／嘘吐（うそつき）のそしりも／甘んじて受けよう／私には舌が幾枚あっても／どうせ、たりないんだから・・。

ここで選者は「歳若いひとらしく懐疑の第一歩を表現している。ここから人生が複雑になってゆく」と書いている。

91号「妖気」

大きな電球に取り換えると／机のしたの暗闇は猶更に濃くなってくる／迫りくる淋しさは／私の眼を／決して書籍の上に走らしめない（略）心は星のように小さく固まってしまう（略）

93号「春にそむくもの」

略）いとも冷たきこの身、この心／いっそ投げやらむ／水に沈まむ／山に丘に／春の芽は吹く／わが心のみ／なにゆえに／斯くは冷たき

94号「春」

（略）高鼾のお花見男／一匹の野良犬が花を嗅ぎながら近寄

った（略）空では月が酔っての上か／いっさんに雲を追いかけている

95号「悲しき努力」

手の縄は細いけれども／えんえんと目的のものにつながってる？／ひき寄せてみる／たぐりよせてみる／けれども、目的のものは動かない／縄が延びるのか／力が弱いのか（略）

96号「海よ、七月よ」

わが恋人は／海原よ！／漆黒の水着着て／身を砂原に横たえて（略）海よ、その輝きもて／わがうつし身を浸して

この間に毎号のように短歌が掲載され、所在地は東京府。

主人待つ夜は更けゆきてわれの身の畳に描く影のさびしさ

久々に君来ませる門に迎え心おのずと躍るなりけり

兄上に手紙を書かではや三月未だに我は筆をとらざり

茄子苗を兄植えませりこの夏は共に食わんと笑み給いつつ

今は亡き父食みませるこの茶碗欠きたるのちのいともさびしき、

じとじとと汗しもければ堪えられず障子あけけりほこり舞う日を

賑やかな街に出て来ていとさびしこの人々を一人知るなし

後の二首は「秀逸」に選ばれている。兄・雪夫は論壇で農村振興について書き、28号には「小品短評」も書いている。文芸に生きる人であるらしく、妹の才能も認めている。房江は「労働の汗」を詠ってはいるが労働そのものは匂ってこない。東京からの投稿であるのはなぜか。「主人待つ」からは奉公か家事見習かとも想像される。農村女子としては自由闊達に育ち、文芸を続けたい気持ちも伝わってくる。投稿期間は長くはない。

原　鶴子（川崎）

81号（三一年五月）に珍しい一首を見つけた。

どれどれと卒業証書とり上げて灯にかざす父はいたく老いたり

父の喜びと安堵、娘の感謝の気持ちが伝わってくる。この後、原鶴子の品は、短歌、随筆、詩など多数。

阿夫利山峯を紫紺に染めて今没する夕陽まことおごそかなるも

むんむんとする暑さだんだら畑のトマトの色は鮮やかに紅し

野良着ぬぎうからあつまり縁側にすする今宵の茶がうまくあり

出産を知らせお〔よ〕こせる文読みてその和子みたしとわがかきにけり

寒原の電柱の赤いコールタールよく乾きたり夕陽に光る

後の一首は初めての秀逸。「この粗いタッチがよい」との評価。赤いコールタールとは、夕陽に照らされて赤く反射している情景だろうか。

92号　詩「生きるもの」

（略）弟が生まれました／恐ろしい予感が頭に去来します／生きるもの　たう〔お〕れるものの地し〔ひ〕びき／私は生きる有難さとむずかしさにおびえる

93号　詩「旅にありて」

二十二の鶴子の旅立ち／其の日梅とささやいたの／都のあくたにそまらぬように・・強く生きること／今銀座のとある茶店に佇んで（略）

94号　詩「故郷中丸子と四月五日」

ふるさとの駅におりたった私に／にっこり桃が手をさしの

べました／父が・・母は・・妹の背の坊やは片言を言うようになりました／私の懐に末妹がすがってます（略）ふるさとよ、明日はまたさよならをします／今夜は私をしっかりと抱きかかえてください

この号には短歌もあり所在地は京橋区、東京だ。卒業証書をもらってから一年、二二歳の旅立ちとすれば、相当な期間育を受けた人ということになりそうだ。

96号　詩「病む日」

伝馬船がつながれた築地の川岸です／母はあらわに乳を出し帆をまいています／肌は潮風に堪えて健康そうです（略）病んではじめて知る都会の静けさです

99号　詩「無花果畑」

此処の無花果畑より見える／私の家と一本杉（略）触れては去った人達の末を想う／まどかな少女の日を想う／ゆき迷ういのまのわたしを淋しませる（略）今日も人を恋うている朝蝉のこえしきりなる校庭にラジオ体操している我等

朝蝉の一首は女子青年幹部講習会で詠んだ歌。次の三首は川崎からの投稿でいずれも「秀逸」。

大いなる山を背にする叔母が家昼なおくらく土間に虫鳴く

文字書くと紙とりかえつかくたびに心の荒さ筆にあらわる

久々におとないし祖母を招じつつまず明るくと障子あけたり

祖母の一首と同じ101号に

「晩秋の多摩川」がある。

淋しき日には河原におりきて水ぎわにあそぶ／穂すすきのはろはろきらめき（略）はたらきて夜ふけ戻れる寄宿舎の冷たき火鉢さわりみるかも

104号「流転」

（略）流転の歩み記録を唯か｛誰か｝知らん／今の吾は旧師の家に子と遊べる／海めんの如くの感情はふるればあふれ

選者は言葉が「大仰に過ぎ素直さが失われた」と批評した。

明けなずむ空色深しまむかえる煙突のけむりしろじろとあがる

110号「人生の広野に立つ―わが若き日のために―」

がある。記事は論壇のような位置付けらしい。かなり硬い文章で、心は動もすれば懐疑的、感傷的、憂鬱にもなるが、光に面して希望を尋ねて悩むのは張り合いがある。人を信じ、人に信じられ、社会を愛し、社会に愛され―私の一筋の道がある。二三歳の秋、友人の中には子供の養育に専念する人もある。山地の同好の友は聡明で感受性が強かったが狂ったという。栗が出るころは淋しい。

111号　詩「みつづける夢」

私にこの先どんな生き方が開け様と／私は決してなげくまい／（略）芽は黄色の花とあの艶々しい実を結ぶことを夢みます／飛躍しよう！よし間違ってい様とも／後に悔が来様とも（出郷をひかえて）。

112号「深秋の多摩川畔より」があり、昨年家事見習いの目的で生家を出て、銀座の某ビルのオフィスガールに一先ず落ち着いた。叔母の指図で三階の四畳半を寝室と決められ、そこで郷愁に悩まされた。かのインテリ農民でも田吾作奴と一つかみにされてしまう。この田舎を文化の中心にできないものか。

116号「帰省に寄す」

河原で遊んだ多摩川、村に鉄道が敷かれ駅付近には家がどんどん建つ。故郷よ昔のままであれという気もする。隣家の里子は二つ下の美少女、産みの母はありながら知り得ぬ旗本の末裔とか。

苦悩も多かったのか美少女は狂ったという。

118号「随想　相模野の風景」

ここ横浜は異国情緒あふれるが麦もげんげも見当たらない。数年来の友の住む相模野を見たいと訪ね、田名から麻溝へ。高座は若草の詩人を多く輩出している。小川にかかる水車は「ねり場」だという。十歳に満たない頃の、祖母が与える桑を貪る蚕の音が耳の底に残っている。

126号「春・二題」

「梅」は横浜で、領事館への用事の際に通った坂道の白梅と老コック宗さんのこと。「磧」は多摩川原、夕暮れの磧〔かわら〕を歩む。ガス橋の中丸子から下丸子へ、林立する白洋舎、北震電気。

大いなるみ手に懐かれ眠らまし白梅の咲く生い立ちし家
たまたまは百貨店にさそい着物欲るちかしき伯父には幼くおりし

この二首は141号。妹二人の下に弟もいる。生い立ちの家も十分立派であるらしい。川崎、東京築地、寄宿舎、旧師の家と変化は大きい。学業、家事見習い、家庭教師。伯父に甘えることも出来る余裕ある一族か。投稿はこの辺りまでのようだ。

大沢貞子（有馬村）

三二年一月（89号）の短歌に

秋の夕ぐれだ竹藪のかげにとんぼが群れとんでいる

があり、これが大沢の最初の入選作と思われる。以後133号まで主に福田正夫選の詩欄で数多くの「第一席」を取り大活躍する。

短歌は素朴な情景表現から始まった。

かすかな竹のきしり！毛糸編みながら落葉にゆるぐ影を見ている
今日も亦平凡な事をして暮らした変わらぬ事を日記に書いてる
安い繭でも手がけなければと母と話しながら桑をくれたのが十一時

などが採録されているが、この年の一〇月（98号）以降、次第に短歌らしくなってくる。

働く事の喜びいつになく美味い夕飯の味をおぼえた
虫の音のはたと鳴き止みほのかなる煙草の香り人の気配す
何かしら心躍る朝なりこて〔鏝〕などかけて髪上げにけり
夕なごみ畦にし立てば糊づけし浴衣に風の肌ざわりかな

「浴衣」の一首に至って「秀逸」に選ばれた。

着おろしの絣のにおいしたしもよこの朝われ髪上げにつつ

からは女子青年の生活の喜びが伝わってくる。髪を結う情景が浮かび、自意識の強い人物が想像される。次に大沢の本命である詩を辿ってみる。

91号の詩、「残る者」が掲載の最初らしい。

（略）みんな村を去って行くんだ／ごみだらけになって働く農村をいやだといって／残る私達！馬鹿じゃないか？／手の指がふしくれだっている／ほんとに村に―残って働く者が馬鹿なんだろうか（略）。

これに対する選者の評価は「女の人としてはわりあいにはっきりした意思を持っている人らしい。それを失わずに育てていって欲しい」というもの。

92号「母に寄す」

（略）父に別れ亦日ならずして愛し児を奪われて／女の身の悲嘆のふちに泣き暮れる時／尚残る二児（略）ほのかな明るさを二人の子の成長にかけてひたむきの二十一星霜／母よ

母性の強さと作者の感謝の気持ちが素直に現われている、との選者評。

崩れかけた雲の間から射る／ゆるんできた陽光に春はそこはか運ばれて来た／春だよ！(略)両手は若い憧憬を抱いて大きい希望をしっかりつかもうと焦る／昨日の憂鬱を拂って／心は緑の深さに伸びるんだ（略）

94号「解決」

（略）ゴツゴツした桜の木の肌に刻まれたこの文字は／「汝悩める者死んでしまえ」—と。（略）ああ死ねば一切が解決するか？（略）誰かが秘めたこの文字を偶然に探し出した／私だ

選者に春の感激が上手に表現されたと評価された次号に、死の影をちらつかせる、大沢貞子は複雑な心境の持ち主らしい。

95号「女子青年団向上と母親の理解」は論壇の位置付けか。あらまし以下のようになる。

女子青年会の活動には家庭、特に母親との交渉が多く、母親の無理解が円滑な活動を妨げている例がある。この解決のために農閑期に母親と会員の懇談会を開いてはどうだろうか、と現実をふまえた提案をしている。母子家庭を維持して働く母に気持ちを寄せながら、母世代の近代化を願っている。同じ号に詩

「蜘蛛の行動」がある。

かまどの火は赤々と燃えて居る／その薪の先に小さい蜘蛛が一匹かじり付いて居たが(略)もがききって中へおちてしまった（略）

選者は、説明的な描写が目に付く、「事実が人を動かすのではないから考えてもらいたい」と注意を促した。しかしながら、この事実に重ねて語りたかったのは若者の日々の生きにくさ、危うさであろう。遠き日の大沢貞子はこの評価に反発したに違いない。

97号「暗を見詰めるものへ」

（略）思い切って明るみへ飛んだらどうだ／心の瞳を開いて方向転換するんだ／そこから孤独という淋しさは逃げて行くだろう／そうして耳を傾けてごらん／きっと誰か貴方の心の扉をたたいて居るから（略）

98号「運命」〈第一席〉

細かく刻まれた桑の中から大きい青虫がころがり出してきた／彼は恐ろしい断頭台にのせられて奇跡的に助かってきたのだ（略）運命——人の身の上であれ、小さき虫の命であれ／降りかかる運命の雨の下に居る事に変りはない／強きもののみこの断末から驚異的に救われていく

99号「遠い道」

ちらっと覗いた明かりを目当てに／夢中になって歩き出した私である／遠い道　時には濃霧にこめられて只ぼんやり／時には身動きも出来ない恐ろしい棘のある道(略)私の明日は、あの遠い道の向うにあるんだ／行かなければ—自己に励まされては立ち上がり／明かりを目当てに、遠い道を／敢然と歩く私なんだ。

100号「朝」

朝餉の仕度は妹に委せて／裾をあげて素跣足で風呂を汲む気安さ（略）味噌汁のにおいがしきりにする／ああこれで沢山だ／すっかり今日の活動力が盛り上がってしまった／青空がある／胸を張り深呼吸して／初秋の大気は素晴らしく透明だった。

この作品に選者は「胸に手をあてて祈り感謝する修道女より、もっと健康で、もっとつつましく現実を肯定している作者の朗らかさが現わされている」と高評価。

101号「足跡」
人の生きる事は死までの道程へ刻む足跡である／雨上りの道へ思いきりふみ込んだその足跡が私には恐ろしい／あまりに空白な過去へぐっと迫る痛さがある(略)沈黙の現在でも冬眠の土中へ春の予言が聞えないとは言えない

102号「いためる心」
我が季節的病の！(略)このころの萎えし心／いろいろに過去をながめ／行く方の戦慄や／そを思いて／恋などは只煩わしと／言いては見しも／去ると思えば／あまりに人も恋うる(略)

104号「都生活」
(略)都へ来て幾日？／美しい星の夜空を眺める事を忘れていた／いましみじみと悟のだ／詩は土のものであり／土の命は全て詩の存在である—と

105号「春のささやき」
(略)そっと触れる春のささやき／少年は頬をそめ／朗らかなマーチを口笛にして答えた／汚れなき希望を躍らせて—少女は胸に手を当て／情熱のときめきを守りながらつつましく微笑をかえした(略)冬眠、憂鬱を清算して／このころ芽生えた吟情に向って私も勇敢に春の風に流れよう

これと同じ号に「人生を眺めて」がある。70号前後で立ち消えた、小品や感想などの応募作に当たる分量のエッセイで、自身の心の一部を語っている。要約すると、

五歳の春に父を失ったが若い母の献身的な愛に育まれ、父の無いことも深く淋しいと思わなかった。小学校時代は比較的朗らかに過ごし、美しい憧憬と数多い望を自分のものとして胸に育ててきた。しかしそれはあまりに現実に遠いものだった。巣立ち行く私は憧憬も望も全て滅茶滅茶にかき回してしまい母の期待に叛いていく。それでも明日の光明を願ってくれる。この愛に泣きながらも人々の反感の矢面に立っている。やがてこの私に老いの日が来れば、若き時代は何とうつるのだろう、とあり自意識の強い大沢ならではの、周囲との軋轢がありそうだ。

106号「私の姿」
(略)人生に対する自分の意思をくじかれる事の恐ろしさに／只まっしぐら、殆んど見詰めたままの一本道を夢中で辿って来たのだ(略)貧弱すぎる私でしかない／真実に生きるため、あらゆる苦悩と戦い抜いた私だったが・・。人々の懐疑の眼の中にさらされている(略)

110号「自画像」〈第一席〉
(略)おのがすがたを／時に黄色い眼鏡でのぞき見／時に真赤いレンズを通してうつし見る(略)今日も昨日も／おさえ得ぬ情熱を抱いて(略)明日に描く自画像の完成に／つぎ次にくる苦難の全てと戦おう・・。

112号「波紋」〈第一席〉
山の神秘を守りつつ／清澄な水をたたえて／樹かげをうつす湖の静寂が／永久にあるとは誰が言った？／文明は安閑を許さない／科学は神秘をさらって行くかも知れない？(略)人間は時に／みずからたたき付けた動揺に／心外の波紋を恐ろしく見ねばならぬ(略)

113号「よのなか」〈第二席〉
笑う私は嘘であり／泣く私だって真ではない／私自身に解らない／泣き笑い！(略)運命の支配を宿命的だとしたら／泣き笑いの世の中が解りそうなものだ

114号に「美しきつどい　私共の同窓会」があり筆者は大沢。「昭

和九年新春七日第一回同窓会」、「十星霜」を経て初めての会の様子を報告している。「大正十三年度尋常科卒業」とあるから大正元～二年あたりに生を受けた人らしい。

116号　「山へ呼ぶ」〈第一席〉

山は(略)浅薄な雑念に狂う人類のおろかさを嘲笑しているのだ／たえず／その理性の眼に威嚇されつづけて来た／山のどこかに、心底をあばく鋭さをかくして居る／だからこそ、戦慄の裏に支えられたい憧憬が燃えるのだ(略)

117号　「次に来るもの」

(略)自殺が罪悪として許されぬ結論なら／その苦悩の中から一条拾った通路が／生へ、生へと現実の飛躍をする／次に来るものが、何だと思う、光――。

120号　「露の音」〈第一席　二題〉

孟宗の竹林と、打ちつづく桑畑／しっとり、明け放たれた大地―のびる若竹の肌をはしる水滴(略)耳をすませば、この朝のしじまに／黒土にしみる露のひびきがある／かそかに、絶間なくだが静寂を乱そうともしない

「貞子」

ポカツ―と、砕かれるその一瞬間の何んと徹底した音／ああ私は亦三和土の上へ茶椀をたたきつけた／母と、妹と、みんなが―、『亦嵐襲来?』と、言いたい顔で黙って／見ている、立って居るはかない癖で、それで居て捨て難いくせ／誰にも、やり場に困る鬱憤を／破壊の刹那の徹底さにまぎらせては／そして、丹念に一片づつ拾い寄せ乍／すっかり晴れる程の小さい心を抱きしめて／いとおしみつつ生きる子よ

121号　「田植寸景」〈第二席〉

(略)幼子がむずかっては／泥まみれの母親に乳房をふくまされて／もう微笑んで居る(略)ガッチリともり上がった双肩の筋肉と／練〔捩?〕鉢巻で苗をさす頭の中に／糸価の低落！そんな事が宿ってるだろうか?／内閣の総辞職を、デカデカと新聞が報道している日でも―／一日の生活が田園で明けて、田園でくれる

選者は、具体性をつかんでいるがまだ無駄が多く、詩形が整えられていない、絞り込めと注文している。次の

「雨の日のことども」は小品か感想のような分量の作品。

日照りを懸念されていたが土用でも羽織着る長雨。続落の糸価を嘆息する人の前で皮肉にも桑が勢いよく育つ。十人も産み育てた叔母が死の床にあり子等が泣いてすがっても、たった一人で死んでゆく、一人、一人・・。みんなの後ろでみんなとかけはなれた事を、心を歯にしてガリガリかみ砕いた。

123号　「秋の一隅」

貧血の女が書く真昼の感傷賦／それが原稿紙の桝目の上でいよいよほそってゆく(略)季節に無感覚な勇者になり済ます、私(略)思い切れぬ女よ／お前だけ、この秋の一隅で思う存分に痩せて行くがよい

選者は「大沢さんは内面的な思索がすぐれていても、リズムをもう少し正しく」と注文している。

124号の短詩一二篇の中に大沢作品があった。

止まってなんか居られない／ボウフラがわくのがおそろしい／生活への欲求も只それだけ

126号　「初冬」〈第一席〉

自然のいとなみをかけめぐる片隅の感情／うらぶれて、残骸を白日にさらす病葉よ！そは廃朽の巷を彷う死相か／想念にふれ心を射し通す悲哀の堆積！このどん底にまだ消えき

らぬ風が／すべる、鳴る、虚勢をはる（略）

選者は「ここに内面的な把握を見る」と評価。この号全体に対して粒がそろったと書く。

129号「生きる事の根底に喘ぐ」は一ページ分。学業を終えて二～三年、有意義な生き方という言葉が実生活にあてはまっているか判断できないでいる。花にも心を想像し水の声も聴こうと深くほりさげた心の生活をしたい、生ぬるい生活には耐えられない。「胸にはもっと一杯に生活への情熱を抱きしめながら文才に恵まれぬ故に伝えきれないさみしさ―」

130号に「武相の若草誌友の横顔」が覆面子の署名で載っている。五月五日〈一九三五年〉高座郡上溝町青年団主催の短歌大会に出席した誌友の印象を男子団員が書いたもので、五人中女子は一人。「大沢貞子君（有馬村）貞淑な現代女性？です。なかなか能弁家（良い意味での）です。私なぞ小指の先にも及びません」とあり、作品以外でも目立つ存在であるらしい。

132号「時代」〈第一席〉

油にどすんだ図体をさらして河原にわめく機械船／時代の深刻の様に地底深く食い込む廻転、鋼鉄の軌（略）時代が暴露する侵略？狂人は魂をとばしてしまい／地べたに伏して星座が崩れたと笑っている／私は―ばさばさにちぎれちぎれの思想の縄ないよせつつ／だが、矛盾に抗する果敢も無い／かすかに、生命を呼ぶらしい声・・・。

133号（三五年九月）の「誌友会」の欄に大沢貞子の投書が「さみしい一言」とタイトルを付けられて載る。詩想が枯れたわけではないが「どうにもならない心境のために」とても詩作に陶酔する気持ちを支えきれないためペンを一切捨てる、と書いている。「若草は絶対的な友達です。何等かの形で更生し、生活の全面をぶちまけて語りましょう」、ここで大沢貞子の投稿は途切れた。

「談話室」の交流情報によれば同じ有馬村の大沢須美子は貞子の妹であるらしい。双方に姉妹の情景を詠んだうたもあるので取り上げてみる。貞子の

生業に疲れて戻れど妹のかしぎし夕餉はめば嬉しも

フレームの花咲きたりと書添えて都に居ます姉に便りす

（大沢須美子・有馬村）

今日も亦たより来ぬものと知りながら勤めくちまつ職なき吾は（同）

職を得て、次の一首のように「都居に」なるのか。

都居にまだ浅ければこの夕べ月を仰ぎてふる里を偲ぶ（同）

がある。貞子にも「都生活」という詩があった。128号に須美子の「姉と別れて」があるなど、暮らしは変化。須美子は、祖父と時代に疎い母では話し相手にならない、淋しいと書いている。

岡本初野（津久井郡・千木良村）

96号（三二年八月）から登場する岡本初野。大沢、神園、原と重なり、競うように掲載される時期もある。

只一人山で茶を摘む我が耳に細谷川のせせらぎの音

新しき着物なれどもはですぎて手をとおしかねる運動会の朝

やわらかき土ふむ春の朝なり幼な心になりてわがいる

「やわらかき」の一首は「秀逸」に選ばれた。

しだれ咲く白藤の花に幼子がとびつこうとする初夏の朝

ようように給桑終えて妹の入れてくれたるお茶のうまさよ

夕方の掃除終りし縁側にねころびて書読む心すがしさ

張り替えし障子にあたる蠅の音師走の部屋に衣縫い居れば

七草のせり摘み居れば晴れし空を音さやかにも飛行機の行く

よもぎの香かすかに残る指先にペンを握りて今宵文書く
あぶなげに歩みそめたる幼子のま赤き靴をいとしとおもう
何がなし朗らかな朝なり鶯のおぼつかぬ声に妹を呼ぶ

妹があり、その下に幼い妹もいる、養蚕農家の長女であるらしい。歌風は穏やかで、心の内を吐露するふうではない。両親も寛容で、書を読むことも投稿も許されていている。

106号に詩「妹よ」がある。

自分が卒業して間もないと思ったら／もう妹が三年まえの自分と同じ道に立った／妹よ、私の様に夢のような道に迷い込むなよ・・（略）

107号「私の生活」

谷と谷との間に咲く山桜／これが私の生活／世の中の何をも知らず／小鳥を友として自由にのびてゆく／競走するものもなければ／じゃまをするものもない／唯恵の光を受けて咲き／春風の吹くままに散ってゆく山桜／人々は「淋しいだろう」と言うかもしれない／だが私はこれでいいのだ／此処に生まれて、この自然に育まれてゆく／これが私のあたえられた生活なのだ

111号「芝にねて」

静かな秋の夕暮（略）かわりゆく空を見つめていた私の心に／一羽の渡り鳥が翳（かげ）を落として行きました／背筋に流れこんだ孤独の淋しさに／耐えられなくなって（略）

113号「冬の来る朝に」

どうして此所へ来たのか／一匹のきりぎりす／床をたたむと畳の上を歩いている（略）お前は霜を恐れて救いを求めに此所へきたのか／お前が生きようとすればするほどお前を苦しめるものがつきまとって来るのだ（大雪の来る前に）早く友のねむれる枯草の下に静かにねむれよ

120号「女性よ強く正しくあれ」は論壇の位置付けか。要約すると、日々の新聞を見ると女性の心の弱さを知らされる。責めることはできないが正義の道を拓くには忍耐と努力が必要です。優しさは失わず女らしい中に強い心の光った女性でありたい。農村女性は確かに強い、手を取り合って強く正しく進もう。

同じ号に詩「朝の一時」がある。

（略）温泉から流れてくるラジオ／兵隊さんの音楽だ／「貞ちゃん」ぐみをもいでいる妹を呼ぶ／兵隊さんの音楽に合わせて二人で唄っている朝のトマト畑／蚕のねむっている朝の安らかな一時です

122号「故郷を捨てる者」も論壇の位置付けか。

こんな田舎に居られないという人がある。出て行きたい者は何処へでもいくがよい、「そんな人が田舎に居たって邪魔だから」と冗談のように私は言った。田舎に不満を持つ人は農村を暗くするばかりだ。故郷を捨てる人は何処へ行っても満足できない、だが戻った時は迎えてやろう。

124号「人生」

四人は同じ校門を出た／一人は白衣に身をまといて病む人のために送る若き日／一人はすでに若き母となろうとしている／一人は都に出でて華やかな生活—が、束の間に胸を病んで／今は地下に眠る／私は山に、平凡な—だが何の苦もなく生きている

当時の女子青年のありようを映して印象深い。次の125号に載った短歌に

百姓の娘らしきを喜びつ黒土ふみて菜をとる我は

とあるように、一貫して農村生活を讃美、肯定している岡本の自

然な感情が現われているといえる。「妹に」で、私の様に夢のような道に迷うな、というのは文芸への関心を指すのかもしれない。

129号　「自分に」

土筆が頭をもたげ／草の芽がのびてゆく（略）寂しい心は捨て、大気を吸おう／春を、若き春を／若芽にまけず伸びよう

毎日、心を励ましながら生活している様子が表現されている。養蚕の日々に女子青年らしい心境が重なる。

学び舎の頃を憶いて下げ髪に結いてみたれど心寂しも

飼蚕する日は近づけり小川辺に蚕具洗う村人のみゆ

蚕具洗い終えし河原にねそべりて蛙の声を一しきりきく

132号　「朝」

サツサツサツ／とぎすまされた鎌の音／朝まだき裏畑で桑を切る人／鎌をにぎる手が／その顔が／繭の高値に包みきれぬ喜びに／あふれている／梢の切口から緑のしずく／黒土の上に／明朗な朝

134号「機を織る――村の副業　村山大島」は本文の四ページから六ページにかけて掲載された署名記事のトップ。表紙の目次にも載り、男子の「農民精神の確立」「農村を取もどせ」「進路に迷う」などが同格で続く。要約すると、

農村の疲弊を救うには青年男女が協力しなくては、とはよく言うが女子に仕事は無い。昨年四月〔一九三四年〕から村山大島が織りだされるようになった。養蚕期（五・六・八・九）月を除いて一二月までに約六〇円を得た。今年は（一・五・六）を除いて八月までに五〇円を得た。私は昨年三月半ばから二〇日間の講習を受けた。糸ひきの経験も無かったが両親の勧めで、幸い我家で開かれた講習を受けることができた。一匹三円、村の女子の仕事としては利益があると思う。経済的にきちんとした生活ができ、この上なく嬉しい。

これはしっかりした考えとデータに基づく報告となっている。頼もしい「養蚕女子」ぶりだ。講習会の場が自宅だったという。村内では開明的な大家だったのだろうか。

ちなみに、村山大島紬は、現在の武蔵村山市周辺の産業。群馬県伊勢崎から伝わった技術を取り入れて、一九二〇年頃生産がはじまった絣織りで、本場の大島紬より安価な普段着用として普及した。これが女子青年の経済生活を支えた時期があるようだ。

138号　「衣をほどく」〈第二席〉

（略）うす暗い電灯の下で／静かに糸をぬいている私（略）

思い出を消すに忍びなかったから／大切にしまっておいた

此の衣／思いきってチョキン／手ににぎったはさみの冷たさよ

これには選者の評が付いた。第二席に採ったのは「作者の躍進を祝福するため」であり、「永い努力がここまで来たことをうれしく思う」とある。

139号「土に生きる喜び」は小品に相当する分量の創作。

一月三日のカルタ会の帰り道、和枝に幼馴染のミチコが東京へ行くと打ち明ける。半年後に里帰りしたミチコは厚化粧。カールさせた髪、派手な着物に一瞬羨む気持ちをもった和枝はすぐに自分を恥じた。次の正月、ミチコは胸の病で臥せっていて、カルタ取りの声を夜具の中で聞く身であった。

141号　「心の春」。これも一ページ程の短編創作。

温泉で戯れる都会の男女。日曜だって花が咲いたって、俺たち百姓は働かなきゃならないんだと敦夫は桜の枝を殴りつけた。農村に厭気がさした敦夫は病身の父のもとを去るが、しばらくして

運転手になるので自動車学校の金を五か月間送ってくれといってきた。その後も送金を続けたが「敦夫はルンペン」との噂が村に流れてきた。行方も分からなくなったがしばらくして、親不孝を悔いて帰ってきた。〔今も〕温泉の都会人は浮かれているが敦夫は妻と一心に働く農民だ。

この創作二点は、何かぎこちない。編集者が投稿常連の岡本に、何か書いてみないかと勧めたのではないか。短歌にも「温泉」が出てくる。所在地の津久井郡千木良は甲州街道沿いの山村。隣の小原にあって近年まで営業していた美女谷温泉のことだろうか。

150号　「喜び」

（略）こいあごひげをなでながら／入賞状に見入っている父の／頬は包みきれぬ喜びにあふれている／暑い真夏の草取りも／男手一人のぐちも／今、父の頬のどこにも見当たらない／一六燭の電灯の光に／一等――大豆――と書かれた字が黒色に光っている

選者評は「実力を見せた」というもの。父の喜びを我が事とする素直な気持ち。平凡な表現ではあるが生活に根差した実感には安定感がある。先の短編のような不自然さはない。

151号の短詩も美しい。自身の日常をさわやかに切り取った。

着下しの木綿着物に／糊の香がかすかにただよう／洗髪をかたく結い上げて／年に幾度かのうす化粧（略）

155号　「山畑で」

もうすぐ蚕だ／去年はよくあたったが／今年もうまくやりたいもんだ／高原の桑畑で語っている父と私（略）さあ、もう一かかりして握〔堀〕り返される黒土に／短い二つの影がおどっている

156号　「喜び」

開け放された蚕室に／高く積み上げられた□桑棚／青黒く光った桑の葉の切れ目に／はち切れそうな蚕の口が／すばやく動く／もう二三日で上がるだろう／蚕のからだをすかしながら／父はわらっている（略）〔□は一字不明〕

160号に都会に出た妹を母が気にかけている情景を詩に投稿しているが岡本の作品はこの辺りまでのようだ。

こおろぎの声ききながらわが姉と本よみおれば秋の夜親し（岡本節子・千木良）

村祭二尺のたもとなびかせて姉と語りつ吾はうれしき（同）があり妹であるらしい。都会に出たのはこの妹なのだろうか。

宮代千弥子（横浜市）

宮代の登場は110号辺りから。いくつかの俳句を紹介したい。

百日紅の花にかぶさる驟雨かな
キリストの道といている露の道
青空や麦打つ音のひびき来る
雪解けて青麦の空はれにけり

に至って「秀逸」に採られた。

110号　「疑惑」

（略）鏡の中の私の唇よ／世の中の裏切者のような疑訝と反抗といじけた根性にとじられて居るらしい／鏡の中の私の双眼よ／いじけた根性が私の真実の精神だったならば（略）必ずこれをたたき壊すだろうに

111号　「喘ぎ」

（略）谷川の流れに洗われていく／一本の杙に似た、自分の貧弱な姿／たった一人で／ただ一つの道を選んだものの／何処までゆけば良いのか／その曙の道は遠い／行っても、行

っても／針のささった様な痛みがうらめしいのだ

122号「みどり」〈第二席〉

やわらむ翠光に葉靡け／川ぞいの芋畑／つと、ちぎりたるひと葉／おお—うるおうめざめなるかな／ぢぢと汗ばむ、掌に／かざりなきしめやかなる、呼吸！ひとりはにかみて頬にあつ／ふと、小風馨りつ—空に紅の帯

選者評は「美しい掃〔抒〕情詩だ」と評価した。

123号「犠牲」〈第一席〉

ちぎって捨てても蕾はかたい／かたいままにじっと瞼をとじる／怒れば　畏怯に悔やむ／おろかな　涙／許されぬ／ものを言わぬ口で／地に落とすは　歎□〔不明一字〕／外では優しい黒髪を洗い／内では—祭壇の前に／私はいけにえの衣服をまとう

選者はここでも「宮代さんの佳篇をえたことを喜びたい。感性豊かな作品」と称えた。

127号「殞石」〈第一席〉

紅の耳朶を割いて／殞石はつめたと／しかも性命の乳房に密着する／誇が飛ぶ／芸術が砕ける／太陽が崩れる／戦は終った／しかし乳房は／とび散る性命を制へて居る

132号「微誦」〈第二席〉

ボオロン、ボオロン／水車の突っ走る歩路は／でこぼこな雑音を残して／早暁の木芽をとびこえる／チッ、チッ、チ、チ、チ／明け白む、ひろ空／雀らの戯声にまじえて／とおくとおざかった車輪／ボオロン、ボオロン／車輪の跡もひそむと／山爺の□にもえたつ道〔一字不明〕

選者はリズミカルとほめながら内容に深みをと促している。このとき第一席は大沢貞子で、女流の活躍が特筆されている。

142号「自棄」

にがい内容をふりきるたびに／小石が赤裸な音を崩して／川底へふみ散らされて了う（略）日暮れ—川底にも流れてくる／我家、かえろ、かえろ／これで好い

149号「新双眸」〈第一席〉

風景のなかった目に／何かキラキラとまぶしい光り／赤い紙鶴を折って／どの子にあげようかと／ふかぶかした慰めが今日一日／胸に飾る歌声も／きらびやかな風景になって

154号「山峡の草」

闇の野に紅薔薇はうるわしい／山峡のふるさとをしのばせる／菜の花よりも（略）わたしは烈しく胸をふるわせる／紅薔薇への執着がたのしくて

156号「赤と白の一夜」〈第一席〉

（略）無限の悲しみは晶玉のフラスコに秘められ／激しい不滅の水滴をたたえる／赤い焔は／永劫に燃えつづけ／白い焔は／みるみる内に消えつくされる／ふかい夜の涯には涙は—溢れ／六角の月の輪は炸裂（略）

166号「炎のはなびら」〈第一席〉

燃えるいのちの美よ／まごころの灯の花／眼をとじると—おお、ま白い世紀のながれ／エピローグ、ゆめのエピローグ／わこうどよ、魂よ／つよく気高くほほえめ／鮮やかな建設の苑に〈第一席〉

たびたび第一席を取ってきた宮代の掲載最終作。象徴的な表現に包んで個人的な心情を吐露する作風かと理解してきたがここにきてオヤッ？「建設の苑」という言葉が出て来た、と選者・福田正夫の評価を見ると、「宮代さんの象徴性の華麗をあらはした事変即応の作」という最大級の褒め言葉があった。これに先立つ165号

は「皇軍慰問号」。宮代の激励文も採用されている。

三八年七月の167号が最終号。通常通り詩、俳句、短歌を載せて最終ページに、『武相の若草』は今月号で或いは廃刊となり別様のものが発行される様になるかも知れませんので」若草の思い出のためにも若草集を刊行したい、とあり体裁、経費、一人自選十首、などと要綱が載り、終わっている。

選者紹介

○渡辺未灰（一八八九年一一月一一日～一九六八年一一月二五日）東京市職員、横浜市役所勤務の後自営業。高浜虚子に学び「国民新聞」「ホトトギス」に投句。「新緑」同人。東京日日新聞俳壇の選者を務めた時期もある。晩年は実業に専念。

○小野蕪子（一八八八年七月二日～一九四三年二月一日）小学校代用教員から毎日電波社記者、後に毎日新聞社会部長。一九三八年から日本放送協会文芸部長。戦中、新興俳句運動とプロレタリア俳句運動の弾圧事件の黒幕または特高警察への密告者とする向きもある。

○前田夕暮（一八八三年七月二七日～一九五一年四月二〇日）神奈川県大住郡南矢名村（現・秦野市）の豪農に生まれる。中郡共立学校（現・平塚農業高校）を中退、上京。一九一〇年、若山牧水の歌誌「創作」に編集・同人として参加。一一年、創刊の「詩歌」を休刊の後一九二八年に復刊して口語自由律短歌を提唱したが一九四三年に文語に戻る。この間多くの歌人を育てた。終生故郷の秦野を愛したがその地を再び踏むことは無かった。

○加藤武雄（一八八八年五月三日～一九五六年九月一日）神奈川県津久井郡城山町（現・相模原市）に生まれ高等小学校を卒業して小学校準教員。投書家として頭角をあらわし、農村を描いた自然主義的短編集「郷愁」を書くが後には通俗小説、戦中は戦意高揚小説を書く。

○福田正夫（一八九三年三月二六日～一九五二年六月二六日）神奈川県足柄下郡小田原町（現・小田原市）に生まれた民衆詩人。一九一六年「農民の言葉」を出版、一八年に「民衆」創刊に参加した。三七（昭和一二）年一〇月一八日放送の国民歌謡「愛国の花」（歌・渡辺はま子、作曲・古関祐而）の作詞者として知られる。大ヒットした。レコード化、映画化もされた。

戦後七〇年の節目に当たる二〇一五年、国内外の歴史をさまざまに検証する番組が多数放映、放送された。その一つに歴史家の保阪正康が解説するＮＨＫのラジオ番組・新特集「昭和史をあじわう」があった。その中で戦争ムードを盛り上げた「愛国の花」が取り上げられ音源も残っていて一部流された。歴史を伝える歌の一つであるらしい。

おわりに

青年団活動の中から、自分たちの機関誌発行の機運が盛り上がり『武相の若草』の誕生となる。そこに強力な推進者、指導者の意向が働いたとしても、読者となる団員の意気が必要だろう。購入者・読者が支えなくてはならない。投稿欄があるなら盛んな投稿活動が必要だ。難し過ぎる、投稿者は売名的だ、などの批判も仲間内から出ているが長期間継続するには読者自身が「我らがも

の」と感じ誇りとすることが重要だったと思われる。

機関誌を通じて青年たちには第一に農業従事者として生産性の向上が期待され、自らも模索している。創意工夫の発表の場ともなっていた。村落の指導者依存を乗り越えて自主性を養い、国家的、国際的視野を獲得していく。

女子青年には生活の改善が奨励され重視される。紹介される外国の事情にも触れ、熱心な読者なら自ずと我身と比較する機会を得る。視野が広がるほどに個々の感情は刺激され、村落慣習的な制約の多い時代にあって苦悩が増したかもしれない。

この種の機関誌としては特筆に値するといわれるほど重視した文芸欄は豊かな感性と考える力を培っただろう。「余りに文芸的」との批判もあったが編集者は、文芸作品は「血の出るような人生の記録」、若草の作品は「他に誇る事の出来る真面目なもの」と強調、一部世間のいう「文芸は退廃」の図式に抵抗している。一方で国家の方針、動向も提示され、変容も余儀なくされた。徴兵制度のもと青年たちは戦場に駆り出される運命にもあった。

女子青年たちは自分の意見を持ち表明もし、男子との人格等価値の考え方を獲得していた。家庭を重視、男子を支える立場を我が位置としつつも、人としての尊厳の同等ははっきり確信して主張していた。

しばしば、女だから虚栄心はあります、という表現に出会ったが、「虚栄心」の意味するところは実質を伴わない外見の栄誉、見栄を張る、などよりもずっとずっと軽く、綺麗になりたい、おしゃれをしたい、といった程度のことのようだ。農村にあって「綺麗」を望むこと、それを言える、投稿や投書のできる身近な機関誌があることは、大きな励み、安らぎでもあったことだろう。

青年団は戦争推進機関として準備されていた、とひと括りにして一蹴する解釈があったと思う。組織としての機能は研究されたがそこに人間は見えていたのだろうか。

『武相の若草』は農村社会の啓蒙を目的として出発し多くの青年男女を育てた。けれども時代の流れとともに変化、戦時体制に呼応した記事が序々に増え、それに対応した青年男女の意見掲載が増える。選者の意向も絡めながら文芸作品への波及もあった。確かに推進機関として機能した面は大きい。

そのような流れの下でも男女青年たちは、真摯に自己を見つめ、苦悩を乗り越えて生きようとしていた。それぞれに時流を受け止めながら、団である前に個としての発露である文芸を手放さない者たちがいた。これまで生身の彼らに思いを致すに十分とはいえなかったのではないか。

ここに、『武相の若草』の作品群を、時代の証言として提示したい。顧みられることのなかった文献を紹介し、不十分ながら検討を試みてきた。この再録によって、この時代の若者の軌跡と心情を心に刻み、忘れないでいたい。「忘れないで」ほしい。

女性公務員の先駆け ―井上常子と女子青年会―

影山　澄江

はじめに

戦前、女の職業は教師や看護婦（士）、製糸女工など一部の職種に限られていた。大正デモクラシー期の自由で開放的な時代の中で、ジャーナリストや文筆家など自分の意思で働く女たちが増えてきたが、しかし公務員など公の仕事はまだまだ男の職場であった。そのような中で、神奈川県では県庁職員として初めて女を採用した。それが井上常子である。

当時、農山漁村部では、尋常小学校を卒業すると家の担い手として働かざるを得ない子どもたちが多かった。農山部では農作業や養蚕業に関わる仕事が多く、特に女子の学習の機会の少ないことから、彼女たちの教育、啓蒙の場として作られた組織が処女会であった。

神奈川県の処女会が、最初に組織されたのは箱根仙石原の乙女会であるが、一九一〇年代になると高座郡麻溝村、愛甲郡高峰村、厚木町にと各地にぽつぽつ設置され始めた。

一九一八（大正七）年、処女会の全国的な連絡機関として処女会中央部が設立されると、県内でも急速に組織化が進む。やがて大日本連合女子青年団が発足（一九二七年）し、名称も処女会から女子青年会（団）（以後、会とする）となった。

この処女会・女子青年会をまとめ、指導・啓蒙するために任命されたのが井上常子である。一九二五年一一月のことである。すでに、前年九月には『武相の若草』が刊行されており、県内の男女青年たちの心のよりどころとなっていた。その『武相の若草』には県内の若者たちの文芸や、各男女青年会の状況が報告されていたが、処女会の指導者としての常子の活躍も掲載された。

『武相の若草』を中心として、井上常子と女子青年たちとの交流がどのようなものであったか、また、女子青年たちにどのような思いで接していたのか、どのような指導をしていたのか、その生き方などを考察する。

一　女性社会教育主事補の誕生

一九二五年一一月、神奈川県では、女子青年団奨励振興のため、特別会計を制定して女性公務員、社会教育主事補を採用した。女子青年会の育成や指導に当たり、組織化を奨めるために活躍する女が求められ、その役割を担う指導者に登用されたのが井上常子であった。県庁初の女性職員である。

県庁には、すでに助手的な役割の女子職員や臨時の職員は勤務していたが、正規の女性職員は初めてであった。それだけに、神奈川県社会教育課の意気込みが感じられ、女子青年団の振興に対する熱意がうかがわれる。

それにしても、この時期、女が県の職員に登用されるのは極めて珍しいことと思われる。全国の状況はどうであったろうか。

文部省社会教育会編集の機関誌『社会と教化』（一九二一年一月～二三年一二月）・『社会教育』（一九二四年一月～四〇年）に目を通してみた。全国の社会教育関係に就業している女を調べてみたが、不明であった。もっとも、神奈川県が女性職員を採用した報告をも、見出すことができなかった。

ちなみに、一二六年五月の井上常子の給与をみると五五円である。同じ社会教育主事補、宮原剛の給与は八〇円（『神奈川県職員録大正一五年五月』）と、大きな差がある。年齢差もあろうが、同じ職種ながら、男女での格差が大きい。

一九二一年一〇月には、すでに、処女会中央部が第一回指導者講習会を開催しており、翌年一〇月の第二回講習会には、県からも八人が出席した。

一九二三年九月一日の関東大震災は、関東地域に大きな傷跡を残し、神奈川県下にも大被害と大混乱をもたらした。同年一一月、政府は民衆の不安を治めるため「国民精神作興詔書」を発布。小学校単位だった処女会が町村単位となり、じょじょに女子青年会に統一されていき、否応なしに組織化がすすむ。そんな中での、社会教育主事補・井上常子の誕生である。

翌月の『横浜毎朝新報』（一九二五・一二・三付）には、次のような記事が掲載された。

見出しには「女子青年の御産婆役　井上常子サンの就任　県の社会教育主事補として　きのうから女子青年のため」とあり、続いて次のように書かれている。

青年団と対抗して県下統合の第一声をあげる処女会の産婆役として今度はじめて井上常子さんと言う女性が神奈川県社会教育主事補と言う肩書を頂戴して女子青年のために活躍することになって二日から教務課内の席に就いた。今年二九歳と言えば婦人としては働き盛り女子青年のためにはいい話相手だ。同女は宇都宮□せん女学校、私立英和高女、女子専門学校家事科卒業（中略）藤井社会教育主事は語る。団体に関係した一切を掌らしめるつもりである。これからは婦人講習会や講演会などを盛んにやってもらう（□は不明）。

翌、一九二六年一月一日付の『横浜貿易新報』にも、「新しい頭脳から正しく見た婦人道」の見出しで井上常子が紹介された。

県庁の社会教育主事補　井上常子女史に共鳴

井上常子さんは社会教育主事補という厳めしい肩書付き、県下の処女会を引き回して行こうと言う新人の役割を持っている。が、ご本人は「私は旧式な女です」とキッパリ断って、さて、低いが力のある言葉を続けた「勿論今の若い人々はもっと目覚める必要はあります。然し婦人が文化式とかの家に住って洋服を着けて椅子に掛けお湯に這入って今度はキモノを着て畳に座ることが目覚めた生活でしょうか、そんなことよりももう少し大切なことが忘れられて居ります。それは家庭的に婦人の天分を尽すことではないでしょうか。家事にしろ、育児にしろ、衛生にしろ却ってこの肝心のことが打棄られているように思います。何と言っても婦人は婦人なんです。婦人の勤めは家庭にあります。家庭の勤めを完全に果たせば婦人としての任務は大部分成し遂げ得たものとわ

たくしは信じています。（中略）わたくしは指導などと言う意味でなく皆さんと一緒に同じ道を進んで行きたいのです」その言や更によし。

この新聞記事で常子は、「若い人々はもっと目覚める必要」があると言いながら、「家庭的に婦人の天分を尽すこと」「婦人の勤めは家庭にあります」と語る。常子自身の社会的任務を考えると、社会に眼を開くこと、女の働き方や社会参加についての意見が表明されるのかと期待したが、「婦人の勤めは家庭にあ」るとの主張であり、それ以上の域を出ることはなかった。良妻賢母が求められ、その指導的役割が担わされたのであろう。

新聞は、こうした彼女の抱負に、一も二もなく賛同している。高座郡では二四年四月二二日、処女会が女子青年会に統一された。翌二五年秋、県の青年会幹部講習会が横浜市鶴見の総持寺で開かれ、その状況を『横浜貿易新報』は次のように報道している。

県下の青年会幹部講習会を開いた結果処女が大いに団体的運動を期待するようになったので県も大いに乗気となり本年内には郡の代表者を以って連合組織の協議会を開く予定である（一九二五・一〇・一三付）。

これによると、処女会側から連合組織を期待するようになり、「県も大いに乗気」となったとある。処女会の活動が自主的、積極的になり活発に発言するようになったということであろうか。処女会としては、名称も代わり県全体で提携しながら女子青年会独自の活動を期待したのではないかと思われるが、期待通りの活動がどこまで進められるのであろうか。

ともあれ、以後、常子は県内各地の女子青年会などで講演活動や実技指導に活躍することになる。女子青年会の指導者となった井上常子の活動を、『武相の若草』を中心に見ていく。

二　『武相の若草』創刊と井上常子

神奈川県では一九二四年九月、男女青年団（会）の活動を積極的に奨励し、活発化させる意味も込めて、機関誌『武相の若草』を創刊した。

創刊号の「創刊の辞」には「我らのものは我らの手に…」のことばを掲げ、「真実の我ら自身を表現して世に示すとともに」「修養の機会となさん」としている。さらに「大地より創造すべき当来の文化は性別を超越したる全生命の所産であらねばならぬ」「男女両性の提携、共励共修の機関」として、県を挙げて応援しようとの姿勢を示している。

また、神奈川県社会教育主事、藤井徳三郎は「発刊にまで」の中で、「武相の若き人々の熱意はあまりにも強大で」、震災後は「前にもました熱心なる要求があり、本年当初に開かれた青年団代表者大会に於いては殆ど全会的の希望があり」、『武相の若草』は再びその萌芽を見ることになったのであります。」と記している。

また、「実に青年処女自身の手によって青年処女自らのものとして産み出されようとしてゐるのです。何と偉大なる「時の創造」ではありませんか。（中略）希くはこの若草の上に強き陽の照りますやう諸君の努力を祈ります。」と、男女青年たちに大きな期待を寄せている。

二六年一月の『武相の若草』17号には、次のような記事が掲載された。

おしらせ　◆社会教育係の新陣営

近来女子青年事業の進歩著しいものがありその施設経営も

亦漸く実際に近づき来ったのは喜ぶべきことである。

本県はこの点に深く鑑みる処があり特に女子の本務たる家事の方面の研究に便宜を与へ、兼ねて女子青年会経営の相談相手として全国にその類例なき女子の社会教育主事補を置くことになった。

右によって帝国女子専門学校を卒業した井上常子女史は旧臘一一月神奈川県社会教育主事補に任ぜられた。女史はその豊富なる学殖と家庭的の経済と女性らしき優にやさしき資性とをつくして本県女子青年会発展の陣頭に立たれるという。敢えて誌友に御紹介する次第である（以下略）。

神奈川県においては「女子の本務たる家事」を考え、女子青年たちの相談相手として「全国にその類例なき」女の社会教育主事補を置くことにしたという。県はもとより、『武相の若草』にとっても井上常子に寄せる期待の大きさがうかがえる。そして、誌上には若草講座が新設された。

若草講座の新設

本誌発刊以来すでに三歳を迎え漸く実質的成果も認められたので一段と諸兄姉の教養の伴侶たるの実をあげんことを期して修養に必要なる題目を選び知名の士の執筆を乞うて連続的に掲載することにしこの新年号を期して第一回を発表した。

その行文はなるべく平明平易にし、而も思想学術の緼奥を味われるようにしたいのが我らの希望であり願いである。題目選定につき希望ある向は腹蔵なく申越されたい（以下略）。

こうして、「若草講座」が開設され、井上常子の衣食住に関する講座が誌上講習として登場する。さっそく、同17号には「家計の整理に就いて」が掲載された。その内容は以下のようである。

家計の整理に就いて

家計の整理は一家の幸福及び安全に関係のある事なれば務めて、其実現に力を盡すことが肝要であります。（中略）家庭の資力地位要求等一様では有りませんからここに一般的標識を以って申上げることは不可能であります。而其目的とする処は収入と要求との間に均衡を保って出納の調和を計り、残余を見るにあります。入るを計って出づるを制するは家計整理の極意であります。（中略）支出は一家の生存を支持する上に必要なる財貨の消費であります。（中略）収入の計算は出来る丈精密に、（中略）農家や商家ですと給料と言うこと等も然々違ひますが要するに支出科目に概算した収入を調和と平均を以って割当てる可であります。（中略）食糧実額は（中略）中流家庭にては三割を以って標準とし、（中略）被服費は（中略）約一割（中略）、居住費は（中略）十分の一（中略）交際費は人と人との交渉を持つ上に又は親密を計る上に大切なる事（中略）収入の二十分の一（中略）、慈善費も要領よく取り扱うべきです（以下略）

と、「です」「ます」調の表現で、具体的に丁寧に、四ページにわたって語りかけるように書いている。家計は「入るを計って出づるを制する」ことが家計整理の極意とまず押さえる。食料費は中流家庭で収入額の三割、被服費は約一割、居住費も「十分の一」、交際費や慈善費にまで及び、「要領よく取り扱うべき」と細部にわたって気配りしながら書いている。

次号の18号には、「衣服に就いて」を執筆している。

衣服に就いて

文明の進歩は機業の発達染色の変化を見、衣服をして装飾化し実際生活とはやや相容れない点も見らるる様になりました。衣服は家庭生活上にも当然交渉の深い物でありまして、女子は殊にここに研究する余地が未だ十分にあると思います。適当にその善美を取り入れるときは得くるところ多くまた一歩進むときは浮薄虚栄の資材となることは申す迄もないことであります。（中略）まず体が外部の気候の変化に耐えるようにし季節に伴ない又は外部よりの表熱温熱の吸収が過度なるを妨げ又は是に反して体温の消失をふせぎ、それを保持すると共に湿気の侵入を防ぎ体温の放散を調節する等の用をなさなければなりません。（中略）大気中にある塵埃病原菌などが身体に付着するを避け、又は表皮汗脂等から成る処の各種の排泄物を取り去り清潔を保ち皮膚に損傷を防ぎ容儀を整え、（中略）自由に活動に叶う様仕立てると云う事（中略）其の他家風と各々の性質習慣等を考へると共に風俗流行もあながち無視すべきではありません。材料は毛皮類、編物類等（中略）我国に於きましては織物が其の大部分を占めております。（中略）原料即織物を組成するに用いる動物性又は植物性の繊維につき伝熱保温吸収等の特質を知る必要があります。（中略）衣はまとうべきなり。衣にまとわるるべからず。衣は自らの美を飾るが程につくろうべし。衣服の美の中に自らの醜を見ざるる如きはつたなし。女は衣服を大事がる事、時に自分以上なることあり

と書く。文明の進歩で衣服が装飾化されてきたが、「適当にその善美を取り入れるときは得ることが多」いという。しかし、一歩進むと「浮薄虚栄の資材となる」と釘を刺す。そして、身体と衣服とのかかわりや、素材についても繊維織物や毛皮類、編物類等に触れている。さらに、「風俗流行もあながち無視すべきではありません」とも書いている。一九二六（大正一五）年ころのこと。

近代化の波は東京、横浜などの都市には溢れており、近郊の農村にもその影響は及んでいて、青年たちの心を捉えていたことと思われる。そんな中で「私は旧い女」と言いながらも、常子なりに時代を把握しており、進歩的と思われる発言もしていたのではないかと思われる。

続いて、20号には「日常の洗濯法」を載せている。

日常の洗濯法

衣服の汚れは衛生上悪いばかりでなく、変色の恐れがあり地質を害し経済的にも容儀上にも宜しくありません（中略）洗濯法を区別して乾燥洗濯法、湿潤洗濯法の二様になります。

一、乾燥洗濯法、是は主として油脂の汚れの場合実行する方法で、其の部分に丈ベンゼン又はエーテル揮発油等を使用。（中略）二、湿潤洗濯法、此方法は一般に行って居ります。湯や水にて洗う方法を申します。すべての汚れを洗い去る事を得費用も少なく便利ですが、絹織物や毛織物と木綿物を洗う場合に使用する石鹸を区別しなければなりません。（中略）三、絹織物毛織物の洗濯、十匁位上質の石鹸を熱湯にて溶き適当なる石鹸水を作ります其の中にアンモニア数滴を入れ洗濯物を二十分位つけて余り揉まず静かに軽く洗います。（以下略）

日常生活に密着した知識を、科学的に分析しながら毎号提供している。続いて21号には「調理の知識」を、22号には「ご飯の

炊き方」、23号には「飲み物の話」、24号には「衣服の整理保存法」、26号にも「毛織物の洗濯」など、一〇か月間にわたって、生活に関連した問題を取り上げ、懇切丁寧に書き進めている。家庭生活全般について科学的な視点から、青年たちに理解しやすいよう指導する努力を惜しまない。

井上常子にとっては、社会教育主事補一年目の積極的で勢力的な執筆活動であった。

三　女子青年会の指導（1）

連載記事を『武相の若草』に掲載するかたわら、常子はまた、県内各地の処女会、女子青年会（団）の指導を積極的に行なっている。

一九二六（大正一五）年一月一三日、橘樹郡女子青年会の幹部研修会「家政について」の講演会（18号）を皮切りに、ほぼ毎月のように講演、講習を行っている。

その活動を一覧にすると次のようになる。

一九二六年

一月一二～一三日　橘樹郡女子青年会幹部研修会　講演「家政について」四〇人出席（18号）
一月一八日　中郡処女会幹部講習会　講演
一月二二日　県主催郡内女子青年団幹部指導講習会　女子青年会の普及と提携、修養。各村からの意見発表六五人参加（『続・あつぎの女性』）
二月一五日　玉川村処女会発会式村民有志出席（19号）
二月一九日　全国連合女子教育大会代表者を引率（19号）
三月二一日　都筑郡二俣川村処女会春季総会　藤里郡視学とともに講演（20号）
四月一〇日　高座郡大和村処女会料理講習会指導（21号）
五月　二日　足柄上郡北足柄村女子青年団例会　精神的講話（22号）
五月　五日　橘樹郡女子青年団春季総会　講演（22号）
五月二九日　高津村女子青年会、高津小学校で講演会講師（『多摩の流れにときを紡ぐ』、『騎士』）
九月一六日　足柄下郡岩村処女会　料理講習会（27号）
一〇月一三日　都築郡中村小学校同窓会女子部料理講習（27号）
一〇月一九日　鎌倉郡中和田村処女会　日常作法講習会（27号）
一〇月二二～二八日　第五回全国処女会指導者講習会日本青年会館
一〇月三一日　本県各郡市代表二三人と共に出席（27・28号）
津久井郡佐野川村女子青年会秋季総会　講演（27号）

橘樹郡高津女子青年会の講演会

一九二六年一一月一一日、女子青年団の組織化振興に関する内務・文部両省の共同訓令が出され、翌一二月二五日には処女会、青年団が強化団体として文部省の所管となる。

社会教育主事補に就任した翌二六年の井上常子の活動には、目を見張るものがある。執筆に、講演会にと精力的に活躍している。勢い余ってか、講演を依頼された橘樹郡高津女子青年会から、講師としての態度を批判されたりもした。

その高津女子青年会は、同年一月一〇日、女子青年会設立のための役員会が開かれ、会長、副会長、正副支部長が決定した。次いで二月七日、創立発会式が開催された。発会式には会員一五〇人が参加し「頗る盛会でありたり」（『騎士』創刊号・一九二六年

五月）という。

同年五月、高津青年団文芸部発行の機関誌『騎士』が創刊される。その機関誌に、高津女子青年会主催で開催された講演会に井上常子が招かれ、とんだハプニングが起きた記事が掲載された。

高津女子青年会講演会は、五月二九日に行なわれた。定刻の午後一時になっても常子は現れない。午後二時になりようやく姿を見せた。一時間余待たされた聴衆の中には、「学校生徒多く少々喧噪を極め」た状態となり、彼女は講演を中止する。役員たちは恐縮して詫び、女子青年会員のみが拝聴したいと懇願したが聞き入れられず、次回の講演も応じなかったことから役員の怒りが爆発。「かかる頑迷固陋なる徒輩に講演を依頼するの要なしと一同の激昂甚だしく」「講演無用」を申し入れた。

その後、会場では独奏や合奏、合唱や演劇など余興が続き、五時五〇分終了。この間、すでに帰ったと思われた井上常子が再び登壇。「先刻の強直不遜なる態度を謝し、約三〇分ほど感想を二三述べ降壇」（『騎士』一巻二号・一九二六年七月）したという。

この行動について、『多摩の流れにときを紡ぐ―近代かわさきの女たち』（一九九〇年一一月）は次のように記している。

「当時青年団活動の中で盛んにいわれた『自治』『自主』の空気、それにすでに自立的な文化運動を根付かせてきた高津の青年たちの気概によるものだろう」と。

高津女子青年会の自主的、自立的な気概がよく伝わってくる出来事である。だが、常子もさるもの、会場に最後まで残り、自分の非礼を詫び、感想まで述べている。

この時期の常子は講演会や執筆活動などの多忙な中で生活していたと思われるが、それにしても講演の予定時間に一時間も遅れるとは信じられない。社会教育主事補に就任したばかりでもあり、指導者としての傲慢さが出てしまったのであろうか。以後も県内各地の女子青年会の総会や講習会に参列している。その感想なども『武相の若草』に載せている。

西浦女子青年会の総会に臨みて

逗子や葉山に隣しているこの村にはきっと都の風が吹き込んでいるだろうという私の想像は見事に裏切られて涙ぐましい程質朴な、しかもよく統一のとれきちんとした処女たちを見ました私はむしろ驚きに近い喜びを味い6ました。雄々しい処女たちの身体は一様に棉服で飾られておりました。（中略）長老を尊敬し、一致して村の為にまたお互の為に働くという皆様の御心掛け、講習をなさるにも実際家庭の女子に必要な料理、裁縫、作法、編物、家庭ミシン、生花等を主としてなさるというやりかたも尤もなこととうなずかれました。

（中略）会員のお手によりましたお料理には本当の温かさがこもっております（下略）（22号）。

総会の内容そのものにはほとんど触れず、会員が「綿服」で参加したことを喜び、会長の「棉服に化粧せぬこと」の提案に、全員が賛同したことに感動し、会員の手作り弁当に「議論にまさるもの無しとたたえている。『武相の若草』18号で「風俗流行もあながち無視すべきではありません」と書いたことは何だったのだろうか。社会教育主事補に就任して一年も経ぬうちに、質素節約の心得を指導者として会得したものと思われる。

なお、二六年には横浜市を除く二市一〇郡九町村に連合女子青年会が設定された。翌二七年四月には、大日本連合女子青年団が発会する。

一九二七年七月七日、神奈川県女子青年連合会が発足し、県内の未婚の女子は連合会に吸収され、大日本連合女子青年団の傘下に入る。その、神奈川県連合女子青年会創立大会の模様を『武相の若草』は、36、37号に「花は開く大広間」として大きく報道した。井上常子は大会の進行役を務める。

横浜市の中空高く聳え立つ開港記念館の大広間、七月七日の女子大会こそは、県下青年女子の為に忘れることのできない日であった。県下二百有余の女子青年団体から、二万三千余の会員の代表者約千名。午前一〇時開会。井上常務理事の進行の次第の発声場内清らかに澄み渡って開会。開会の辞は戸塚副会長（学務部長夫人）、経過報告を藤井副会長。池田知事らの祝辞などののち、宣言、「国家ノ示サレタル指標ニ向ツテ最善ヲ盡サンコトヲ期スル為メニ」綱領を決議した。さらに、記念講演には安井哲子（日本女子大学校長）の「青年の団結力」と題する講演があった。

二七年一〇月一〇、一一日、大日本連合女子青年団発会式が日本青年館で開催され、会員の意見発表では、神奈川県の代表として中郡の原モトが行なっている。さらに、一〇月一二日から四日間、大日本連合女子青年団、第一回幹部指導講習会が開催され、神奈川県内各郡市代表者とともに、常子も県連合会常務理事として出席する（39号）。以後、県連合会女子青年会関係の会合、全国女子青年会に関わる会合には、必ず出席している。

この年の活動は、ほかに三月一三日、荻野小で行われた愛甲郡女子青年会総会にも出席している（『続・あつぎの女性』）。

仙石原乙女会の祝賀会

一九二八年二月一一日、足柄下郡仙石原村乙女会創立二五周年記年祝賀会が開催された。それに常子も出席し、県連合会女子青年会長代理として祝辞を述べた（43号）。

祝賀会の報告には、乙女会の沿革を次のように記している。

明治三十七年二月十一日本会の前身処女会を勝俣沢次郎村長創設、同氏宅で裁縫作法の学習、講師は杉山しげ、費用は有志寄付と会費負担。（中略）明治四十三年、当時の杉山校長乙女峠にちなんで乙女会と改称、此の頃会員は奮起し、秋の草刈り迄して裁縫作法の講師を聘する費用に当てたりした。大正九年足柄下郡より表彰―大正十二年実補女子部の設立により裁縫作法の授業は譲ったが実質は異なる所はない。（後略）

祝賀会の報告では、乙女会の創設は一九〇四（明治三七）年とあり、通説より一年後になっている。また、当初は処女会であったこと、その後乙女会と改称したことが判明した。いずれにしても、神奈川県では初めての処女会であることに変りはない。

次いで、井上常子や郡連合女子青年会長代理など来賓者の祝辞があり、そのあと宣言文、綱領の決議をする。

綱領

一、美徳を養い質実勤倹の美風を興しましょう

二、共存共栄の良俗を助長いたしましょう

三、日々を感謝で暮しましょう

昭和三年二月十一日　仙石原村乙女会

足柄下郡仙石原乙女会創立25周年祝賀会

『武相の若草』43号（1928年3月）より

また、報告の終わりには、常子の書簡が掲載されている。

会場に集まった人達は、（中略）家庭的の気分が充分でありました。色々な飾付も、来賓達に出たお赤飯やおにしめ、お菓子も皆会員が自作の一様な作業服姿に立ち働いた。手でこしらえられ、記念の手拭も—晒木綿に模様や文字を染色—会員の手でなったものでした。（中略）県連合女子青年会の発会式に横浜開港記念会館で、県下の女子青年の代表を承って答辞を述べ、満堂をひとしを感激深くしたのも乙女会の勝俣さんであった事が憶ひ起される。（中略）会のねらひどころは、修養に精進し、趣味を向上し、体育に力めることである。修養に就いては、知識、情操、意志、技芸等に分けられやう。そして月の例会を毎月二回、染色や料理の講習を各年二回、四大節祝日の小学校の式に出席、講話会や敬老会開催、小学校図書室の利用、図書雑誌を購入して巡回閲覧の乙女文庫があり、（中略）雑誌「乙女」は会員の手で発行する等の実行要目を選んで実現する等が主な施設であろう。（中略）

都市の者や外人が入り込む箱根に斯うした純情素朴さの気に満ちて、修養と趣味に入り進み、体育にいそしむでおらるる乙女会の、将来益々幸多からんことを心に念じつつ筆を擱きます。

創立二五周年記念式典後にしたためた、乙女会への礼状と思われる。会員たちの努力を讃えながら、さらに修養や知識、情操にまで気配りし指導をほのめかす。それにしても、小学校図書室の利用や巡回閲覧の乙女文庫、会員の手で発行している機関誌「乙女」があったことに驚く。指導者が誰であれ、彼女らの積極的な活動力、主体性がうかがえる。

次に二七年以降の常子の参加した会合と活動を列記する。

一九二七年
三月一三日　愛甲郡女子青年会に出席　荻野小（『続・あつぎの女性』）
七月　七日　神奈川県連合女子青年会創立大会　横浜開港記念会館　各郡市町村女子青年会代表約一〇〇〇人。常子進行係（37号）
一〇月一二日　大日本連合女子青年団第一回幹部指導者講習会県代表者と共に参加（39号）

一九二八年
二月一一日　足柄下郡仙石原村乙女会創立二五周年記念祝賀会出席　二五年間の歩みなど祝辞（43号）
三月　神奈川県連合女子青年会役員会出席
五月二八日　神奈川県女子青年会　箱根見学旅行。原、堀江とともに引率（47号）
七月〇七日　神奈川県女子青年会創立一周年記念総会平塚小学校で開催　開会の辞を述べる（48号）
七月一五日　橘樹郡稲田村女子青年会総会　会員の意見発表など。参加者一三〇人、祝辞を述べる（48号）
八月〇一～〇三日　足柄下郡下中村処女会作法講習会参加者六〇人出張指導（49号）
八月〇七～〇九日　足柄下郡湯河原町女子青年会割烹講習会参加者五〇人　出張指導（49号）
八月二〇日　岩村女子青年会総会（49号）
一〇月二六～二八日　神奈川県連合女子青年会幹部研修会　中郡大山阿夫利神社　参加者五六人。一日目の挨拶（51号）
一一月二一日　第二回全国女子青年団大会　本県発表者五六人引率者として参加（53号）

一九二九年
三月二五～三〇日　神奈川県連合女子青年会の代表と伊勢、奈良、大阪、京都方面へ見学旅行。各郡市代表者一一人を引率する（56号）
一〇月〇六日　第三回全国女子青年団大会　第五回指導者講習会日本青年館。本県出席者とともに参加。女子青年会は著しく進展。一層の振興を図るとともに、国民精神の作興、経済生活の改善に関し女子青年団員の自覚を促進し堅実なる発達を図り、地方の開発、国運の伸展を資すとされた（62号）

この年、二九（昭和四）年の世界大恐慌の波は、農村にも押し寄せ、養蚕業に大きな打撃を与えた。生活困難に陥る家庭も続出した。そのような中で、神奈川県教育委員会は第一回教化総動員を行ない、県下一致思想の醇化を宣言した。

一九三〇年五月、県連合女子青年団は団体訓練も兼ねて大島方面に見学旅行に行く。常子も同伴、五三人が参加した（70号）。

この見学旅行については、「神奈川県連合女子青年会大島紀行日記」として、詳しい記録が70号に掲載された。その中に、目ざとく常子の姿を見つけた筆者は「井上常子先生の御軽快な洋装にリックサックの御姿。私達一行の目には又とない信頼を感ぜしめられた」と記している。会員たちの、常子に対する信頼感があふれている。

四　女子青年会の指導（2）

三一年九月、満州事変が勃発すると、青年会としての対応が協議された。次第に戦時色の深まる中で、常子は女子青年会の総会

や講演会に出席し、指導、啓蒙にあたる。

一九三一年
四月二六日　足柄下郡連合女子青年会総会へ出席（82号）
五月〇二日　神奈川県連合女子青年会の代表者とともに、静岡県下優良女子青年会へ視察旅行（82号）
五月一七日　三浦郡連合女子青年会総会へ出席。参加者六〇〇人（82号）
七月一一日　県連合女子青年会、第一回女子修養講座　開会の挨拶（85号）
一二月一五日　神奈川県男女青年団連合評議会、臨時評議委員会が県庁で行われ、各市町村男女役員とともに出席する。満州事変に際し、青年団として如何なる方途を講ずべきかを協議。また戦死者遺族の慰籍、生活困難家族の慰問救護などを検討する（90号）

一九三二年
五月二七～三〇日　県連合女子青年会大島旅行引率　参加者六七人。大島の産業見学、海の生活を経験し、島の人情、習俗に接する貴重な体験をする（95号）
八月〇八日　県連合女子青年会、幹部指導講習会に参加。「女子青年団体の組織運営指導」について協議。参加者四三人（96号）
一一月二二日　大日本連合女子青年団第一三回大会が東京明治神宮外苑日本青年館で開催され参加。全国から一七〇万人の女子青年の決議などがなされた（101号）。
一一月二七日　県男女青年団、国民更生運動実施案起草委員会に参加。実施事項（Ⅰ）教育的施設①敬神崇祖の精神発揚（神社を郷土生活の中心とすること）②宗教心の養成　③公民教育実施の充実など。（Ⅱ）産業的施設　（Ⅲ）公私生活改善に関する施設など協議（100号）

一九三三年
四月二三日　中郡連合女子青年会、第五回総会を県立平塚高等女学校講堂で開催。参加者七〇〇人（105号）
一一月二〇日　厚木町女子青年団、国旗披露式と秋季総会に講話参加者三〇〇人。団旗を新調し入営帰郷兵士の送迎に用いる（112号）

一九三四年
八月〇八～〇九日　厚木町女子青年団、夏季講座講習会講師　井上常子「女青の本分及び種々なる修養講座」小野静江「栄養研究的料理」など（121号）

一九三五年
三月〇五日　大日本連合婦人会、女子青年団　第一回合同全国大会引率

一九三七年
三月一三～一五日　鎌倉郡連合女子青年会幹部講習会。戸塚来迎寺。出席者三三人　講師として参加（152号）
五月二三～二八日　大日本連合女子青年団、公共生活指導者移動講習会。宇治山田市、名古屋市、東京市の三会場。本県連合女子青年団とともに参加（154号）
一二月〇七～〇八日　三浦郡女子青年団、家庭改善講習会。三八人参加。訓示後、節約栄養料理の実習。翌日は井上の講話（162号）
この三浦郡女子青年団の講習会における井上常子について、女

子青年団員は次のように記している。

第一日目　会長の挨拶に次でこの催しの生みの親とも言うべき県の井上常子先生の親心こもれる御訓辞を承はり（中略）十時から料理の実習。

第二日目は十一時から井上先生の御講話、先生は遠近の引例により蕭々として女子青年の進むべき道につきお説きになり先生の情誼のこもれる御諭しには一同いつとなし目頭を熱くして聞き入る。午後は講話室に於て別れの茶話会を催す。井上先生を中心に御製御歌の朗誦の後各自所感を述べる

常子の講演の内容は不明ではあるが、女子青年の進むべき道を「目頭を熱くして聞き入る」とあり、信頼感がうかがわれる。指導者としてのゆるぎない位置を築く努力をし、各地区の会員からも敬意をもって迎えられていたのであろう。

一九三七年七月、日中戦争が開始されると九月政府は国民精神運動開始。同年一〇月国民精神総動員神奈川県実行委員会が設置され、戦争への足音が日々騒がしくなっていく。三八年四月には国家総動員法が公布され、県の男女青年団が大会を開催して、「熱烈なる銃後国民の協力」「献身奉公の赤誠を捧げ」（165号）ている。

三八年における常子の活動を『武相の若草』から挙げてみると、次のような状況である。

一九三八年

二月二二～二五日　県下女子青年団幹部講習会　参加七〇人「銃後における家庭経営」、文化洗濯機や栄養に関する話、作法実習、懇談会など（164号）

四月　三日　神奈川県男女青年団大会横浜公園野球場　参加者女子二〇〇人、男子三〇〇人。大会後、県庁前、馬車道、野毛山公園へ。銃後に鉄壁を期す大行進（165号）

五月一七日　高座郡海老名村女子青年会、国民精神総動員、実践要項など　①衣服類の縫製、つくろい　②公衆衛生を守る日その他（166号）

五月二〇日　神奈川県連合女子青年団、理事会と評議委員会。勤労奉仕の実施を進めるため、団則変更を決議（166号）

以上、『武相の若草』より井上常子の活動状況を拾い上げてみた。一九二五年一一月、社会教育主事補に就任当時、県下の女子青年たちを指導して行こうとの意気込みはいかばかりであったろうか。少し気負いすぎて、高津女子青年会の講習会では思わぬ失敗もあったが、最後には不遜な態度を謝罪した。その反省に基づいてか、その後の講演会などでは敬意をもって迎えられている。女子青年たちを真剣に指導していたことが理解できる。

それにしても、戦時体制の中に好むと好まざるとに関わらず巻き込まれ、銃後の護りを積極的に指導していったことは否めない事実であろう。

また、女子青年会以外での活動を要請されていたこともあったようで、一九三五年ころには、愛国婦人会神奈川支部とも共催して農繁期託児所保育指導者講習会に講師として参加している。

一九四〇年には、女子青年団の指導とともに婦人会の指導者にもなっている（『神奈川県職員録』）。

五　井上常子と帝国女子専門学校

井上常子は本名をツネと言い、一八九六（明治二九）年二月一〇日、栃木県那須郡西郷村大字仲内五番に生まれた。

宇都宮実践女学校を出て、私立英和高等女学校に入学。さらに、東京小石川区（現、文京区）大塚にあった帝国女子専門学校（現、相模女子大学）へ入学し、一九二三（大正一二）年三月、特科家事科を卒業する。

井上常子
相模女子大学理事として

『相模女子大学六十年史』より

一九二三年、帝国女子専門学校は第一回の卒業生を社会に送り出した。各学科を合わせて二八人である（『相模女子大学六十年史』53頁、一二年説もある60頁）。

各学科の卒業生人数は左記の通りである。

本科家事科　一二名
同　国文科　一〇名
同　主婦科　二名
特科国文科　二名
同　家事科　一名
選科国文科　一名

帝国女子専門学校は、一九〇〇（明治三三）年西沢之助によって日本女学校が創立され、それを母体として一九〇九年に創設された学校である。

創立者の西沢之助は、日本女学校設立の趣旨に「婦徳養成の基本は、我が国史の上におのづから備はれる高潔善美の良風即貞淑賢良の婦徳より善きはなし。」「専ら質素を旨として着実なる教育を施し、（中略）知識と徳行と相待ちて我が日本女子の本分を全からしめんことを主とす」とあり、日本婦道に重きを置いている。

さらに、女子大学設立を計画し、設立趣意書を文部省に提出するが、大学としては認可されず、ようやく、一九〇九年、専門学校として認可されたのである。この時期、女子の学校は専門学校のみで、大学はゼロであった。

帝国女子専門学校の学則によると、学部を本科、特科、選科に分け、さらに本科を四部にわけている。

本科　第一部　国文科、人文科、史学科
同　第二部　理化学科
同　第三部　家事科、裁縫科、手芸科
同　第四部　主婦科
（第一部史学科と第二部理学科は、しばらく設置されず）

本科は修業年限三年。入学者は、一六歳以上で四年以上の高等女学校卒業者、およびこれと同等以上の学力を有する者、師範学校卒業者、専門学校入学検定合格者など。

選科は本科所属の一科目もしくは数科目を選修。

特科は学歴の不規則なる特志者。本科同様の教科を履修。

教育方針は、「わが国固有の道徳思想を啓発し女子に必要なる高等の学術技芸を授く」「社会においては婦人のエリットなり、家庭にあっては、良妻賢母、優秀主婦の亀鑑たる人を作るにある。」としている。

一方、開校はしたものの帝国女子専門学校は、学生数が少なく経営は困難な状態が続いた。そのためか卒業生を送り出すのに十数年かかっている。

このような中、常子は一九二三年に卒業したのであるが、この年が最初の卒業生を輩出した年であるならば、第一回の特科家事科のただ一人の卒業生である。すでに二七歳であり、早速、神奈川県庁に就職したものと思われる。

なお、第一回卒業生たちは、同窓会を結成し、相互親睦とともに母校後援の活動にあたっている。卒業生の中でも年長だったであろう常子の采配も、大きかったのではないかと思われる。また、文部省による中等教員検定試験の成績の向上や、社会状況の進展の影響などで卒業後の社会進出を望む卒業生も増え、積極的な意欲がたかまってきた。さらに、一九二八年に家事科が、三二年には国文科が無試験の検定資格が認可された。

こうして入学者が全国各地から集まり来る傾向が著しくなり、卒業生の就職先は各府県の教育界や社会各方面に進出、活動範囲を広げていった（『相模女子大学六十年史』）。

しかし、学校は一九四五年、東京大空襲で被災し壊滅状態となった。やむなく東京の地を離れ、相模原市鶴間に新たに学校を建設する。校名も相模女子大学と改名した。

のちに、常子はこの相模女子大の理事として、一九五四年九月から六三年五月まで就任している（『相模女子大学八十年史』）。

六　戦後の活動

戦前の常子は、神奈川県連合女子青年会の研修会や指導者講習会、総会、各地の青年会の講演などの指導にあたり、大日本連合女子青年会の指導者として、銃後の女子青年たちの指導を積極的に行った。また、愛国婦人会の指導にも携わり、神奈川県支部の書記としても活動した。

戦後、皇国思想や考え方、価値観などが一八〇度転換した。そんななかで、戸惑いも多かったのではなかったろうか。常子がどれだけ民主主義を理解できたかは不明であるが、社会主事補に就任した頃の意気込みを思うと、戸惑いは多かったと思われるが新しい時代、新しい社会に対応できる資質は備えていたものと考えられる。

彼女の意思に関わらず、戦後民主化の動きは早く女性問題など課題が山積みしていた。当然、社会教育課の指導者としての役割は大きく、民主主義にもとづいた改革を担わなければならなかった。県内の女性たちの動きをよく把握しているのは彼女であったから、そのまま仕事を継続する。

一九四七年九月、労働省が創設されその一局として婦人少年局が発足した。局長には山川菊栄、婦人労働課長に谷野せつ、婦人課長に新妻イトが就任している。

翌四八年五月、常子は初代神奈川県婦人少年室長に就任した。同年九月一日、『婦人少年局月報』が発刊される。局長の山川菊栄は、婦人少年局の主な任務について次のように記している。

女子及び年少労働者、並びに一般婦人についての資料の蒐集、実態調査、それにもとづいて政策をたてること、資料を

公表して一般の参考にそなえることなどであります。（中略）日本民主化のためには、婦人及び年少者の地位が改善されなければならず、それをするためには、具体的な現在の実態をはっきりつきとめる必要があります」（山川菊栄「月報の発刊に際して」『婦人少年局月報』一九四八年九月一日）と。

常子は、戦後の民主主義を理解するための努力を重ね、必死で仕事に取り組んでいたのではないか。女子や年少者、女たちの実態調査、資料蒐集など婦人少年室の仕事は多忙を極めていたものと思われる。また、県庁との連絡も密にしなければならず、ストレスのたまることも多く、時には周辺の人にそれをぶつけることもあったかもしれない。

当時、神奈川婦人少年室に常子とともに勤務していた志熊敦子は、次のように語っている。

戦後、私（志熊）が帝国女子専門学校（現、相模女子大学）に復学したころ、井上さんが学校に講演に来た。前後の内容は覚えていないが、「戦後、タケノコのように女性の公務員が生まれましたが、私もその一人です」と話した。その言葉が忘れられない。

一九四八年一一月、神奈川県の労働省婦人少年室の勤務になったとき、占領軍は社会教育、女性問題に熱心であった。そんな折、井上さんと県庁に呼ばれた。満員のバスに乗って出かけたが、そのバスの中で「あなたは、私の後輩のくせに県教委に入った」と怒鳴られた。大勢の中で怒鳴られて、もうびっくりした。当時、井上さんは仕事をめぐって、県教委とうまくいっていなかった。井上さんの立場がなかった。そんなこともあってイライラし、うっぷんを爆発させたようだった。

また、井上さんは戦前、専門職として男性の中で働き、個性豊かでカリスマ性があった。が、それが戦後の社会では受け入れられず、県教委や占領軍と対立し、抑えられていた。

（聞き書き・テープ二〇〇六年四月五日）

神奈川県労働省の婦人少年室に勤務した常子だが、戦後の社会に溶け込むことは、なかなか困難であったようである。

翌四九年八月には婦人少年室長を辞任した。

戦後の民主主義は、彼女の思考範囲を超え、それに適応するのには時間のかかることが多く、苛立ちも多かったのではないかとも思われる。

常子のその後の活動については、調査不足のため不明であるが、一九五五年、神奈川県社会教育課発行の『社会教育便覧』によると、県婦人問題研究会のメンバーに名前を連ねている。会員には元県教育委員の平野恒子、同吉田セイ、婦人議員連盟の山口スエ子などそうそうたる方々三六人が参加している。常子はまた「五月会」に所属し、会の運営などにも当たっていたのではないかと思われる。また、当時は横浜市鶴見区東寺尾町に住んでいたもようである。さらに、相模女子大学の理事を、一九五四年九月から六三年五月まで務めあげた。

おわりに

戦前働く女性の少ないなか、専門職として男性に伍して働くことは男性以上の努力が必要であり並大抵のことではなかったであろう。それができたのは彼女の精神力と努力、そして「カリスマ性」があったからであろうか。しかし、戦後の社会は、彼女の其れまでの努力を一変に覆してしまった。

井上常子の研究をするには、まだまだ資料不足ではあるし、『武相の若草』を中心にしたとはいえ、十分な解析ができているとはいえない。ただ、『武相の若草』から女子青年たちの息遣いを感じることができ、常子が彼女たちに真剣に対応し、まじめに働いていた姿がみえてきた。まじめで真剣であったからこそ、国策にも従順であったのだろう。この時期、すべての国民が戦時体制の中で戦争に加担した事実は否めない。

貧しくともまじめに働いている人々が、一様に国策遂行の方向に歩みだし、戦時体制に組み込まれていった時代。人が意識するとしないとに関わらず、じわじわと絡め獲られてしまった時代。そのような時代を再現してはならないと思う。

参考文献

神奈川県知事官房編『神奈川県職員録』一九二六年～四一年
婦人少年局『婦人少年局月報』第一号　一九四八年
婦人少年協会『婦人と年少者』創刊号　一九五三年
高津青年団文芸部発行『騎士』高津青年雑誌　一巻一号～二巻四号　一九二六年
川崎女性史編さん委員会『多摩の流れにときを紡ぐ―近代かわさきの女たち』一九九〇年
さがみ女性史研究会「さねさし」『続・あつぎの女性―民権家子孫の聞き書きと女性史年表』二〇〇九年
神奈川県連合女子青年会『神奈川県女子青年会概況』一九二八年
『横浜貿易新報』一九二五年～三八年
学校法人相模女子大学編・発行『相模女子大学六〇年史』
一九六〇年
相模女子大学八十年史編集委員会『相模女子大学八〇年史』一九八〇年
文部省社会教育会編集『社会と教化』一九二一～二三年
文部省社会教育会編集『社会教育』　一九二四～四〇年
神奈川県教育庁社会教育課編・発行『社会教育便覧　社会教育資料　第四〇号』一九五五年

女子青年会指導者から大陸の花嫁学校経営へ

―原モトの軌跡―

安井　恵子

はじめに

二〇〇一年発行の『史の会研究誌～女たちの物語を再生する～』（第四号）で私は「花嫁道具はボロとつけもの石―横浜の『大陸の花嫁』訓練所」を書き、県下の花嫁学校を取り上げた。

満州事変によって手に入れた中国東北部を「満州国」と名付けて日本の傀儡政権を樹立し、日本からの移民を奨励。そして移民が定住をするようにと独身者への花嫁斡旋をした。その花嫁を養成する施設が「花嫁訓練所」「花嫁学校」などとよばれたのである。

訓練所の設置は国を挙げての事業として、県、市町村など公の施設として設けられたが、中郡秦野町で長く教員を務めていた原モトは、自宅を花嫁学校として開放し、自ら入校者の教育をした。全国的に見ても大変特殊な成り立ちの訓練所である。当時の小学校教員は地域のリーダーとして人望を集める存在であった。

研究誌四号に執筆した時は、モトは長い間小学校教員を務め、幼稚園設立など地域への貢献が大きかったことはわかっていたが、女子青年会、婦人会でも活躍していたという事実は、今回『武相の若草』を調べて知ったことであった。

五〇歳で教師を退き、自宅を開放して「大陸の花嫁学校」を開いたことは、教師だけでなく婦人会、青年会など多くの役職を担っていたことと大きな関連があった。ただの花嫁学校ではなく、満州開拓の男性に嫁ぐための花嫁準備をするのが大きな目的であり、それは当時の国策に沿うものだったのである。

『武相の若草』が発刊されたころはすでに、地元の中郡秦野のみならず県幹部として活躍していたモトだが、どのような経過をたどって花嫁学校にたどり着いたのであろう。彼女が生きた時代背景とともに、その軌跡を追ってみる。

女教員への道

一八八六（明治一九）年に東京婦人矯風会が設立され、それと前後して仏教婦人会や慈善会など、女性の社会進出、社会貢献が始まっていた。女性にとって新しい風が吹き始めた一八八九年に、モトは生まれた。

一八九四年、五歳になった時に日清戦争がはじまり、以後日露、日中、太平洋戦争と戦争の時代でもあった。

戦時下では、国家は民意を一方に向けるために青年会などの設立を奨励し利用した。その時代の真っただなかの人生であった。

生まれは中郡大根村（現、秦野市）。家は麹屋で、兄は村長を務めた旧家である。大根村尋常高等小学校を卒業して小学校准教員をしていたが、一九〇七年に県女子師範学校が開設されると教員を退職して、入学する。正教員の道を求めての転身である。

当時の学校制度について

小学校令及び教育に関する勅語が公布され、国家体制に即応する教育の基盤が確立されたのが一八九〇年。

翌一八九一年の、中郡秦野地方における小学校令による学校と学区は次のとおりである。

尋常曽屋小学校、尋常田原小学校、尋常東雲小学校、尋常開進小学校、尋常渋沢小学校、尋常堀小学校、尋常南秦野小学校、尋常北秦野小学校、尋常大根小学校、尋常上秦野小学校。

教員には正教員、准教員があり、それぞれに資格試験があった。正教員受験資格は男子二〇歳、女子一八歳以上。原則として准教員の資格をもち、一年以上公立小学校教員として在職していること。准教員の受験検定資格は男子一七歳以上、女子一五歳以上。正、准教員とも、教員に相応した品性の持ち主であること、などが定められていた。また検定には無試験の甲種検定と試験の乙種検定があり、その資格も細かく定められている。

一九一一年、二二歳で師範を卒業したモトは正教員の免許を得て、中郡曽屋小学校に迎えられる。以後そこで二八年間教師を務めた。

モトが教師となった明治末から大正にかけては、尋常小学校制度が四年から六年になり、秦野地方では一九〇〇年からは就学の支障になっていた授業料を徴収しないことに決まったため、就学率も年を追うごとに上昇、教員の不足が問題となってきた。それを補うために中郡教育会は一九〇九年四月から翌年二月までは准教員養成講習会を持った。また現職教員の資質の向上をはかるために各種講習会、授業研究なども盛んに行った。

モトも積極的にそれらの講習を受けた様子が見られる。

全国小学校女教員大会開かる

一九一七（大正六）年、モトが二八歳の時に、第一回全国小学校女教員大会が開かれた。

「全国女教員会設立事情」は『史の会研究誌』第一号の西川孝子「自己と時代に目醒め、使命に生きた女たち―横須賀市小学校女教員会について―」に詳しい。

日本は明治初期から学制を整備し、義務教育を定着させた。就学率が上がり、義務教育が四年から六年になると教員不足が社会問題になり、明治政府は安く使える女教員の育成をはじめた。その結果大正期には女教員の数が全国教員の三分の一を占めるまでになったが、その社会的地位は低く、不当な評価を受けていた。その誤解を解き、しかも女教員の努力精励を促す意味で全国小学校女教員大会が、一九一七年一〇月に開かれた。

この大会で、「女教員の産前産後休暇」「有夫女教員の半月勤務」「女教員の適・不適学級」等について話し合われたことは画期的なことだった。その誕生に手を貸したのは、帝国教育会傘下の各府県教育会で、半官製であるが、女教員が自分たちの待遇改善や、教師としてのあり方などについて考え、積極的に意見を述べるようになったことは大正デモクラシーの時代思潮を背景にした女性解放運動の高まりとも呼応

するものだった（前掲西川論文）。

年々女教員大会への出席者は増加し、一九二四年の第四回大会後、全国小学校連合女教員会を結成し、わが国最初の女教員の全国組織となった。

モトは一九二五年の第五回大会、一九三〇（昭和五）年の第一〇回大会に秦野地方代表で参加した。その年一一月には神奈川県連合女教員会副会長に就き、翌年には中郡教育会から教育功労者として表彰を受ける。

『神奈川県教育』にモトの文章を見ることができる

二二二号（一九二四年）では「小学校教育の大任は女教員か男教員か」の題で、役職が女には不向きと決めつけず、人材を適所に用いることが国家教育の伸展をはかる」との持論を述べ、二六七号（一九三〇年）には「神奈川県連合女教員会創立す」と題して、長い間の努力が実って連合女教員会が発足した喜びとともに、今後発展させていくことに努力することを強く望むとの一文が掲載された。

幼稚園の設立

秦野町で自慢のものは「上水道（一八九〇年五月・配水）に幼稚園」といわれた、幼稚園の設立は県下でも早い一九一四年で、小学校以前の教育機関として秦野に開園されたことは特筆すべきことであった。主婦ら三人が幼児教育の大切さを説き働きかけたことで実現し、ここに原モトがかかわっていた。

当時の様子を『秦野市史』はつぎのように記す。

大正二年六月十四日の『横浜貿易新報』は「幼稚園の設立」の見出しで次のように報じている。「中郡秦野町横溝モト、三武ナミ、平野セン諸氏の発起に依り此程幼稚園を設立さる十二日開園せるが幼児の入学せるもの四十名に達し当町各家庭に於ても大いに歓迎しつつあるより漸次発展すべし」と。当時幼稚園は県下で、公立四園、私立十五園で、園児数も僅かに一〇〇〇人を超える程度であった。（中略）

素人の三女性の発想に助言を与えたのが曽屋小学校勤務の女教師原であった。明治二十二年生まれで、まだ二十代前半の年齢であったが、神奈川県女子師範学校第一回卒業生で、女子青年会、婦人会等で人にさきがけ、積極的に仕事を進めた人物である。

と、二〇代ですでに圧しも圧されもせぬリーダーであった。開園後は、主任となって幼稚園経営にも関わり、教育者としての資質が認められていた。

幼児から花嫁学校に至る、女のライフコースを教育者として見事にかかわって生きていくのである。

婦人会・処女会・女子青年会の結成と活動

明治末から大正期にかけて、秦野地方にも婦人会が設立されてくる。『横浜貿易新報』の記事からひろってみると

一九〇九年　中郡大山町教育婦人会
一九一一年　中郡金目村婦人会発会式
一九一三年　中郡秦野婦人会
一九一四年　中郡秦野婦人会を秦野町婦人会に改組
一九一五年　中郡大根村婦人会発会式

などがある。

一九一三年、弱冠二四歳でモトは秦野町婦人会の総務に選ばれ、

このころから彼女の活躍は広がっていったとみていいであろう。

一九〇三年、仙石原に結成された「乙女会」が県における処女会設置の最初である。「処女会」という名称が使われたのは一九一〇年に結成された、愛甲郡高峰村が県下初である。そして一五年、青年団強化の訓令が出される。

『秦野教育史』によると、秦野地域の処女会結成時期は

一九一三年　東雲処女会
一九一四年　田原処女会
　　北秦野村処女会（翌年女子実業補習学校併設）
　　開進女子校友会
　　南秦野村処女会
一九二二年　上秦野村処女会
一九二三年　秦野町処女会（秦野町婦人会から処女部発足）
一九二三年　東雲、田原、開進が統合され東秦野村処女会となる
一九二四年　西秦野村処女会
　　大根村処女会

と、一三年から二四年の一〇年間に各村に結成されている。会員は地域に居住する一五歳以上の未婚女性で、各小学校の卒業生を中心に集められたこともあり、会長には地区の小学校長、理事などの役員には小学校の女教師が当たるなど、学校主導型の運営であった。そのためモトら教員は会員の指導にも活躍する。

当時の処女会はどのようなものだったのであろうか。秦野市史資料に残る「上秦野村処女会菖蒲支部」の「処女会会則」から主だった会則をひろってみる。

第一条
本会ハ勅語ノ御趣旨ヲ奉体シ日常生活ニ必要ナル智能ヲ磨キ兼テ婦徳ノ養成ヲ以テ目的トス

第三条
本会ハ本村ニ居住スル十五才以上ノ未婚ノ婦女子ヲ以テ組織ス

第四条
本会ハ左ノ役員ヲ置ク
支部長副支部長各一名幹事五名
各役員ハ会員之ヲ選挙ス
役員ノ任期ハ一ヶ年トス但シ再選ヲ得

第六条
本会ハ第一条ノ目的ヲ達セシガ為毎年一月七月二回総会ヲ開キ左ノ事項ヲ挙行ス
一、修養講話会
二、日常生活改善ニ関スル講習及講話会
三、敬老会及慈善会ノ実行
四、敬神宗祖ノ実行
五、視察旅行ノ実行
六、共同貯金ノ奨励
七、其他修養ニ適切ナル事項

第七条
会員は本会ヲ維持スル為総会ノ都度会費トシテ金二拾銭ヲ納ル事
但シ会費ノ剰余ヲ以テ基本財産ヲ作ル事

第八条
会員ハ開会ノ際出席スルニハ凡テ綿服トス

第一一条　昭和三年七月増補
我が支部内にて火災ありたる時は相当の見舞いをなす事

尚当支部にかかわらず援助する事
満三年以上会にはいられた人には金一円五拾銭ぐらいの記念品をあげる事又三年以下の人には金八拾銭ぐらいの記念品をあげる事

そして、出納帳からは集まりの際の茶菓代、記念品、外部へ出かけた時の旅費、車代、災害に対する見舞金などに費用が使われているのが分かる。

『武相の若草』に報告されている中郡の処女会の活動は

総会における講演会や映画会
鎌倉江の島への遠足や新年会
青年会と合同での運動会

などあり、他地区との違いはあまり見られないが、煙草作に関する講演会（煙草の歴史、苗床の管理、準備、定植）や専売局収納所、製造工場、煙草耕作活動写真の見学というのは葉煙草産地ならではのものである。

また、中郡誌編纂資料によると、一九二三年に東雲、田原、開進の三校が統合され、東秦野村処女会が発会したが、会則が制定されたのは一九三二年で、それは「従前より一層本会の主旨団員の心得等明瞭確実となり、事業も会則に従い之を行い今日に及べり」と、次のような事業を挙げている

1 精神修養的施設（読書、談話等各支部にて適当に行う）
2 高齢者の慰敬、篤行者の彰善（運動会、学芸会の際敬老会開催）
3 社会公共的奉仕及施設（神社、道路の清掃及出征軍人に対する慰問等）
4 講習会、講演会、体育会、研究会、展覧会（主として農閑期）
5 視察、見学、旅行、遠足
6 総会（春秋二期に行う、この際講演会及会員の学芸発表等をなす）
7 其他必要と認むる事項

そして実際の計画は

一、郷土見学（次の三ヶ所）
　1 伏見屋機械工場
　2 秦野専売局出張所
　3 秦野試験場
一、傷痍軍人及軍人遺家族奉仕週間中、本村内戦死者の墓参
一、満州事変勃発一周年記念に忠魂碑参拝
一、春秋期総会（左記の事を行う）
　1 婦人衛生に関する講演会
　2 会員の学芸発表
一、満州出兵に対する慰問（慰問文及慰問金発送）
一、秋季運動会（小学校に参加）
一、敬老会開催（小学校に於ける運動会展覧会の際）
一、手芸品展覧会開催（小学校に参加）
一、農村向料理及野菜菓子製造講習会開催
一、凱旋兵の歓迎
一、其他、神社、会館、道路等の掃除及雑巾作製（小学校に寄付）等

と、見学場所が葉煙草産地らしいことを除けば、満州事変が激しくなり戦意高揚の機運がもりあがり、また小学校を中心とした活動が行われていることは、他の地区との違いはないであろう。この時の会員数二二一人、総予算七〇円（内訳　村の補助金二〇円　会員の拠出額五〇円）であった。

一九二〇年に全国の婦人団体は五五七〇、処女会六一八五を数

え、会員数は一二〇万人を超えている。この間に小学校に処女会や母の会の設置を求めることや、校長が青年会の会長を務めることなども奨励された。ここでも教師たちは会の指導に精進することになる。

一九二三年、三四歳でモトは秦野町婦人会女子青年会設立に努力し、結成後は会長に推挙された。

その後関東大震災が起こり、二四年～二五年にかけて処女会は女子青年会に組織替えされ、県下三四四の男子青年団、一六六の女子青年団となる。

中郡女子青年会は二六年に結成され、秦野地域の処女会はすべて加盟する。翌年から処女会は女子青年団と名称を変えて活動を続けた。名称が変わったことによる活動の違いはなかったようであるが、時代が下がり日中戦争が激しくなると銃後の守りが叫ばれ、仕事の大半を占めるようになってくる。

神奈川県では二五年に郡市連合女子青年団、女子幹部研究会を、翌年には、県下各地域で女子幹部研究会を開催した。

『武相の若草』に登場

『武相の若草』に初めて原モトの名前が出てくるのは16号（一九二五年一二月）で、三六歳のとき。

中郡金目村処女会は一八日午後一時より金目小学校に定期総会を挙行　曽屋小学校訓導原モト子　県技師森純一　花山女史の講演あり、出席会員百六十余　盛大であった

この記事では三六歳のモトはすでに講演を頼まれる側であり、広く名前も知れ渡っていたようだ。なおこの一一月に井上常子が女子青年会の指導をする立場で、県社会教育主事補になっている。以後井上は官の立場で、モトは民の立場で同じ舞台に立つことが多い。

次に出てくる記事は39号（一九二七年一一月）

「大日本連合女子青年団　発団式大会及指導者講習会要綱

一、期日　昭和二年十月十、十一日発団式大会

一、会場　日本青年館

一、来会会員　五百名（約）

一一日

一、会員意見発表　女子青年団ノ施設ト指導　「神奈川県代表」中郡　原モト

本県代表出席者氏名　池田民子　県連合会長

戸塚敏子　同副会長

井上常子　同常務理事

原モト　中郡

各地から選ばれた五百人のうち、本県代表四人に名を連ねていて、すでにその存在は確かなものになっている。

一九二八年、中郡女教員会副会長に、次に中郡連合女子青年会副会長に推された。翌年、四〇歳で教化総動員神奈川県委員嘱託となり、各県一名推薦の全国連合女子青年会神奈川県代議員になる。このころの彼女の身分はすでに体制の中心に置かれている。

62号（一九二九年二月）では、日本青年館で六日間にわたり開催された「第三回大日本連合女子青年団大会」と「第五回全国女子青年団指導者講習会」に、県からは井上常子とただ二人だけが派遣された。

一九二九年一二月二四日付の『横浜貿易新報』に「優良女教員紹介　曽屋小学校原もと子氏の功績を称えて」と次の記事が見られる。

秦野町曽屋小学校に一五年勤続の本科正教員原もと子女史は同町婦人会、女子青年団合せて五百五十名の会長とし又神奈川県教育会や日本女教員協会が発行の雑誌に教育上の意見を正々堂々と発表した女史は明治二十二年三月中郡大根村に生まれ小学校を了えると直ぐ准教員検定試験に合格し中郡曽屋小学校に奉職明治四十年初めて神奈川県に女子師範学校創設に当り三百名の志願者中四十名の合格者の中に入り業を卒え再び曽屋小学校に任命され明治四十五年六月私立秦野幼稚園の創設主任に嘱託され一切の責任者となり又大正二年四月秦野町婦人会創立するや総務に選挙せられた大正八年九月中郡教育会主催授業法研究会では三百名の参観者の前で尋常六学年の修身教授をなし明石師範学校教授生島先生より言語態度教授等凡て女教員として稀に見る所なりと激賞せられた大正十二年秦野町立補習学校教授拝命大正十四年五月神奈川県教育会より選抜せられ全国女教員大会出席す、同じく八月山陰、山陽、九州、四国方面教育状況観察をなす同じく五月秦野町に副業奨励会職業部なる者を創設し職業部長となり県よりミシン機其他の機械等を借入れ小学児童教育の傍ら町内有閑婦人に職を与え勤倹奨励の実を挙げている

と、モトの仕事ぶりが丁寧に書かれている。

翌年には県女子師範学校より教育功労者として表彰を受け、設立されたばかりの県女教員会の副会長に選ばれる。

各地に女教員会が次々と設立された年でもあり、「第三回県下女教員協議会」では県教育会から、女教員として服務上特に留意すべき点として「直接任務に精励するほか、同窓会、母姉会、後援会のような学校中心の会のために働き、特に女子青年会の指導啓発に励むべきこと」との諮問も出された。モトの立場からは忠実に率先実行していったことであろう。

76号（一九三〇年一二月）は、「令旨奉戴十周年記念　全国青年団御親閲並に記念式典」があり、天皇に親閲の機会を得たモトは「御親閲と楠正成」でその折の所感を「全国の男女青年に閲を賜うとは、実に恐れ多いこと」と述べ、「帝国の男女青年は先ず霊目霊耳をはっきりあいて、我が建国の由来を自覚し、忠孝一途の道を体行し『古今ニ通ジテ謬ラズ中外ニ施シテ悖ザル』の人となり、各自の業にいそしむこそ大御心にそい奉る事とはなるのであります。」

と若者へ語りかけている。モトの書いたものが『武相の若草』に見られるのはこの一編だけである。

三一年四月には中郡教育会から教育功労者として表彰を受け、81号（一九三一年五月）によると、改選された県連合女子青年会役員の理事に井上常子らと共に名前が挙がっている。そして82号（六月）ではその理事ら八人と共に「静岡県下優良女子青年会　視察旅行に随行。90号（一九三二年二月）では、「県連合女子青年会　役員」と名称が変わっているが、このころは前年に始まった満州事変の影響で婦人連合会、女子青年会などは一致団結して非常時打開に向けての協議や運動が続いた時代である。

その後しばらくは記事がなく、129号（一九三五年五月）で「武相の若草」の集い　県連合女子青年会総会で長谷川トリ、諏訪美登利と共に功労者表彰を受け、被表彰者総代で謝辞を述べる。モトの表彰理由は

女子青年の修養向上に深き関心を有し大正十年秦野町女子青年会を創立、会長として之を経営施設の充実に力め爾来十五年自らその指導経営に当たり成績大いに挙る。

大正十一年中郡連合女子青年会副会長に推選され、昭和二年神奈川県連合女子青年会創立と共に理事の要職に就き共に選を重ねて今日に至る。熱誠克く女子青年団体の発達に尽力し貢献する所頗る多大なり。

三六年、四七歳で神奈川県連合婦人会理事となる。翌年は日中戦争に突入という戦時体制下であった。

そして、156号（一九三七年八月）を最後に原モトの名前は見当たらない。八月二一日、男女青年団時局懇談協議会が県会議場で開催され各都市青年団役員ら五四人が出席。「事態緊迫の折柄頗る緊張して真剣味を帯びた協議会であった」ということで、この時の意見発表者六人のうちの一人でモト以外は全員男性である。モト四八歳。すでに男性と肩を並べていた。

大陸の花嫁学校開校

これまで見てきたように、原モトは十代で准教員となり、正教員となってからは、絶えずリーダー的な存在であった。教師としても、身体検査の結果がよくない生徒に工夫をこらした給食をたべさせるなど面倒見の良い優秀な先生だったとモトの教え子で、長男の妻の八千代は話す。婦人会、女子青年会をはじめとする地域活動も精力的にこなし、みなを引っ張っていったのである。

しかし戦時体制の中で、日本にとって大切な国策であった満州移民を成功させるための要素である、開拓団への花嫁候補を送出することだけは、簡単なことではなかったのではないか。それを成功させるために思いついたのが、自分が花嫁を養成すること。そこで五〇歳を期に教師の職を辞して、自宅でしっかりと教育していくことを選んだ。

一九三九年五月一五日、花嫁学校は、開校された。

『横浜貿易新報』（三九年四月二二日付）は

―此の秦野家庭寮は、花嫁学校と云う可き性質の物で、小学校、高女いずれを出ても家庭向きの婦人に直ぐ役立つと云う事は困難であるのに着目し、修業期間を一ヶ年として其の間に、実際的に役立つ、家事、裁縫、習字、生花、国民作法等此れからの家庭の主婦たる者の心得て置かねばならない事柄をみっちり仕込む方針である

と報じている。

そして九月二二日には花嫁第一号を大陸に送り出す。同じく『横浜貿易新報』（三九年九月二四日付）は「蜜月の旅は　憧れの大陸へ　国策型の新郎新婦　愛甲の拓士と富士紡の女工さん」の見出しで

秦野盆地には珍しい、大陸で活躍して居る拓士と国内産業の第一線に働く職場の女性がはしなくも結ばれ秦野花嫁家庭寮で二十二日午後三時、非常時国策型の挙式をなした

これらの活動も認められたのであろう、一〇月には、政府の要請で満州視察に出かける。

そして彼女の三〇年にわたる活動は、一九四〇年一〇月に勲八等瑞宝章受章につながり、翌年の紀元二六〇〇年記念式典参列者にも選ばれた。

その後も何人かの花嫁を送り出していたようであるが、敗戦はそのようなモトの働きを無にした。満州が夢を託せる地ではなかったことがわかってくる。

おわりに

敗戦後モトは満州へ送った娘たちを供養するための碑を近くの弘法山に建てたいと望んでいたが、果たせないまま戦後間もなく脳溢血で倒れた。

時代を先取る優秀な女性が、教師だったために否応なく体制に巻き込まれ、良しとしていたことが戦後自分を苦しめてしまった。これも戦争の悲劇であろう。

日本は敗戦後、多くの負の遺産をうやむやのうちに葬り去った。移民団、特に花嫁関係の資料はほとんど残っていない。彼女がもう少し長く生きていてくれたら、弘法山に碑が立っていたかもしれない。それは日本が犯した過ちを考えるよすがになったのではないだろうか。

原モト
とても面倒見のよい、穏やかな人柄だった

原モト年表（自筆履歴書・『横浜貿易新報』『武相の若草』『神奈川県教育』ほかによる）

一八八九（明治二二）年三月一二日　〇歳
　中郡大根村に生まれる
一九〇三（明治三六）年三月二六日　一四歳
　中郡尋常高等大根小学校卒業
一九〇五（明治三八）年六月一四日　一六歳
　試験検定により尋常小学校准教員免許状取得
一九〇六（明治三九）年四月一九日　一七歳
　中郡尋常高等四之宮小学校准訓導拝命
一九〇七（明治四〇）年一月八日　一七歳
　中郡尋常高等曽屋小学校に転任
一九〇七（明治四〇）年四月一〇日　一八歳
　神奈川県女子師範学校本科第一部入学
一九〇七（明治四〇）年四月二九日　一八歳
　中郡尋常高等曽屋小学校准訓導を依願退職
一九一一（明治四四）年三月二八日　二二歳
　神奈川県女子師範学校本科第一部卒業
　小学校本科正教員免許状取得
一九一一（明治四四）年三月三一日　二二歳
　神奈川県中郡曽屋小学校訓導任命　八級上俸給与
一九一一（明治四四）年一一月一九日　二二歳
　中郡教育会開設講習会に於いて植物科講習終了
一九一二（明治四五）年四月二一日　二三歳
　中郡教育会開設講習会に於いて普通教室運動法並びに児童遊戯法の講習終了

一九一二（大正元）年八月一五日　二三歳
神奈川県教育会開設の夏季講習会に於いて歴史科講習終了
一九一三（大正二）年四月　二四歳
秦野町婦人会総務に選出
一九一三（大正二）年一一月三〇日　二四歳
中郡教育会開設講習会において心理図画二科の講習終了
一九一四（大正三）年三月二五日　二五歳
八級下俸給与
一九一四（大正三）年七月　二五歳
秦野幼稚園創設　主任兼職
一九一五（大正四）年　二六歳
このころ結婚。夫は税務署勤務の原大丈夫
一九一七（大正六）年五月三一日　二八歳
年功加俸年額三六円支給
一九一七（大正六）年　二八歳
秦野幼稚園主任解任
一九二〇（大正九）年三月三一日　三一歳
六級下俸当分三二円給与
一九二〇（大正九）年　九月三〇日　三一歳
八級下俸給与
一九二三（大正一二）年五月　三四歳
秦野町婦人会女子青年会長に推挙
一九二四（大正一三）年九月三〇日　三五歳
秦野町立実業補習学校助教諭兼任
一九二四（大正一三）年　三五歳
夫死去
一九二五（大正一四）年五月　三六歳
県教育会より選ばれて第五回全国小学校女教員大会に出席
秦野町に副業奨励会職業部創設
一九二五（大正一四）年八月　三六歳
山陰、山陽、九州、四国方面へ教育視察
一九二五（大正一四）年一一月一八日　三六歳
中郡金目村処女会定期総会で講演
一九二七（昭和二）年七月　三八歳
神奈川県連合女子青年会理事嘱託
一九二七（昭和二）年一〇月一一日　三八歳
大日本連合青年団発団式大会及指導者講習会で意見発表
「女子青年団の施設と指導」
一九二八（昭和三）年四月　三九歳
神奈川県中郡女教員会副会長に推挙
一九二八（昭和三）年一〇月　三九歳
中郡連合女子青年会副会長に推挙
一九二九（昭和四）年一月　三九歳
「第三回大日本連合女子青年団大会」「第五回全国女子青年団指導者講習会」に派遣
一九二九（昭和四）年一〇月　四〇歳
教化総動員神奈川県委員嘱託
全国連合女子青年会神奈川県代議員（各県一名）に推挙
一九三〇（昭和五）年　四一歳
第一〇回全国小学校女教員大会に出席
一九三〇（昭和五）年一〇月　四一歳
神奈川県女子師範学校より教育功労者として表彰
一九三〇（昭和五）年一一月　四一歳
神奈川県連合女教員会副会長に推挙

一九三〇（昭和五）四一歳
『武相の若草』76号に「御親閲と楠正成」掲載
一九三一（昭和六）年四月　四二歳
中郡教育会より教育功労者として表彰
一九三一（昭和六）年五月　四二歳
神奈川県連合女子青年会役員に選ばれる
一九三一（昭和六）年六月　四二歳
県連合女子青年会役員八人とともに「静岡県下優良女子青年会　視察旅行」に随行
一九三四（昭和九）年三月　四五歳
神奈川県連合女子青年会より青年教育指導功労者として表彰
一九三六（昭和一一）年三月　四七歳
神奈川県連合婦人会理事嘱託
秦野尋常高等小学校訓導として八級俸給与
一九三六（昭和一一）年五月　四七歳
文部省より満鮮地に教育情報視察を命ぜられる
一九三六（昭和一一）年五月三一日　四七歳
県教育会より勤続二五年の表彰
一九三七（昭和一二）年八月二一日　四八歳
男女青年団時局懇談協議会に出席、意見発表
一九三九（昭和一四）年三月三一日　五〇歳
教師退職
一九三九（昭和一四）年五月一五日　五〇歳
秦野家庭寮（大陸花嫁養成所）開寮
一九三九（昭和一四）年九月二二日　五〇歳
家庭寮の生徒が大陸の拓士と結婚
（秦野家庭寮からの花嫁第一号）
一九三九（昭和一四）年一〇月　五〇歳
拓務省の委嘱により満州移民団の現地研究のため一か月間大陸に派遣
一九四〇年（昭和一五）一〇月　五一歳
勲八等瑞宝章受章
一九四一年（昭和一六）五二歳
紀元二六〇〇年記念式典参列者に選出、記念章交付
一九四七（昭和二二）年三月一六日　五八歳　死去

参考文献

『武相の若草』各号
『秦野市史』第一巻、第五巻　通史3近代、一九九二年　秦野市
『秦野市教育史』第三巻　通史編　二〇〇七年
『秦野市史研究』第五号・第一三号　一九八五年・一九九三年
『神奈川県中郡秦野尋常高等小学校　創立七十年沿革誌』一九四〇年
『神奈川県教育』
『横浜貿易新報』
「処女会会則」上秦野村処女会菖蒲支部　一九二八年増補
「中郡誌編纂資料　東秦野尋常高等小学校　郷土調査　第壱回」昭和一六年　紀元二六〇〇年式典関係書類
『史の会研究誌～大正の響きをきく～』（第一号）一九九一年　史の会
『史の会研究誌～女たちの物語を再生する～』（第四号）二〇〇一年　史の会